

ISSN 0387-6934

研究紀要36

2018

鶴川女子短期大学

目 次

【建学の精神】

- タマシン・アレン宣教師と頌美（ほまれ）学園の教育 ……………百 瀬 和 男 …………… 1
- 高等学校の徳育科の授業案『詩人の八木重吉について』……………百 瀬 和 男 …………… 11

【研究論文】

- 「自然遊び」を通して学ぶ短大生の幼児に育む3つの資質・能力の理解 ……………入 江 和 夫 …………… 13
福 地 昭 輝
元 鍾 彬
入江三津子
宮 有佳里
近 澤 友 理
- 学生による絵本づくりと読み聞かせ実践による効果
～幼児が「園外保育を安全に」を理解できる観点から～ ……………入 江 和 夫 …………… 27
入江三津子
福 地 昭 輝
宮 有佳里
近 澤 友 理
- 保育者養成校における学生の学修成果に関する研究（2）
—学生の自己評価の結果から— ……………中村 麻衣子 …………… 43
入 江 和 夫
- 日領時代の臺灣に於ける“蠶業”
—郡是製絲株式會社の進出と霧社事件— ……………池山せりょう …………… 51

【実践報告】

- 日本の幼稚園における英語イマージョン・クラス設置の試み ……………中村麻衣子 …………… 59
橋 元 知 子
矢野真里絵

【調査報告】

保育者養成短期大学卒業生の学習成果の分析

～平成26年度生のフォローアップアンケートと

在学生へのフィードバックから～入 江 和 夫 69

相 澤 京 子

大 見 由 香

中村麻衣子

福 地 昭 輝

小林真由美

田中由起子

保育者養成短期大学卒業生に求められる学習成果の分析

～平成27年度生の就職先アンケートから～入 江 和 夫 81

相 澤 京 子

大 見 由 香

中村麻衣子

福 地 昭 輝

小林真由美

田中由起子

タマシン・アレン宣教師と頌美（ほまれ）学園の教育

Missionary Tamasine Allen and the Education of Homare Gakuen

学校法人明泉学園学園長（カトリック世田谷教会信徒） 百瀬 和男

- (1) 2011年3月11日の東日本大震災は東北地方に国民の関心を向けました。2013年の春から夏にかけてのNHKの朝の連続ドラマ「あまちゃん」は岩手県九戸郡久慈市をロケ地に選びました。20世紀の高度経済成長期の前、九戸郡は、東京より開発が百年遅れているとも言われてきました。その中心に開けた久慈も「陸の孤島」と言われ、交通不便な町でした。上野駅朝7時発の東北本線の急行「うみねこ」に乗ると、6時間で岩手県の一関駅に着き、さらに6時間ほど乗ると、現在の三陸鉄道の久慈駅に着きます。岩手県は広いと思いました。岩手県の県庁のある盛岡から久慈までは、バスで冬季は3時間半をかけて北上山（高）地を越えます。途中で葛巻や平庭高原があります。車内は暑すぎる暖房と持ち込まれた漬物の臭いで大変でした。
- (2) アメリカン・バプテスト派の婦人宣教師ミス・タマシン・アレン先生は1915年に来日、1917年に仙台市の尚絅女学校の教師となります。1928年にはシカゴ大学の大学院でジョン・デューイの教育学などの学びを修了します。1929年には盛岡市の内丸教会付属内丸幼稚園の園長となります。1930年には小原（後に結婚して矢幅姓）クニ宣教師が米国での4年間の学びを終えて帰国し、アレン先生を支えて東北の各地で伝道活動を行います。

そして、ベルリン・オリンピック出場を目指していた矢幅武司牧師が協力者になります。1933年には三陸大津波があり、大規模な援助活動を開始します。ところが内丸教会側からの要求もあって、1938年にアレン先生は盛岡を離れます。そして、九戸郡の各所に幼稚園（保育所）を作り、久慈には久慈幼稚園を開設します。1940年にはウィリアム・メレル・ヴォーリズ氏の設計による新園舎を完成させますが、日米開戦の為、1941年からは盛岡、仙台、福島などの収容所生活を送ります。暖房のない部屋で体を弱め、顎に後遺症が残りました。カトリック信者が好意的で親切に世話をして下さり、武司先生が訪問した時も便宜を図って下さったとのことです。アメリカに帰国してからのアレン先生はツルレーク日本人強制収容所で日本人の為に奉仕をしました。



写真1 宣教師ミス・タマシン・アレン先生



写真2 母の日のアレン先生

- (3) 1947年にアメリカから日本に戻ったアレン先生は、無医村の多い九戸郡に久慈社会館附属診療所を開設し、無料の診療を日本赤十字社と協力して行いました。九戸郡の人々には大層感謝されていました。ところが医師会側からの要求もあって、1963年に閉じることになりました。社会館と呼ばれている久慈クリスチャンセンターは、1948年から1962年まで農民福音学校を開きます。そして、酪農センター岩手酪農学校を大野村に開校します。また、軽米町に栄光幼稚園を開園します。園長には岩手師範を卒業した上岩きゑ先生が就任します。園児の根崎（旧姓は滝音）順子さんは現在、学校法人明泉学園鶴川高等学校（東京都町田市三輪町）の職員として働いています。
- (4) アレン先生を支える協力者は、矢幅武司牧師と矢幅クニ宣教師の御夫妻、矢幅光三牧師と矢幅艶子久慈幼稚園園長の御夫妻、小原キミ教会執事の5名でした。武司先生と光三先生は兄弟です。クニ先生とキミ先生と艶子先生の3姉妹は、日本基督教団淀橋教会の小原十三司牧師の姪に当たります。なお、矢幅武司先生は、近江兄弟社のウィリアム・メレル・ヴォーリズ先生、桜美林学園の清水安三先生と義兄弟の契りを結んでいます。久慈幼稚園の2階はバプテスト久慈教会の礼拝堂となりました。



写真3 アレン記念（バプテスト久慈）教会

そして、幼稚園の日曜（教会）学校をさらに発展させようと考えました。神に栄光を帰するという意味の頌美（ほまれ）の文字を当てて、学校法人頌美学園頌美小学校と頌美中学校を1952年と1958年に開設しました。さらに、1970年1月にはアレン短期大学英語英文科の設置が認可されました。アレン先生の個人名を短期大学の名称としたのは、武司先生です。文部省（現、文科省）の担当官から質問され、即座に「名称はアレン短期大学とします」と答えたそうです。英断でした。

- （5）聖書に忠実な信仰に立つプロテスタントのキリスト教雑誌「百万人の福音」（いのちのことば社発行）は毎月、日本の津浦浦に発送され、創造主である神と救い主であるイエスを証ししています。1970年3月号にはグラビア写真と本文記事にアレン短期大学と矢幅クニ先生が大きく取り上げられています。牧場やバイブル・キャンプの写真もあって、私は東京・新宿にある淀橋教会の牧師小原十三司先生に連絡先を聞き、押しかけ女房のような形で頌美学園に教員採用されました。2月の寒い夜、淀橋教会のヒマラヤスギの下で4時間ほど立って待ち続けたのが、“就職の意志が本物”と評価されたと聞きました。当時の在籍者は頌美小は40名、頌美中は15名、アレン短大は初年度ということもあって4名、幼稚園は約80名、静敬洋裁学校は数名、酪農センターは数名でした。教職員への給与はアメリカのクリスチャンたちからアレン先生への個人的な献金を元にしていました。
- （6）ある年の6月、宣教師館でアレン先生が私に語って下さった言葉を次に記します。「頌美学園は、アメリカン・バプテスト派のミッション・スクールです。もし、キリスト教について教え、学ばせたいと考えるならば、それは神学校という場で行えばよいことです。しかし、この学園は教育を行い、人格を完成する学校なのです。日本の教育基本法には、『教育は人格の完成をめざし……』と書かれています。法律は徳目が文字として印刷されているだけで、形式にとどまってしまう。この学園をアメリカのケネディ大統領の特使としてライシャワー駐日大使が訪問して下さいました。奥様のハル夫人（日本人。アメリカ国籍を取得）も一緒でした。大使は『頌美学園は本当の教育をしていますね。子どもたちの目が生き生きと輝いていますね……』と誉めて下さいました。この学園は生きた教育をしているのです。真の人格教育は、イエス・キリストによって作り上げられると私は確信しています。聖書のヘブル書12章2節にも、『完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか』とあります。キリスト教



写真4 牧師 矢幅武司先生



写真5 宣教師 矢幅クニ先生

- の根本原理は、ルカ伝10章27節の『あなたの隣り人を愛せよ』の一語に尽きます。隣り人とは、神様と人間の両方です。好きな人を愛することは誰にでもできますが、嫌いな人をも愛していくのです。それは他人を中心とした生活ということになります。今の世の中は、“自分、自分、自分のことばかり”で、利己心からの主張を繰り返す人が多くなっています。そのために“義務感や責任感を考えること”が乏しくなっています。この学園からは人格的にすぐれた指導者を世に送り出したいと考えています」
- (7) 戦前・戦時中だけでなく戦後も基督教への迫害は苛酷なものがありました。敷地内のアレン短期大学の校舎を増築しようとした時には久慈市の許可がなかなか下りず、大きな代償を支払いました。毎年12月には、私とアレン先生は、武司先生が運転するジープに乗り、北上山地の各地域でクリスマス会を開きました。仏教徒の多い地域では歓迎されず、公民館のストーブも冷たいままでした。アレン先生自ら薪をくべ、火をつけていました。武司先生は会場を作り、私は雪原に出かけ、家屋を一軒一軒尋ねてはクリスマス会のあることを伝えて勧誘しました。
- (8) 1975年に、アレン先生は足をすべらせて骨折し、病院に入院しました。学園のグラウンドに、たんぽぽの花が一面に咲くなか、アレン先生の乗る車を見送りました。盛岡の病院ではアレン先生に好意的なカトリック信者がスープなど、先生の希望なさるものを差し上げていました。1976年6月7日にアレン先生は日本人の為の61年間の宣教活動を終え、85歳で天に召されました。その後、矢幅光三牧師（理事長・学長）や御令息の牧（まき）牧師、協先生、敬先生たちの募集努力によりアレン国際（国際を付加）短期大学の新入生が100名を超える年度が続きましたが、新設大学が3校、八戸や盛岡近郊に開設されると学生数は落ち込み、2007年1月に学校法人頌美学園の歴史は幕を閉じました。
- (9) 私は東京の中野区にある古本屋で聖書を手にしてから人生が変わりました。それまでに沢山の本を読んできましたから、心に勇気を与えてくれる本は聖書しかないと感じていました。さらに勉強したいと思い、約1ヶ月かけて東京の世田谷区にあるエマオ聖書通信教授所（所長はブラザレン派のアメリカ人クロード・アドリアン・プレッソン宣教師）を見つけた時には、「捜せ、そうすれば、見いだすであろう。」（マタイ7・7）との聖書の言葉は真実だと確信しました。また、水泳指導の疲労から倒れそうになった時にも「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかり



写真6 （左から）牧師 矢幅光三先生、平谷京子さん、中新井田秀子さん、久慈幼稚園長 矢幅艶子先生、教会執事 小原キミ先生

か、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」(I コリント10・13)との聖書の言葉を唱えて元気が回復しました。

救い主(キリスト)イエスとの出会いを述べます。1969年5月21日の午後のことでした。午睡をしていた私が目覚めると、雨戸からの一条の光が畳に射し込んでいました。“この光に背を向けると、罪深い思いが湧いてくる。この光に顔を向けると、心は澄み切って、罪深い思いは湧いてこない”と自分の姿を客観的に見つめることができ、自分は罪人であると気づき、悔い改め、180度の回心をしました。そして、“罪人の自分は土管のような深い穴に落ちるばかりで、行く先は死である”と悩みました。“誰か助けてくれ、誰か救ってくれ”と心の中で叫ぶと不思議な力が上(神)から与えられて、寝床から立ち上がることができ、生まれ変わり、新しい生を得ました。すぐに教会に電話をし、夜の祈り会に出席し、ヨハネによる福音書から光にイエスという名があることを知りました。私は人間の姿をしたイエスを見たのではありませんが、光としてのイエスに出会ったのです。復活したイエスと共に私も復活したのです。「命(イエス)は人間を照らす光であった」(ヨハネ1・4)とあります。魂と肉体の救い主(ぬし)であるイエス様を私は信じ、日々の生活の主(しゅ)として仰いでいます。

- (10) 人間にとって大切なものはお金よりも信用であると私は考えています。信用は何千万円にも相当する値打ちがあり、信用をなくしたら他人からは相手にされず、卑しめられ、軽んじられます。「百瀬君、教師に大切なのは私生活、この三文字だよ」と東北本線の列車内で矢幅武司先生は教えて下さいました。最高学府の教員であって、人前では羽振りのよい会話をする人が、「昨夜、バーで酒を飲みすぎた。気がつく和金目のものがない。1万円ほど金を貸してくれ」と人のいないところで私に乞うのです。「まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります」(マタイ23・26)との聖書の言葉を私は座右の銘としています。現在の私は、学校法人明泉学園の学園長・理事長として、鶴川女子短期大学・鶴川高等学校・鶴川幼稚園・鶴川保育園などを統括する立場にありますが、教員や職員を見ていて、私生活に問題のある者は淘汰されています。子どもの素質・才能を育て高めることを職務とする教員は聖職という意識をもって、一般人よりも高所に身を置くことが大切です。教員の質の低さは学園を内部から崩壊させますから、質の良い教員と職員の確保が経営者の任務となります。



写真7 栄光幼稚園長 上岩きゑ先生



写真8 牧師 矢幅牧(まき)先生

- (11) アレン先生は私を孫のように、武司先生は実の息子のように、光三先生・艶子先生・キミ先生は家族の一員のように受け入れて下さいました。“ここに愛がある”と思いました。聖書の「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」(ガラテヤ人への手紙5・22、23)の精神を体現なさっていた頌美学園の経営者たちでした。私にだけでなく誰に対しても神様の愛を示していました。アメリカ軍の三沢基地の男性通訳者は武司先生を「私のお父さん」と呼んで慕っていました。
- (12) 頌美学園の教育方針を明泉学園の教育方針に受け継ぐように私は試みています。“Love is eternal (愛は永遠)”であり、愛の教育こそ大切であるというのが、創立者百瀬泰男先生の考えでありました。2017年8月、教会の礼拝(ミサ)の帰途、京王線笹塚駅前で平成25年度卒業生の柏木愛さんとその御家族4名に呼びとめられました。鶴川高等学校のことを懐かしんでおられました。これからも卒業生と御家族に神様からの祝福があるようにお祈りを続けたいと思います。

以上



写真9 久慈幼稚園



写真10 頌美小学校



写真11 頌美中学校



写真12 アレン国際短期大学



写真13 酪農センター (バイブル・キャンプ)



写真14 洗礼式 (長内川)



写真15 アレン記念教会（聖歌隊）



写真16 ゴスペル（久慈高等学校有志）



写真17 久慈幼稚園（遊戯）



写真18 頌美小学校（休憩時間）



写真19 アレン先生（小・中キャンプ）



写真20 矢幅光三先生（グラウンド）



写真21 ルデアさん（音楽奉仕者）



写真22 頌美小学校（遠足）



写真23 頌美小学校（水泳）



写真24 文化祭（地熱発電）



写真25 久慈幼稚園（野点）



写真26 来訪者（三沢基地より）



写真27 平庭高原



写真28 矢幅武司先生とタマシン・アレン先生



写真29 百瀬和男
(2016年12月25日・頌栄教会の礼拝堂にて)

高等学校の徳育科の授業案『詩人の八木重吉について』

A Lesson Plan for the Moral Education at Tsurukawa High School :
About Mr. Jukichi Yagi, a Poet

学校法人明泉学園 鶴川高等学校（徳育科担当） 百瀬 和男

（この内容は2017年11月27日の11時から11時50分まで、鶴川高等学校の3年1組36名の徳育科の授業案として実施したものです。）

皆さんは東京都町田市三輪町にある鶴川高等学校に通っています。1961年、昭和36年4月1日に誕生した学校で今年で56周年になりました。その63年前、今から119年前の1898年、明治31年2月9日に今の東京都町田市相原町に誕生したのが八木重吉さんです。生家の土蔵は八木重吉記念館（私設）になっていますが、館長の八木藤雄さん（重吉の甥）が逝去したために、休館となっています。八木重吉さんは29歳8か月で肺結核により死去しますが、それまでに3000以上の詩を作りました。

①近くの相原幼稚園には詩碑『ふるさとの川』が置かれています。

『ふるさとの川』

「ふるさとの川よ

ふるさとの川よ

よい音をたててながれてゐるだらう」

②町田市立小中一貫ゆくのき学園には詩碑『ねがひ』が置かれています。

『ねがひ』

「ものを欲しいところからはなれよう

できるだけ つかんでゐる力をゆるめよう

みんな離せば 死ぬるようなきがするが

むりに いこちなきもちを はなれ

いらないものから ひとつづつはなしてゆこう」

③小山田桜台集会所脇には詩碑『素朴な琴』が置かれています。

『素朴な琴』

「この明るさのなかへ

ひとつの素朴な琴をおけば

秋の美しさに耐へかね

琴はしづかに鳴りいだすだらう」

④町田市原町田4の16の17に町田市民文学館ことばらんど（電話042-739-3420）があります。2016年に『八木重吉－さいわいの詩人－展』が開かれました。皆さんが文学館を訪れたり、鶴川高等学校図書室で八木重吉の詩集を開いたりすることをお勧めします。旧版の『八木重吉に出会う本』（編集：いのちのことば社フォレストブックス）もあります。

⑤鶴川高等学校や鶴川女子短期大学には発行者・岩本信一、発行所・いのちのことば社、編集人・砂原俊幸と記された『百万人の福音』というキリスト教（プロテスタント）の雑誌が置かれています。その2017年12月号の表紙を開くと、

『生かされて（つわぶき）』
「そうか神様に生かされていたのか
そう気付いた時
道端の花が輝きはじめ
苦しみにも
悲しみにも
どんな小さなことにも
意味があったのを知った」

という詩と、菊に似た黄色いつわぶきの花の絵が掲載されています。

⑥ここにおられる皆さんは幼児教育や保育の職業に就かれる方が多いと思います。幼稚園は生きる力の基礎を育成するように努めなければなりません。保育所も現在を最も良く生きる力の基礎を培うことを目指しています。自分の人生をどのように生きていくのかを考えていただきたいと思います。

⑦聖書に次のような言葉があります。

「どのようにして若い人は、自分の道を清く保つことができるでしょうか。
あなたのみことばのとおり、道を守ることです。」（聖書・詩篇119篇9節）
八木重吉さんは洗礼を受けたクリスチャン（プロテスタント）でした。

⑧本日の授業案は『百万人の福音』の編集長砂原俊幸さんが私に贈呈してくださった『重吉と旅する。～29歳で夭折した魂の詩人』（編集：いのちのことば社フォレストブックス）と題する書籍から引用して作成しました。2017年11月25日に発行されたばかりのものです。その2日後にこの授業を展開している私です。（鶴川高等学校の図書室では3冊を購入することになりました。鶴川女子短期大学の図書館でも3冊を購入することになりました。）

⑨この書籍の最後に詩画家の星野富弘さんが『あなたの素朴な心の詩に支えられて』と題して寄稿しています。6ページに渡るもので全部を私が読み上げます。

「拝啓 八木重吉様

天国におられるあなたに手紙を出すのは変でしょうか。……………

今、私はあなたの詩集をいつも側に置いています。そして高校時代、私に安らぎを下さったあなたの詩のように、誰にでもわかる言葉を使って詩を書こうと思っています。……………

あなたの詩を読むと、あの頃痛いほど感じた、生きていることへのいとおしさが蘇ってきます。そして、こうして生かされていることを感謝せずにはいられません。生かされていることは、たとえようもない不思議な恵みです。……………

神さまのみもとで、あなたにお会いできますよう生きたいと思います。

星野富弘」

⑩星野富弘さんは中学校の体育の先生でしたが、クラブ活動の指導中に頸髄を損傷して手足の自由を失いました。鶴川高等学校の2階の談話サロン（スぺアミント）には星野富弘さんから贈呈された『2018年星野富弘詩画集カレンダー ルピナス』が掲げられています。それを外して、今皆さんにお見せしています。表紙を含めて7枚の詩画が描かれており、キノコの絵もあって、その詩を読みます。

「バラに刺があり 美しいきのこには毒がある 私の妻には刺も毒もありませんが」

とても微笑ましい詩画であると私には思われました。皆さんはいかがでしょうか。この背景には八木重吉さんの影響もあるのでしょうか。

皆さんも是非、郷土の詩人の八木重吉さんに興味と関心を持ってくださいますように。

それでは、本日の授業を終了します。

「自然遊び」を通して学ぶ短大生の幼児に育む3つの資質・能力の理解

"Qualities and Abilities to Be Nurtured" Understood by the Two-Year College Students
Through Experiences of "Playing in Nature"

入江 和夫 福地 昭輝 元 鍾 彬 入江三津子 宮 有佳里 近澤 友理

1 はじめに

平成29年3月31日に「幼稚園教育要領」¹⁾、「保育所保育指針」²⁾、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」³⁾は公示され、平成30年4月1日より適用されている。無藤によれば⁴⁾「このことは幼稚園も保育所も幼保連携型認定こども園も日本の大切な幼児教育施設として位置づけられたから」と述べている。幼児教育施設（以下＝幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園）では「小学校以降の子どもの発達を見通しながら教育及び保育活動を展開し、育みたい資質・能力を育むことが大切である」¹⁾²⁾³⁾とされ、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱はねらい及び内容に基づき、幼児教育施設が園児の発達の実情や園児の興味や関心等を踏まえながら展開する活動全体によって育むものであると記述されている¹⁾²⁾³⁾。

今回は「資質・能力の三つの柱」（以下「三つの柱」）に注目し、学生が保育者になった際に、どのような場面があれば、子どもにどのような資質・能力が育まれるかを理解するためには、まず学生自身の活動体験とそこに関連づけられる「三つの柱」の理解が必要であると考えた。本短大は東京都町田市にあり、キャンパスは豊かな自然環境に囲まれていることから、模擬「園外保育」として「自然遊び」を想定した活動を行い、「わかったこと及び感想」の記述を学生に求めた。

ここではまず、活動場面の写真から「自然遊び」の概要を示し、次に学生の「三つの柱」の理解については、その記述と「幼稚園教育要領」など¹⁾²⁾³⁾を参照しながら確認するとともに、記述をカテゴリ分けした特徴について述べていく。

2 方法

- (1) 自然遊びの「園外保育」として想定した授業科目名「生活と科学」
- (2) 実施日時：平成30年4月18日10:30-12:20
- (3) 分析対象：感想内容のどの箇所が「三つの柱」のどれに該当するのかを明記している学生
- (4) 自然遊びの内容
 - ①出席確認、準備体操 ②登山口に向かう ③登山開始 ④登山中腹 ⑤枯れ葉探し ⑥筍探し
 - ⑦目隠しイモムシ ⑧谷戸へ向かう ⑨谷戸到着 ⑩～⑫春探し ⑬⑭自由遊び

3 結果と考察

(1) 「自然遊び」活動

この活動は園外保育を想定し、保育者を目指す学生が「自然遊び」を体験することを通して、どのような場面によってどのような資質・能力として育まれるのかを関連づけることができるかを明らかにすることを目的としている。

「自然遊び」活動の内容を写真①～⑩に示した。①の出席確認は、途中や帰りの際に必須の内容である。また、整備されていない自然豊かな道を歩くのに準備体操も必要である。②の右に見えるのは当短大の校庭であり、左は森のように木々が豊富にある。③登山開始、道が整備されていない。④登山中腹では道なき道を歩いている。木々の枝が顔の前にあり、それをよけて歩かなければならない。⑤では足下の枯れ葉を収集

している様子であり、これを材料にした絵制作の活動を行うためのものである。⑥は筍発見であり、この山には多く生えている。⑦は頂上で平坦な道が続く稜線にたどり着き、「目隠しイモムシ」の活動を行っている。⑧は急な斜面を下り、谷戸に向かう様子である。⑨は谷戸到着。⑩⑪⑫は春探しの「タンポポとモンシロチョウ」、「カエル」、「姫踊り子草」であり、⑬⑭は自由遊びの「タンポポの綿毛飛ばし」、「草笛」を行っている様子である。

① 出席確認、準備体操



② 登山口に向かう



③ 登山開始



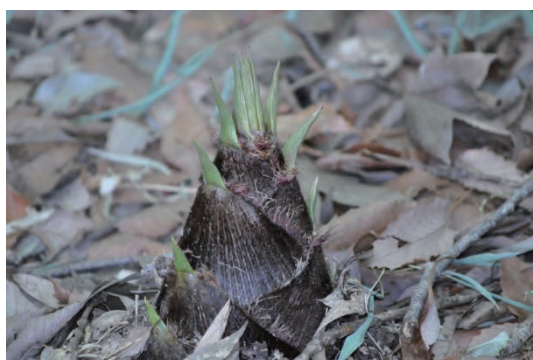
④ 登山中腹



⑤ 枯れ葉探し



⑥ 筍探し



⑦ 目隠しイモムシ



⑧ 谷戸へ向かう



⑨ 谷戸到着



⑩ 春探し「タンポポとモンシロチョウ」



⑪ 春探し「カエル」



⑫ 春探し「姫踊り子草」



⑬ 自由遊び「タンポポの綿毛飛ばし」



⑭ 自由遊び「草笛」



(2)「自然遊び」活動の記述分析

1)「知識及び技能の基礎」の理解

「知識及び技能の基礎」とは「遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何がわかったり、何ができるようになるのか」の下線が該当部分である。また学生が「知識及び技能の基礎」「知識・技能」「知識・技能の基礎」などとした箇所を筆者が太字斜体に変換して表1に示した。

a「**知識・技能の基礎**」・草笛を吹くときはしっかりと両手の親指で挟み隙間に息を強く吹き込む(a 1)のようにa 1は「草笛の技能」に注目し、草笛を吹くことができる技能をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

b「まず初めに、なかなか登ることの無い山を歩き、見たことのない草木などがあり新たな発見などが出来ました(b 1)、また目を瞑って歩いたことにより、普段聞くことのない鳥の鳴き声をじっくり聞くことができ、なんの鳥だろうという疑問も生まれたり……、分かったり、気づいたりする(b 2)「**知識・技能の基礎**」の向上が見込めるのではないのかと思いました、なぜなら普段の遊びなどでは知る、じっくり見るということがあまり見聞きすることが出来ないの、こう言った行事などを聞くことにより、この鳥の声はなんだろうと考えたり、この花は何なのだろう、後で調べ分かったりしたりすることで子ども達の好奇心などを向上させたりでき(b 3)、「資質・能力」に最も適切なのではないかと考えたからです。」のように、b 1は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、草木などの新発見ができたこと、b 2は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、鳥の鳴き声からその名前の気づき、b 3は「保育者、子どもの視点」に注目し、花の名前調べによって子どもの好奇心向上が期待できる気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

c「今日の活動の3つの柱との関連「**知識・技能**」について・目かくしイモムシしながら、草や土を踏む音、鳥のさえずりを聞いて、自然界の音を聞いたこと・草笛のコツがわかったり、吹けるように(c 1)なったこと。」のように、c 1は「自然との触れ合い、生命尊重」「草笛の技能」に注目し、草笛を吹くことができる技能をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

d「(**知識・技能の基礎**)道を歩いていると、枝にひもがありました。事前に崖があって危険だと聞いていたので、崖から落ちないように、気をつけて登るよう心がけることができました(d 1)。……田んぼに着くと、鳥が鳴いていたり花が咲いていたりして春を感じました(d 2)。」のように、d 1は「安全」に注目し、自分が気をつけて登るよう心がけることができたこと、d 2は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、鳥の鳴き声や花咲く情景から春であることの気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

e「今回の授業で、まずはいつもとは違う場所へみんなで行く楽しさや、普段は通ることのない場所歩くことのない道を進む楽しさ目的地が分からない中での道中で多くの発見や楽しみ驚きなど私たちでも多く見つけた(e 1)ので子供たちはより多くのことが驚きでいっぱいな活動なのではないか(e 2)と改めて思

表1 自然遊び体験から育まれる「知識及び技能の基礎」

学生	「知識及び技能の基礎」	カテゴリ				
		自然との 触れ合い、生命 尊重	思いや り、協 調性	保育 者、子 どもの 視点	草笛の 技能	安全
a	「 知識・技能の基礎 」・草笛を吹くときはしっかりと両手の親指で挟み隙間に息を強く吹き込む				○	
b	まず初めに、なかなか登ることの無い山を歩き、見たことのない草木などがあり新たな発見などが出来ました(b1)、また目を瞑って歩いたことにより、普段聞くことのない鳥の鳴き声をじっくり聞くことができ、 <u>なんの鳥だろうという疑問も生まれ</u> たり・・・分かったり、気づいたりする(b2)「 知識・技能の基礎 」の向上が見込めるのではないのかと思いました、なぜなら普段の遊びなどでは知る、じっくり見るということがあまり見聞きすることが出来ないで、こう言った行事などを聞くことにより、この鳥の声はなんだろうと考えたり、この花は何なのだろう、後で調べ分かったりしすることです <u>子ども達の好奇心などを向上させたりでき</u> (b3)、「資質・能力」に最も適切なのではないかと考えたからです。	○		○		
c	今日の活動の3つの柱との関連「 知識・技能 」について・目かくしイモムシしながら、草や土を踏む音、鳥のさえずりを聞いて、自然界の音を聞いたこと・草笛のコツがわかったり、吹けるように(c1)なったこと。	○			○	
d	(知識・技能の基礎)道を歩いていると、枝にひもがありました。事前に崖があって危険だと聞いていたので、崖から落ちないように、氣をつけて登るよう心がけることができました(d1)。坂道ではひたすら歩くことしかできないが、平坦な道では普通に歩くのではなく、目をつぶって歩くことも良い体験だと思いました。田んぼに着くと、鳥が鳴いていたり花が咲いていたりして春を感じました(d2)。	○				○
e	今回の授業で、まずはいつもとは違う場所へみんなで行く楽しさや、普段は通ることのない場所歩くことのない道を進む楽しさ目的地が分からない中での道中で多くの発見や楽しみ驚きなど私たちでも多く見つかった(e1)ので子供たちはより多くのことが驚きでいっぱいな活動なのではないか(e2)と改めて思いました。・・・奥に進むうちに、木にピンクのリボンが付いていることに気がつきもしかしてこれはわかりやすいような目印なのではないかと思いました。そこから細かく周りを見ながら歩いて行くと、途中には色々な種類の落ち葉やドングリ、筍、車が置いてあったり子供たちがとても興味を示しそうなものがたくさんあったことに気がつきました(e3)。→ 知識・技能 。	○		○		
f	「 知識及び技能の基礎 」では不安定な地面をしっかりと踏んで歩き、下だけでなく目の前の草や木などの物に氣を使って進むことで怪我を防ぐ事ができたんじゃないか(f1)と思います。こういった環境には季節による植物が生えていたり時間が経つと虫が増えたり違うものが消えるんじゃないかという事も考えられる(f2)のではないだろうか	○				○
h	知識・技能 の視点です。筍を見つたり(季節を感じる(h1))蜂の巣を見つたり(虫への興味や認知)山椒があつたりとたくさん発見がありました(h2)。私たちは一つ一つ見たことや食べたことがあり知っていた気づきでした。しかし、まだ子どもの中では知らないことがたくさんあると思います。そのため保育者が実際に見せて伝えることで旬の食べ物などは食育にも繋がると思いました(h3)。	○		○		
j	次に気付いた事は自由行動の「春探し」をしていた時です。私たちはもう20年近く生きているので春の動植物は何があるのか大分分かるよう(j1)になります。タンポポやヒメオドリコソウ、ヨモギなど沢山の春を感じるもの(j2)がありました。・・・班の1人の子がカエルを捕まえ別の友達から空のペットボトルをもらい私は早速カエルが乾かないように水を入れようとしたところ班の子が「まっって！そんなに水は入れない方がいいよ！」と教えてくれました(j3)。「どうしてだろう？」と不思議に思っていましたが発達日カエルは肺呼吸だから少しの水があればそれで大丈夫だそうです。これも資質能力の1つ「 知識・技能 」に関連する事だと感じました。	○				
k	田んぼに着いてからの自由行動では、たんぽぽやホトケノザ、モンシロチョウ、おたまじゃくしなどを観察、写真を撮り、春の季節にどのような生物や植物が生息しているのか気づくことができ(k1)、「 知識・技能 」を身につけることが出来たと考えます。	○				
l	「 知識及び技能の基礎 」は、豊かな体験を通じて自然を感じたり、草笛は葉っぱを少し隙間をあけて挟み息を強く吹き込むと葉が震えて音が鳴るんだとわかったり、できるようになったり(l1)することで力が身につくと思いました。				○	
m	知識や技能などの基礎 筍やタンポポなど今の時期の情景を見て、春とはどのような季節か知ることができた(m1)。一方で、春でも山の中では地面が落ち葉やどんぐりが沢山落ちていてと改めて知った(m2)。山の中は比較的静かで、普段は聞かないような鳥の声や風の音がよく聞こえることがわかった(m3)。都内でも自然豊かな場所があることを知り、屋外での活動の楽しさを感じる事ができた。	○				
n	子どもと一緒に園外保育に出たことを想像しながら授業に参加したことで分かったことは、子どもとあの様な場所に行く場合は、必ず準備体操をしなければならないことです。ただ歩いて向かうだけでなく、足や手をかなり動かさないと登れないところなどは道が不安定なため、バランスを崩すことも考えられ、足をくじくなど怪我をする危険性があります。そのためには出発前に十分に準備体操をし、備えることが必要だと分かりました(n1)。これは、3つの柱の「 知識・技能 」に関連していると思います。			○		○
o	山を歩き、田んぼへ行きました。その途中には足場があまりよくない崖道を通ったり、土で滑る坂を上り下りするなどしました。滑らないように歩くにはどうしたら良いか、転ばない様に歩くにはどうしたら良いかを体で試しながら身につけることが出来ました(o1)。＝ 知識・技能 田んぼへ行く途中では目かくしイモムシをしながらでしたが、同じグループの先頭の人を信じながら歩きました。目を瞑ることで歩く速度もいつもより速く感じたり、周りの音をよく聞くことができ、視覚がなくなるだけでいつもとこんなに感じ方が違うということを知ることが出来ました(o2)。＝ 知識・技能 ・・・田んぼではおたまじゃくしやかえる、蝶やたんぽぽを見つけ春を感じることが出来ました。その中でも見たことのない花や、生物を発見し、春にはこんな植物や生物があることを知りました(o3)。＝ 知識・技能	○				○
p	幼児側の体験もしたことにより、幼児としての学びも感じられた(p1)。目隠しイモムシでは、先頭以外のみんなは目を隠し、一列になって山歩きをした。最初は怖いといった思いが強かったが、目をつぶることににより、歩いてるときに踏む葉の音や枝の音等の聴覚、足底や手のひらの触覚が敏感になると気づくことができた(p2)。(知識・技能の基礎)	○		○		

いました。……途中には色々な種類の落ち葉やドングリ、筍、車が置いてあったり子供たちがとても興味を示しそうなものがたくさんあったことに気がつきました(e3)→**知識・技能**。」のようにe1「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、普段は通らない道での気づきがあり、e2, e3は「保育者、子どもの視点」に注目し、e2では子どもが驚きを感じることを述べるとともに、e3では子供たちが興味を示しそうなものの気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

f「**知識及び技能の基礎**」では不安定な地面をしっかりと踏んで歩き、下だけでなく目の前の草や木などの物に氣を使って進むことで怪我を防ぐ事ができたんじゃないか(f1)と思います。こういった環境には季節による植物が生えていたり時間が経つと虫が増えたり違うものが消えるんじゃないかという事も考えら

れる (f2) のではないでしょうか」のように f1 は「安全」に注目し、自分が不安定な地面で怪我を防ぐ歩き方ができることを述べ、f2 は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、季節の時間的経過によって、風景が変化してしまう気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

h「**知識・技能**」の視点です。筍を見つけれたり (季節を感じる (h1)) 蜂の巣を見つけれたり (虫への興味や認知) 山椒があつたりとたくさんの発見がありました (h2)。私たちは一つ一つ見たことや食べたことがあり知っていた気づきでした。しかし、まだ子どもの中では知らないことがたくさんあると思います。そのため保育者が実際に見せて伝えることで旬の食べ物などは食育にも繋がると思いました (h3)。」のように h1, h2 は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、筍を見つかることで季節の気づき、蜂の巣や山椒の気づきを述べ、h3 は「保育者、子どもの視点」に注目し、食育の気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

j「次に気付いた事は自由行動の「春探し」をしていた時です。私たちはもう20年近く生きているので春の動植物は何があるのか大体分かるよう (j1) になります。タンポポやヒメオドリコソウ、ヨモギなど沢山の春を感じるもの (j2) がありました。……班の1人の子がカエルを捕まえ別の友達から空のペットボトルをもらい私は早速カエルが乾かないように水を入れようとしたところ班の子が「まって！そんなに水は入れない方がいいよ！」と教えてくれました (j3)。「どうしてだろう？」と不思議に思っていました。友達曰くカエルは肺呼吸だから少しの水があればそれで大丈夫だそうです。これも資質能力の1つ「**知識・技能**」に関連する事だと感じました。」のように j1, j2, j3 は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、j1 では春の動植物の知識をすでにもっていること、j2 ではすでにある知識として具体名をあげるとともに、それが春と感ずること、j3 はカエルについて友達から知識として得たことをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

k「田んぼに着いてからの自由行動では、たんぼぼやホトケノザ、モンシロチョウ、おたまじゃくしなどを観察、写真を撮り、春の季節にどのような生物や植物が生息しているのか気づくことができ (k1)、「知識・技能」を身につけることが出来たと考えます。」のように k1 は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、たんぼぼ、おたまじゃくしなどの観察や写真を撮ることで春の季節の気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

l「**知識及び技能の基礎**」は、豊かな体験を通じて自然を感じたり、草笛は葉っぱを少し隙間をあけて挟み息を強く吹き込むと葉が震えて音が鳴るんだとわかったり、できるようになったり (l1) することで力が身につくと思いました。」のように l1 は「草笛の技能」に注目し、草笛がなる方法の気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

m「**知識や技能などの基礎**」筍やタンポポなど今の時期の情景を見て、春とはどのような季節か知ることができた (m1)。一方で、春でも山の中では地面が落ち葉やどんぐりが沢山落ちてると改めて知った (m2)。山の中は比較的静かで、普段は聞こえないような鳥の声や風の音がよく聞こえることがわかった (m3)。」のように m1, m2, m3 は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、m1 では筍やタンポポが春の情景であることの気づき、m2 では春であるのに落ち葉やどんぐりがそこにあることの気づき、m3 では山の中の静寂さによって鳥の鳴き声や風の音が良く聞こえる気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

n「子どもと一緒に園外保育に出たことを想像しながら授業に参加したことで分かったことは、子どもとあの様な場所に行く場合は、必ず準備体操をしなければならないことです。ただ歩いて向かうだけでなく、足や手をかなり動かさないと登れないところなどは道が不安定なため、バランスを崩すことも考えられ、足をくじくなど怪我をする危険性があります。そのためには出発前に十分に準備体操をし、備えることが必要だと分かりました (n1)。」これは、3つの柱の「**知識・技能**」に関連していると思います。」のように n1 は「安全」「保育者、子どもの視点」に注目し、子どもを引率する安全を想定した際に準備体操が必要な理由として分かったことをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

o「山を歩き、田んぼへ行きました。その途中には足場があまりよくない崖道を通ったり、土で滑る坂を

上り下りするなどしました。滑らないように歩くにはどうしたら良いか、転ばない様に歩くにはどうしたら良いかを体で試しながら身につけることが出来ました(o 1) = **知識・技能** 田んぼへ行く途中では目かくしイモムシをしながらでしたが、同じグループの先頭の人を信じながら歩きました。目を瞑ることで歩く速度もいつもより速く感じたり、周りの音をよく聞くことができ、視覚がなくなるだけでいつもとこんなに感じ方が違うということを知ることが出来ました(o 2) = **知識・技能**・・・田んぼではおたまじゃくしやかえる、蝶やたんぽぽを見つけ春を感じることが出来ました。その中でも見たことのない花や、生物を発見し、春にはこんな植物や生物があることを知りました(o 3) = **知識・技能**」のようにo 1は「安全」に注目し、自分が悪路を転ばないように体で試しながら身に付けることができ、o 2は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、視覚がなくなることで歩く速さを速く感じることや音が鋭敏に感じるものの気づきであり、o 3は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、春の植物の気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

p「幼児側の体験もしたことにより、幼児としての学びも感じられた (p1)。目隠しイモムシでは、先頭以外のみんなは目を隠し、一列になって山歩きをした。最初は怖いといった思いが強かったが、目をつぶることにより、歩いているときに踏む葉の音や枝の音等の聴覚、足底や手のひらの触覚が敏感になると気づくことができた (p2)。(知識・技能の基礎)」のようにp1は「保育者、子どもの視点」に注目し、目隠しイモムシ遊びが幼児だったらどう感じるかの学びの気づき、p2は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、葉や枝の音や足底や手の感覚が敏感になる気づきをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

「知識や技能などの基礎」のカテゴリの特徴として、「自然との触れ合い、生命尊重」はb, c, d, e, f, h, j, k, m, o, pの11名、「思いやり、協調性」は0名、「保育者、子どもの視点」はb, e, h, n, pの5名、「草笛の技能」はa, cの3名、「安全」はd, f, n, oの4名であり、「自然との触れ合い、生命尊重」の人数が最も多かった。

2)「思考力、判断力、表現力の基礎」の理解

「思考力、判断力、表現力の基礎」とは「遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながらどう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか」の下線が該当部分である。また学生が「思考力、判断力、表現力の基礎」(→思考力、判断力、表現力)と示した箇所を筆者が太字斜体に変換して表2に示した。

a「**思考力・判断力・表現力等の基礎**」・葉っぱを音の鳴るように持つ(a 1)のようにa 1は「草笛の技能」に注目し、音を鳴らすことができた過程で試したり工夫した結果として“鳴るように持つ”をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

b「**【思考力・判断力・表現力等】**①山の植物がどういう形をしているか (b1)、また、植物にどんな特徴があるかを考える (b2)。……どういう行動を取るか、どういう行動が一番安全かを考える (b3)。③目かくしイモムシ遊びの時に……先頭の子が後ろの子にどのような言葉で伝えれば良いかを考える (b4)」のように、b1, b2は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目して植物の特徴を述べ、b3は「安全」に注目して最も安全な行動を述べ、b4は「思いやり、協調性」に注目し「言葉の伝え方に関して“どういう”、“どんな”、“どのような”のように考えさせることをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

d「(**思考力・判断力・表現力等の基礎**) 平坦な道では、目をつぶって歩くこと以外のこともできるのではないかと思います (d1)。鳥の鳴き声を聞いて、どの鳥なのかクイズにしてみるのも良いと思いました(d2)。季節も春でちょうどいい温度でしたが、夏だと水分補給をしたり休憩をしたりしながらではないと登れないと思いました(d3)。園児が登るとなるとすぐに疲れてしまうと思うので、どのタイミングでどの場所で休憩をいれるのか考える(d4) 必要があると思いました。」のようにd1, d2, d3, d4「保育者、子どもの視点」に注目し、状況の気づきをどう考え、判断していることをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

表2 自然遊び体験から育まれる「思考力、判断力、表現力の基礎」

学生	「思考力、判断力、表現力等の基礎」	カテゴリ				
		自然との 触れ合 い、生命 尊重	思いや り、協 調性	保育 者、子 どもの 視点	草笛の 技能	安全
a	「 思考力・判断力・表現力等の基礎 」・葉っぱを音の鳴るよう(a1)に持つ				○	
b	【 思考力・判断力・表現力等 】①山の植物がどのような形をしているか(b1)、また、植物にどんな特徴があるかを考える(b2)。②危ないと思ったときどのような行動を取るか、どのような行動が一番安全かを考える(b3)。③目かくしイモムシ遊びの時に「足下注意して」「枝があるよ」「進むよ」「止まるよ」等の先頭の子が後ろの子にどのような言葉で伝えれば良いかを考える(b4)。	○	○			
d	(思考力・判断力・表現力等の基礎)平坦な道では、目をつぶって歩くこと以外のことでもできるのではないかと思います(d1)。鳥の鳴き声を聞いて、どの鳥なのかクイズにしてみるのも良いと思いました(d2)。季節も春でちょうどいい温度でしたが、夏だと水分補給をしたり休憩をしたりしながらではないと登れないと思いました(d3)。園児が登るとなるとすぐに疲れてしまうと思うので、どのタイミングでどの場所で休憩をいれるのかを考える(d4)必要があると思いました。			○		
e	そこでは、目をつぶっている人に対してどのような道なのか、歩くところには障害物はないか少しゆっくり歩くなど工夫してみた(e1)ところあまり不安にならず前の人につかまって安心して歩くことができたと思いました。→ 思考力・判断力・表現力等		○			
f	「 思考力判断力表現力等の基礎 」では坂を下る際には足を交互に斜めにゆっくり降りると良いかなど怪我を防ぐ為に何をしたらいいのか、知らない所に行けばワクワクだけでなくそういったことも無意識に考える(f1)はずだと思います。					○
i	2つ目は、 思考力・判断力・表現力等 です。これは、5人チームで“目かくしイモムシ”をしていた時に学びました。目をつむり、足に神経を集中させて大きな木の枝や大きな石などを感じ取り、後ろの友達にどうやったら伝えられるか考えながら(i1)連携を取っていました。ですが、みんな足の幅が異なるので靴をよく踏んでしまうことが多々ありました。		○			
j	先日の山登り体験では先頭の子やリーダーが「ここに大きい木があるから転ばないように気を付けてね!」や「少し段差があるよ!危ないから後ろの子にも伝えて!」や、枝や木が生い茂っている道の中「この枝を押さえながら歩くと歩きやすくなるよ」などチームワークが築かれていた事です。そしてこれは3つの資質能力のうちの1つである「 思考力判断力表現力等 」に繋がると思います。どうしてかという先頭の子やリーダーが「ここは危険だな。」という経験や知識に基づき考え判断し仲間伝えていくから(j1)です。		○			
k	園外保育の模擬実践でたくさんのことを学びました。山歩き(崖歩き)ではどの様に気をつければ転ばずに済むかわかりやすく歩いて歩き(k1)。 思考・判断力・表現力 を学びました。・・・目隠し芋虫のゲームでは、先頭に立って歩くことで後ろの班の人の安全を考えたり(k2)、目をつぶって歩いている時に鳥の鳴き声が聞こえることに気づいたり自然と触れ合いながら(k3)。 思考力・判断力・表現力 、・・・を楽しみながら学びました。	○	○			○
l	2つ目の「 思考力、判断力、表現力等の基礎 」は、草笛で音がなったら、もっと隙間を作ってみようや、息を思いっきり吹いてみようなど考えたり試したり(l1)、その試したことを人に見せたりすることで表現する(l2)力が身につくと思いました。				○	
m	思考力・判断力・表現力などの基礎 草笛を使って友達と色々な言葉表現してみた(m1)。並んで歩く時に後ろの友達が困らないよう自然に声をかけあっていた。危険な場所を歩く際には、自分なりに判断し(m2)しっかりと地面を踏みしめて歩くなど注意しながら歩くような気をつけた。		○		○	
n	目隠しイモムシでは、先頭が安全な道を歩くだけでなく、「大きい木の枝があるから気をつけてね」や、「止まります!」と、この先起こることを伝えることで恐怖感も軽減できると思い、伝え方を工夫しました(n1)。これは、3つの柱の「 思考力・判断力・表現力等 」に当てはまると思います。		○			
o	葉っぱを使って草笛をしましたがどの葉っぱでも良いということで色々な葉っぱを友達同士で使ってみました。高い音がたり低い音がたり、友達と一緒に試したり工夫したり(o1)しながら音を出すことを楽しみました。→ 思考力・判断力・表現力				○	
p	目は見えないが音は聞こえることはわかったため、怖い思いを減少させるためにはどうすべきか考え(p1)、友人同士で「ここボロボロしてるよ」「ここ気を付けてね」等と声をかけ合うことの工夫へ(p2)とつながることができた。(思考力・判断力・表現力等の基礎)		○			

e「そこでは、目をつぶっている人に対してどのような道なのか、歩くところには障害物はないか少しゆっくり歩くなど工夫してみた(e1)ところあまり不安にならず前の人につかまって安心して歩くことができたと思いました。→**思考力・判断力・表現力等**」のように、e1は「思いやり、協調性」に注目し、先頭者が目隠ししている後ろの安全を思って“ゆっくり歩く”ことを工夫したことをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

f「**思考力判断力表現力等の基礎**」では坂を下る際には足を交互に斜めにゆっくり降りると良いかなど怪我を防ぐ為に何をしたらいいのか、……考える(f1)はずだと思います。」のようにf1は「安全」に注目し、自分の怪我を防ぐ方法を考えることをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

i「2つ目は、**思考力・判断力・表現力等**です。……目をつむり、足に神経を集中させて大きな木の枝や大きな石などを感じ取り、後ろの友達にどうやったら伝えられるか考えながら(i1)連携を取っていました。……」のようにi1は「思いやり、協調性」に注目し、障害物を後ろの友達に伝える協調性の考え方をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

j「先日の山登り体験では先頭の子やリーダーが「ここに大きい木があるから転ばないように気を付けて

ね！」や「少し段差があるよ！危ないから後ろの子にも伝えて！」や、枝や木が生い茂っている道の中「この枝を押さえながら歩くと歩きやすくなるよ」などチームワークが築かれていた事です。そしてこれは3つの資質能力のうちの1つである「**思考力判断力表現力等**」に繋がると思います。どうしてかという先頭の子やリーダーが「ここは危険だな。」という経験や知識から基づき考え判断し仲間に伝えているから(j1)です。」のようにj1は「思いやり、協調性」に注目し、山登りの内容からまさにこの資質・能力の「三つの柱」を理解できている。

k「園外保育の模擬実践でたくさんのことを学びました。山歩き（崖歩き）ではどの様に気をつければ転ばずに済むかしっかり考えて歩き(k1)、**思考・判断力・表現力**を学びました。……目隠し芋虫のゲームでは、先頭に立って歩くことで後ろの**班の人の安全を考えたり**(k2)、目をつぶって歩いている時に鳥の鳴き声が聞こえることに気づいたり**自然と触れ合いながら**(k3)、**思考力・判断力・表現力**、……を楽しみながら学びました。」のように、k1では「安全」に注目し、山歩きで自分が転ばない歩き方、k2では「思いやり、協調性」に注目し、思いやりとして班の人の安全をどう考えるかを、k3では「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、自然と触れ合いながらと考えていることを述べていることからこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

l「2つ目の「**思考力 判断力 表現力等の基礎**」は、草笛で音がなったら、もっと隙間を作ってみようや、息を思いっきり吹いてみようなど考えたり試したり(l1)、その試したことを人に見せたりすることで表現する(l2)力が身につくと思いました。」のように、l1、l2は「草笛の技能」に注目し、l1では草笛を鳴らすことをどう考え、試すかであり、l2ではそれを人に見せる表現をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

m「**思考力・判断力・表現力などの基礎** 草笛を使って友達と色々な言葉表現してみた(m1)。並んで歩く時に後ろの友達が困らないよう自然に声をかけあっていた。危険な場所を歩く際には、自分なりに判断し(m2)しっかりと地面を踏みしめて歩くなど注意しながら歩くよう気をつけた。」のようにm1は「草笛の技能」に注目し、それを使って言葉の表現をし、m2は「思いやり、協調性」に注目し、後ろの友達のことを考え協力しながら危険箇所の判断を行うことをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

n「目隠しイモムシでは、先頭が安全な道を歩くだけではなく、「大きい木の枝があるから気をつけてね」や、「止まります！」と、この先起こることを伝えることで恐怖感も軽減できると思い、伝え方を工夫しました(n1)。これは、3つの柱の「**思考力・判断力・表現力等**」に当てはまると思います。」のようにn1は「思いやり、協調性」に注目し、班の安全な歩き方に向けた先頭者の工夫をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

o「葉っぱを使って草笛をしましたがどの葉っぱでも良いということで色々な葉っぱを友達同士で使ってみました。高い音がでたり低い音がでたり、**友達と一緒に試したり工夫したり**(o1)しながら音を出すことを楽しみました。=**思考力・判断力・表現力**」のようにo1は「草笛の技能」に注目し、鳴らし方を試行、工夫をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

p「目は見えないが音は聞こえることはわかったため、怖い思いを減少させるためにはどうすべきか考え(p1)、**友人同士で「ここポコポコしてるよ」「ここ気をつけてね」等と声をかけ合うことの工夫へ**(p2)とつなげることができた。**思考力・判断力・表現力等の基礎**」のようにp1、p2は「思いやり、協調性」に注目し、p1では怖さを減らすためにどう考えるか、p2ではその工夫をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

「思考力・判断力・表現力などの基礎」のカテゴリの特徴として、「自然との触れ合い、生命尊重」はb、kの2名、「思いやり、協調性」はb、e、i、j、k、m、n、pの8名、「保育者、子どもの視点」はdの1名、「草笛の技能」はa、l、m、oの4名、「安全」はf、kの2名であり、「思いやり、協調性」の人数が最も多かった。

3)「学びに向かう力、人間性等」の理解

「学びに向かう力、人間性等」とは「心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか」の下線が該当部分である。また学生が「学びに向かう力、人間性等」、「思考力、判断力、表現力」などと示した箇所を筆者が太字斜体に変換して表3に示した。

表3 自然遊び体験から育まれる「学びに向かう力・人間性等」

学生	「学びに向かう力、人間性等」	カテゴリ				
		自然との 触れ合 い、生命 尊重	思いや り、協 調性	保育者、 子どもの 視点	草笛の 技能	安全
a	田んぼで耳を澄まして鳥の声や風の音を聞くのがとても安らぎ楽しかった(a1)です。また、 <u>草笛を吹くことも楽しかった(a2)</u> です。 「<u>学びに向かう力、人間性等</u>」 ・ <u>自然の草花に興味を持つ(a3)</u>	○			○	
b	自然の音を聞いたり、草笛を吹いたりして、とても楽しかった(b1)です。一番印象に残ったことは、 <u>班員の一人がカエルを捕まえて(b2)学校まで持ち帰ったこと</u> です。 「<u>学びに向かう力・人間性等</u>」	○			○	
c	「<u>学びに向かう力、人間性等</u>」 ・ <u>危険な場所は声をかけ合うこと(c1)</u> ・この日出会った植物、動物などについてもっと知りたい(c2)と考え、調べたりする(c3)こと	○	○			
d	「<u>学びに向かう力、人間性等</u>」 季節によってまた風景が変わると思うのでどういう違いがあるのを知りたい(d1)と思いました。田んぼで鳥が鳴いていたので鳥の種類や、咲いている花の種類を調べてみたい(d2)と思いました。	○				
f	「<u>学びに向かう力・人間性等</u>」 ではもっと自然に触れたいと思えるような山登りを保育者が意識(f1)しなければなりません。ただ歩き疲れたで終わらせるわけではなく、 <u>草笛だったり目的地などにある植物や生き物に自ら関わらせる声かけ(f2)</u> や先生が子どもたちにここは <u>こんな生き物がいるんだよとか季節になると〜など意欲を向上(f3)</u> させられるような声かけが重要だと考えます。	○		○	○	
g	普段、私たちの生活の中ではかえるの鳴き声なんてあまり聞かないので興味が湧き、『どんなカエルが鳴いてるのかな?』『緑色のカエルだったらいいなあ』という会話をしているうちに <u>カエルを見てみたいという私たちの好奇心(g1)→『<u>学びに向かう力、人間性等</u>」からカエル探しをすることにした。</u> ・・・ああ私たちが思ってた緑色のカエルではなく茶色のカエルでしたが実際に見れて良かったし、見つけたことから <u>カエルを育てて見たい(g2)</u> と思う気持ちも芽生えました。→ 「<u>学びに向かう力、人間性等</u>」 ・・・いつかまた園外保育をやるときや、友達同士で誰が1番草笛沢山鳴らせるか、長く鳴らせるかという対決をしたら面白いと思うのでしてみたい(g3)です。→ 「<u>学びに向かう力、人間性等</u>」	○			○	
h	「<u>学びに向かう力・人間性等</u>」 の視点です。チームを組み目隠しをし、森の中を歩いていくゲームでは言葉掛けが大切で「1,2,1,2」と声を掛けて進んで行くことやリーダーが落ちている木に気づき退かしたり友達同士「頑張ろうね」と声を掛け合って進んで歩いていくこと(h1)やカエルを捕まえてもすぐ返してあげる優しさは(h2)子どもの人間性を育むと思います。	○	○			
i	今回の園外保育で3つのことを学びました。1つは、 「<u>学びに向かう力・人間性等</u>」 です。これは、険しい山道を通る時にたくさんの草木が自分が通った後の後ろの友達を怪我させないために通った後も「ここの草木、気をつけてね。」と声を掛け合い(i1)しました。また、急な段差を降りる時には手を取り合いながら協力して(i2)降りることが出来ました。		○			
l	3つ目の 「<u>学びに向かう力、人間性等</u>」 は、自然に触れることで、自然も同じように生きていると感じ(i1)、花などを育てる際に、愛情を持って育てたり声をかけて育てようという意欲(i2)、 「<u>学びに向かう力、人間性等</u>」 が身につくと思いました。	○				
m	「<u>学びに向かう力・人間性等</u>」 山歩きを楽しんだことで、普段から自然の生き物を観察したり触れ合ったりしてみよう(m1)と思うようになった。幼児期に、大人のような楽な生活に慣れてしまわないよう、積極的に活動に参加し、楽しめるような活動を保育者が考える(m2)ことの大切さを学んだ。目をつぶって友達に誘導してもらって遊びを通して友達を頼ることの心強さを感じ、グループ活動をする時に友達をもっと信頼しよう(m3)とすることが大切だと思った。	○	○	○		
o	自分が先頭になった時は後ろの仲間がどんな風に感じているのか(o1)を考え、意識し声をかけながら進みました。春の植物や生物を調べて知識を増やし、子どもたちにも伝えられるように、普段の生活の中でも環境をよく見ながら季節のものをよく観察していきたい(o2)と思いました。= 人間性・<u>学びに向かう力</u>	○	○	○		
p	“友人同士での声のかけ合い”は、他者へと思いやりや協調性(p1)の育ちではないかと考え、 人間性 にも大きく影響があるのではないかと思った。		○			

a「田んぼで耳を澄まして鳥の声や風の音を聞くのがとても安らぎ楽しかった(a1)です。また、草笛を吹くことも楽しかった(a2)です。……「学びに向かう力、人間性など」・自然の草花に興味を持つ(a3)のように、a1, a3は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、草花への興味を持つは心情、態度であり、a2では「草笛の技能」に注目し、楽しさの心情をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

b「自然の音を聞いたり、草笛を吹いたりして、とても楽しかった(b1)です。一番印象に残ったことは、班員の一人がカエルを捕まえて(b2)学校まで持ち帰ったことです。【学びに向かう力・人間性等】のように、b1は「自然との触れ合い、生命尊重」「草笛の技能」に注目し、その楽しさとしての心情を、b2は「自然との触れ合い、生命尊重」でカエルの捕獲が一番印象に残っている心情をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

c「「学びに向かう力、人間性等」・危険な場所は声をかけ合うこと(c1)・この日出会った植物、動物などについてもっと知りたい(c2)と考え、調べたりする(c3)こと」のように、c1は「思いやり、協調性」に注目し、危険を避けるための声掛けができることは相手を思う心情であり、c2, c3は「自然の触れ合い、生命尊重」に注目し、動植物を調べたい意欲をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」理解できている。

d「(学びに向かう力、人間性など) 季節によってまた風景が変わると思うのでどういう違いがあるのか知りたい(d1)と思いました。田んぼで鳥が鳴いていたので鳥の種類や、咲いている花の種類を調べてみたい(d2)と思いました」のように、d1, d2では「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、d1は風景の季節変化を知る、d2は花の種類を調べる意欲をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

f「「学びに向かう力、人間性など」ではもっと自然に触れたいと思えるような山登りを保育者が意識(f1)しなければなりません。ただ歩き疲れたで終わらせるわけではなく、草笛だったり目的地などにある植物や生き物に自ら関わらせる声掛け(f2)や先生が子どもたちにここはこんな生き物がいるんだとか季節になると～など意欲を向上(f3)させられるような声掛けが重要だと考えます。」のように、f1は「保育者、子どもの視点」「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、自然に触れたい意欲であり、f2も「保育者、子どもの視点」「草笛の技能」「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、草笛や生き物の関わりを子どもが主体的にできるような声掛けの心情・態度であり、f3も「保育者、子どもの視点」「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、子どもを思う心情をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

g「普段、私たちの生活の中ではかえるの鳴き声なんてあまり聞かないので興味が湧き、『どんなカエルが鳴いてるのかな?』『緑色のカエルだったらいいなあ』という会話をしていくうちにカエルを見たいという私たちの好奇心(g1)→『学びに向かう力、人間性等』からカエル探しをすることにしました。……私たちが思っていた緑色のカエルではなく茶色のカエルでしたが実際に見れて良かったし、見つけたことからカエルを育てて見たい(g2)と思う気持ちも芽生えました。→『学びに向かう、人間性等』……いつかまた園外保育をやるときや、友達同士で誰が1番草笛沢山鳴らせるか、長く鳴らせるかという対決をしたら面白いと思うのでしてみたい(g3)です。→『学びに向かう力、人間性等』のg1, g2は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、カエルを見たい、育ててみたいの意欲、g3では「草笛の技能」に注目し、長く鳴らしたいの意欲をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

h「「学びに向かう力・人間性等」の視点です。チームを組み目隠しをし、森の中を歩いていくゲームでは言葉掛けが大切で「1.2、1.2」と声を掛けて進んで行くことやリーダーが落ちている木に気づき退かしたり友達同士「頑張ろうね」と声を掛け合って進んで歩いていくこと(h1)やカエルを捕まえてもすぐ返してあげる優しさは(h2)子どもの人間性を育むと思います。h1は「思いやり、協調性」に注目した励まし合いの心情であり、h2は「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、捕まえた蛙を逃がす優しさの心情をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

i「今回の園外保育で3つのことを学びました。1つは、学びに向かう力・人間性等です。これは、険しい山道を通る時にたくさんの草木が自分が通った後の後ろの友達を怪我させないために通った後も「この草木、気をつけてね。」と声を掛け合い（i1）ました。また、急な段差を降りる時には手を取り合いながら協力して（i2）降りることが出来ました。」のようにi1, i2では「思いやり、協調性」に注目し、i1の怪我をさせない思いやり、i2の手を取り合う思いやりは心情・態度であり、これらをこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

l「3つ目の「学びに向かう力・人間性等」は、自然に触れることで、自然も同じように生きていると感じ（l1）、花などを育てる際に、愛情を持って育てたり声をかけて育てようという意欲（l2）、学びに向かう力・人間性が身につくと思いました。」のようにl1, l2では「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、l1では自然も生きているように感じることは心情であり、l2では愛を持ちながら花を育て、声をかけるは花を思いやって育てることの意欲をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

m「学びに向かう力・人間性等」山歩きを楽しんだことで、普段から自然の生き物を観察したり触れ合ったりしてみよう（m1）と思うようになった。幼児期に、大人のような楽な生活に慣れてしまわないよう、積極的に活動に参加し 楽しめるような活動を保育者が考える（m2）ことの大切さを学んだ。目をつぶって友達に誘導してもらう遊びを通して友達を頼ることの心強さを感じ、グループ活動をする時に友達をもっと信頼しよう（m3）とすることが大切だと思った。」のようにm1では「自然との触れ合い、生命尊重」に注目し、自然の生き物の観察、ふれあいの意欲を述べ、m2では「保育者、子どもの視点」に注目し、幼児期に積極な参加、楽しめる活動を保育者が考える大切さの心情を述べ、m3は「思いやり、協調性」に注目し、友達との信頼の大切さの心情をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

o「自分が先頭になった時は後ろの仲間がどんな風に感じているのか（o1）を考え、意識し声をかけながら進みました。春の植物や生物を調べて知識を増やし、子どもたちにも伝えられるように、普段の生活の中でも環境をよく見ながら季節のものをよく観察していきたい（o2）と思いました。=人間性・学びに向かう力」のように、o1では「思いやり、協調性」に注目し、目が見えない後ろの仲間を思いやっている心情であり、o2では「自然との触れ合い、生命尊重」「保育者、子どもの視点」に注目し、子どもたちに伝えられるように環境をよく見ながら季節のものをよく観察したい意欲をこの資質・能力として述べていることから、「三つの柱」を理解できている。

p「“友人同士での声のかけ合い”は、他者へと思いやりや協調性（p1）の育ちではないかと考え、人間性にも大きく影響があるのではないかと考えた。」のようにp1は「思いやり、協調性」に注目し、思いやりは心情と態度であることから、「三つの柱」を理解できている。

「学びに向かう力、人間性等」のカテゴリの特徴として、「自然との触れ合い、生命尊重」はa, b, c, d, f, g, h, l, m, oの10名、「思いやり、協調性」はc, h, i, m, o, pの6名、「保育者、子どもの視点」はf, m, oの3名、「草笛の技能」はa, b, f, gの4名、「安全」は0名であり、「自然との触れ合い、生命尊重」の人数が最も多かった。

まとめ

学生が保育者となった場合、幼児に育む3つの資質・能力の理解は必須である。幼稚園教育要領など¹⁾²⁾³⁾では「実際の指導場面においては、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を個別に取り出して指導するのではなく、遊びを通した総合的な指導の中で一体的に育むよう努めることが重要である。」とある。保育者養成を目的とした本短大の豊かな自然環境を活かした「自然遊び」の体験を模擬園外保育の場と想定した、学生による「三つの柱」の理解及びその内容のカテゴリの特徴は以下のようにまとめられる。

- 1 今回、実践した「自然遊び」は保育者を目指す学生にとって「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の「三つの柱」が総合的に理解できる活動であることがわかった。
- 2 「三つの柱」ごとのカテゴリ%は以下の通りである。
 - 1) 「知識・技能の基礎」の記述 (n=14) では1位が「自然との触れ合い、生命尊重」(79%)、2位が「保育者、子どもの視点」(36%)、3位が「安全」(29%)、4位が「草笛の技能」(21%)、5位「思いやり、協調性」(0%)であった。
 - 2) 「思考力・判断力・表現力等の基礎」の記述 (n=13) では1位が「思いやり、協調性」(62%)、2位が「草笛の技能」(31%)、3位が「自然との触れ合い、生命尊重」(15%)、「安全」(14%)であり、5位が「保育者、子どもの視点」(8%)であった。
 - 3) 「学びに向かう力、人間性等」の記述 (n=12) では1位が「自然との触れ合い、生命尊重」(83%)、2位が「思いやり、協調性」(50%)、3位が「草笛の技能」(33%)であった。4位が「保育者、子どもの視点」(25%)、6位「安全」(0%)であった。
 - 4) 1) 2) 3) の「三つの柱」ごとのカテゴリの人数には差があることがわかった(ピアソンのカイ二乗分析: $\chi^2=20.10$, $df=10$, $p<0.01$)。

今後は短大のキャンパスを園児向けに安全の観点から整備し、保育者と学生が協力して、園児の「自然遊び」体験を観察し、どのような「三つの柱」が育まれる活動の場なのか、また「自然との触れ合い、生命尊重」や「思いやり、協調性」の力は果たして育まれるのかを確かめていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省(平成29年): 幼稚園教育要領
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661_3_2.pdf
- 2) 厚生労働省(平成29年): 保育所保育指針
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf>
- 3) 内閣府、文部科学省、厚生労働省(平成29年): 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」
<https://www.8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kokujibun.pdf>
- 4) 無藤隆、汐見稔幸: 「イラストで読む! 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領はわかり BOOK」 pp. 2-3 学陽書房(2017)
- 5) 元鐘彬、入江和夫: 「幼児と環境」教材における栽培の観察記録分析～「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の観点から～
 鶴川女子短期大学 国際こども教育研究センター研究紀要 pp. 33-40 第1号(2018)

学生による絵本づくりと読み聞かせ実践による効果

～幼児が「園外保育を安全に」を理解できる観点から～

Study Materials Effects of Students' Self-Made Picture Books and the Practice of Storytelling :
From a Perspective of Children's Understanding of 'Safety During Field Trips'

入江 和 夫 入江三津子 福地 昭輝 宮 有佳里 近澤 友理

1. はじめに

保育所保育指針解説（平成30年2月）の領域「環境」では「保育所の外に出かけると、季節による自然や生活の変化を感じる機会が多い。子どもが四季折々の変化に触れることができるように、園外保育を計画していくことも必要である。」とあり、園外保育の重要性が述べられている一方、「事故防止及び安全対策」として「日常的に利用する散歩の経路や公園等についても、異常や危険性の有無、……等を含めて点検し記録を付けるなど、情報を全職員で共有する。」とあり、保育者が散歩などの活動前の危険性について、しっかりと把握することが求められている。また「乳幼児期の子どもが遊びを通して自ら危険を回避する力を身に付けていくことの重要性にも留意する必要がある。」とのことから、子ども自身の危険回避能力の育成についても必要である。

前報¹⁾では保育者を目指す短大生の「野外活動の危険」に対する理解深化を図ることを目的として、園外保育の場面を想定した「かるた」製作及びその遊びを行い、教材としての有用性を確かめた。しかし、「かるた」製作は班でおこなうため、学生は全内容を製作によって理解することはできなかった。

そこで、今回は「かるた」に代えて、「園外保育を安全に」を想定したテーマとして、出発から到着までの危険な場面を5歳児が理解でき、園児自らが危険を回避できる能力を身につけることができるように、学生に絵本を自作させることにした。ここでは、その絵本の典型例を紹介するとともに、学生が園児にどのような「育みたい資質・能力の3つの柱」を絵本に織り込んでいるのかを分析することにした。

学生にとって園児を対象にした「読み聞かせ」活動の機会は少ない。そこで自作絵本を教材とした読み聞かせ活動に関する指導案の作成を行い、学生を園児に見立てた読み聞かせ活動後に園児を対象にした活動を実践し、感想を提出させた。この活動によって学生がどのような能力を身につけたのかを「学力の3要素」²⁾の観点から分析した。これらの結果を述べていく。

2. 方法

- (1) 授業「園外保育を安全に」科目「生活と科学³⁾」：散歩や園外保育を安全に行うために、「野外活動における衛生管理・事故防止指針」（東京大学）³⁾の以下の内容を参考にして2017年度「生活と科学」で講義した。具体的には天候に関して「積乱雲」と落雷、危険・有害な動植物への対応として「野犬」「カラス」「マムシ」「ヤマカガシ」「ハチ」「ドクガ」「マツカレハ」「イラガ」「コマチグモ」「ゴケグモ」「マダニ」を取り上げ、事故例を新聞記事などで補足し、PowerPointでまとめ、それと同時に注意すべき内容を空欄としたワークシート（参考資料）を作成し、配布しながら学習を行った。
- (2) 「園外保育を安全に」を想定したテーマとした絵本製作（授業外）
- (3) 「自作絵本の読み聞かせ」に関する指導案作成
- (4) 短大生を対象にした模擬保育「自作絵本の読み聞かせ」
- (5) 園児を対象にした「自作絵本の読み聞かせ」
 - 1) 対象：t 幼稚園の年長組97名
 - 2) 日時：平成29年5月15日（月）11:00-12:00
 - 3) 場所：短大の講義室A（園児33名）、B（園児32名）及び体育館（園児32名）
 - 4) 学生の受け持ち：園児2～3名／学生

5) 流れ：① t 幼稚園教諭による園児のグループ分け、②読み聞かせ、③ t 幼稚園教諭による指導講評
(6) (5)に関する学生の感想：回収数31名

3. 結果と考察

1 自作絵本に織り込まれた「育みたい資質・能力の3つの柱」

園外保育の際に保育者は勿論、園児自身もどのようなことが危険なのか、その対応をどうしたらよいかなどの理解を目標として、学生は絵本の製作を行った。幼児教育において育みたい資質・能力の3つの柱がどのように絵本に織り込まれているのかの観点から述べていく。

1-1 「ピコちゃんとたけのこほり」

ここではピコちゃんがタケノコ掘りに出かける途中で危険に遭遇し、危険を回避していく絵本である。場面①ではこの絵本全体の流れを要約した場面であり、それは3びきのヒヨコがタケノコ掘りに出かける絵である。場面②では3びきのヒヨコ紹介であり、先頭が地図を持ち、真ん中は水筒、後ろは荷物を持っている。場面③では「まつのきから ケムシがぶらさがっている」「さあたいへん どくをもっているケムシだったら さされてしまいます」と子どもが理解してほしい(=知識・技能)こととして示している。松類につくケムシ「マツカレハ」(ワークシート3ページ参照)に刺されると激痛があり、腫れ上がることから、④「みるだけ みるだけ」として、ケムシにさわってはいけない注意を子どもにわかりやすく示すとともに絵に描いている。「なんて なまえのムシかな?」「こんどは ほんでしらべてみよう」とあり、子どもがケムシの名前を図鑑で調べ、探求心を育んでいる(=学びに向かう力)。場面⑤では天気急変、「ザーあめがふってきました」と避難小屋に入る絵が描かれている。これは落雷の予兆、すなわち真っ黒い雲が近づき、周囲が急に暗くなる(ワークシート1ページ参照)を子どもに気がついてほしいことを(=知識・技能)示している。⑥では近くの木に落雷した様子が描かれている。「きのしたにいたら たいへんだ」と書かれ、木の下は危険であることの理解(=知識・技能)を子どもに求めている。⑦はタケノコを発見したが、その上に蛇がいる。毒蛇の可能性もあることから(ワークシート1ページ参照)「ちかづくと かみつかれてしまうかも」(=思考力)と考えさせ、子どもに理解してほしい(=知識・技能)こととして示し、タケノコ掘りをあきらめている。しばらくすると大きなタケノコを発見し、力を合わせて掘り切った場面(=人間性)で終わっている。

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



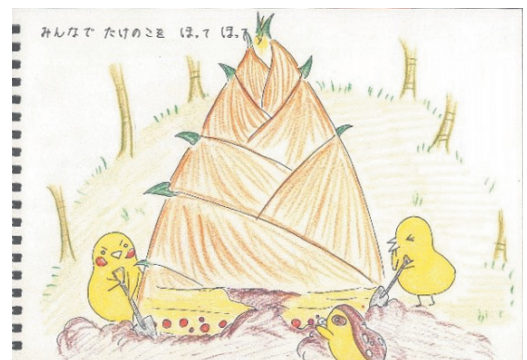
⑧



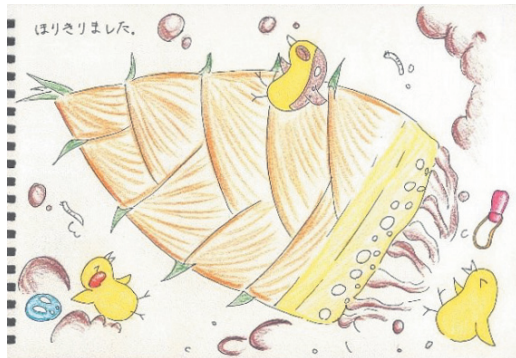
⑨



⑩



⑪



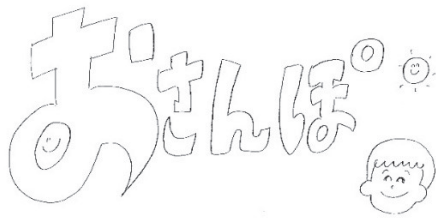
⑫



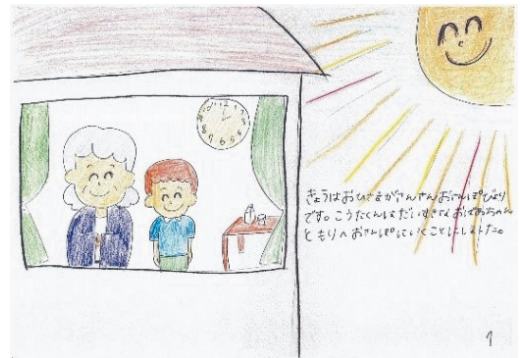
1-2 「おさんぽ」

場面①は表紙である。場面②では「きょうはおひさまが さんさん おさんぽびよりです」「こうたくんは だいすきなおばあちゃんと もりへおさんぽに いくことにしました」と書かれ、笑顔のおばあちゃんとこうたくんが描かれている。場面③では、でかける準備を示している。「ぼうしをかぶり」「ながそでながズボン」「はきやすいくつをはいて じゅんぴばんたんです」と一枚にこれらの準備を3つに分けて絵で示すことで、子どもたちに野外に出かける際の準備を分かりやすく理解させている（＝知識・理解）。場面④では「てくてくすすむと むこうのそらに くろいくもが みえました」「おばあちゃん なんだろう あのくもは」とおばあちゃんに尋ねている。絵では遠くの山の向こうに黒い雲から稲光が見える。しかし、この場面で、おばあちゃんは答えをださず、「あのくもはね……」で終わっている。ここで絵本を見ている園児からすれば、中途半端な回答によって、「あの雲は雷ぐもだよ」、「怖いなー」など、想像をめぐらせた発言（＝思考力）を引き出す効果があり、次の場面への興味関心を喚起する。場面⑤では、おばあちゃんの解説「あのくもはね あめがふる くもなんだよ」「かみなりが おちやすいよ」「もし こうたのいえに くろいくもがかかったら おうちのなかに はいろうね」と書かれ、避難先としてこうたが建物に入った絵とともに○を描き、理解しやすい工夫がなされている（＝知識・理解）。ここで、こうたは避難場所として「きのしたは だめなの」と聞くと、「きには かみなりがおちやすい……」とこうたが感電した絵とともに×を描き、理解を深めている（＝知識・理解）。場面⑥では3分割になって、いぬが登場する。右上の絵では「しばらくいくと いっぱきのいぬがいました」の時は、いぬは寝ているが、右下の絵では大きな文字で「いぬだ!! かわいい」が書かれていることから、大声を出した様子を子どもに理解させようと表現している（＝知識・理解）（＝表現力）。左絵では「いぬが はしってやってきました」と大きく描かれたいぬは歯をむき出し、威嚇している様子を示している。場面⑦では「おばあちゃん 怖いよう」に依って、「おばあちゃんにまかせてごらん。こうやって からだをおおきくみせるんだよ」と言って、そこには両手を上にあげ、背伸びした大きなおばあちゃんの姿が描かれているとともに、いぬが逃げている姿が描かれている。「かわいいからといって ちかづいちゃ かまれるかもしれないよ」「もし、ちかづいてきたら もっているにもつで からだをおおきく みせるんだよ!」のように対処法を示している。場面⑧では巣から落ちたカラスの赤ちゃんについてである。こうたくんは「おばあちゃん あんなところに カラスのあかちゃんが おちているよ たすけなくちゃ」の思いやり（＝人間性）に対して、おばあちゃんは「ううん こうた きのうえをみてごらん カラスのおかあさんが こちらをみているよ」「あかちゃんをさわると おかあさんが こどもをとられたかと かんちがいして おこってつついてくるんだ」「だから そっと しておこうね」と木のうえにいる、親ガラスへの思いやり（＝人間性）を描いている。赤ちゃんカラスを助けたいと思う園児の気持ちを大切にしながらも、危険につながることを理解させている（＝知識・理解）。場面⑨では蛇に遭遇する。本州ではマムシ、ヤマカガシのように毒があるものとそうでない蛇がいるが、それらを識別することなく、その場所から逃げるのが安全である。「へびにちかづいては かまれてしまうから ちかづいてはいけなよ」「そっとにげよう」と2人が踊っているような姿がユーモラスであり、園児に不安を与えない（安定した情緒）ようにしている（＝人間性）。

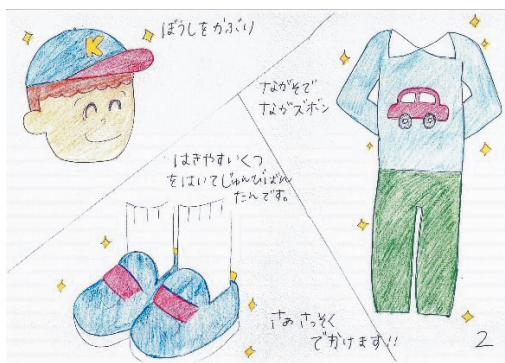
①



②



③



④



⑤



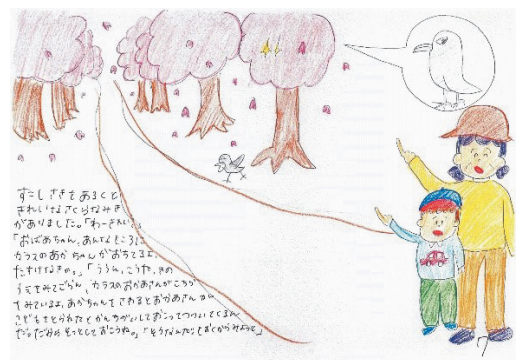
⑥



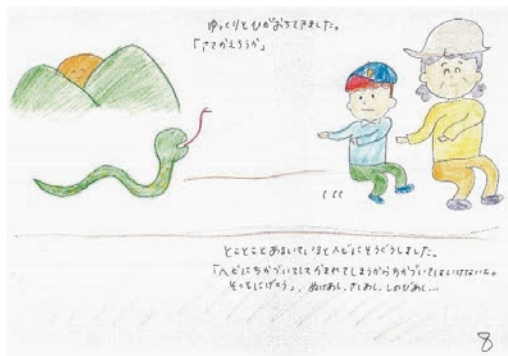
⑦



⑧



⑨



⑩



1-3 「きをつけて」

場面①は表紙であり、まず、子どもの関心を高めるために文字や帽子をかなりカラフルに表現している。「きをつけて」の文字は子どもにとって、何に気をつければいいのか分からない。交通事故かな？ などいろいろ考えさせる効果がある（＝思考力）。場面②では「からすのあかちゃんがいたら……」の「……」は子どもにいろいろな場面を考えさせる表現となっている（＝思考力）。×マークがあることで場面②は一見していけないことなだと「さわってはだめ」の言葉とともに理解できる表現となっている（知識・理解）。場面③の「さわってはだめ」の理由「しんぱいした おかあさんがこうげきしてくるから」が書かれ、男の子の頭の後ろ「遠くから」見ると対処法が○とともに示され、子どもに分かせようとしている（＝知識・理解）。場面④では「かいぬしのいないいぬにおそわれそうになったら」と書かれ、絵では首輪のないいぬが怒っている状況が描かれている。ここでも「せなかをみせて にげてはだめ かまれてしまうかもしれない」と分かる（＝知識・理解）ように説明するとともに×マークをつけることで、一見してダメな場面なんだと分かせようとしている（＝知識・理解）。⑤ではいぬに対して子どもの大きな姿が描かれ、リュックや荷物を頭の上にして、自分を大きく見せる対応を○マークとともに理解させている（＝知識・理解）。⑥は雷に対する避難場所を木の下だと、落雷の危険があることを示している。ここでも×が示されて、一見して分らせる工夫がある（＝知識・理解）。⑦では家屋への避難が○で示され、分かりやすさの工夫が示されている（＝知識・理解）。

危険回避の方法の場面①③⑤⑦の子どもは笑顔として描かれている。それは子どもの気持ちを考え、安心感を与えている（＝人間性）。

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



2 教材「自作絵本」の読み聞かせ

2-1 様子

園児を対象に絵本の読み聞かせに際し、5歳児のt幼稚園児を対象に3人ずつに分け、自分が制作した絵本及び他クラスの学生が制作した絵本の読み聞かせを行っている様子を写真1、2に示した。読み聞かせの際の指導案作成を事前に行い、それに従って実践した。園児は静かに、絵本に集中している様子が窺えた。



写真1



写真2

2-2 「読み聞かせ」がもたらす学生の「学力の3要素」

学生による園児を前にした自作絵本の「読み聞かせ」は初めての経験となる。事前に指導案作成及びそれに基づいた学生間での模擬「読み聞かせ」を行った後、園児を対象にした「安全な園外保育を目指した」自作絵本の読み聞かせの感想を分析する。この活動によって、学生にとってどのような能力が身についたのかを「学力の3要素」の視点から分析した結果を述べていく。

2-2-1 「知識・技能」

「知識・技能」とは「分かったり、気づいたり、感じたり、できるようになる」である²⁾。学生の感想をこの観点から抽出し、「指導過程」に分けて表1に示した。

表 1 読み聞かせによる学生の「知識・技能」

学生 ¹⁾	知識・技能	指導過程
a1	今回の反省点として導入の手遊びなどはレパートリーがあればあるほど万能に使えると思いました。	導入
b1	子供達に興味を持ってもらえるよう手遊びをもう少し覚えたり、笑顔も大切だなと思いました。	導入
c1	手遊びのレパートリーも増やし、スムーズに子どもたちの前でなんでも出来るようにしないといけないと感じました。	導入
d1	実際に子供達に読み聞かせをしてみてもやはり指導案通りにはいかず、手遊びは反応が良かったものの話が脱線してしまい、なかなか絵本に入れなかったり絵本に出てくるキャラクターの話で絵本に入らなかったりしました。保育者の子供達をまとめる力や、脱線してしまわないように話を持って行く力が、いかに自分に身についていないかが分かりました。	展開
e1	『ここにへびがいる～！』とかすぐ反応してくれることがすごく嬉しいなと思いました。反応してくれるので読みやすいし、他のお友だちが知らない、知っているお友だちが教えることで、お互いもっと知れることができていいなと思いました。	展開
f1	前回で読むのが早い、余韻がないと注意されたので今回の授業で改善することができて良かったです。	展開
a2	絵本の持ち方も子どもたちが見えるように顔の横の位置で持つように意識することが大切だなと思いました。	展開
b2	読み聞かせでは、最初の方集中して読んでいて、読んでいる途中「お腹すいた～」と言って一人の子の集中がきれてしまっていてそこから絵本に集中させる事が難しかったのが改善点です。	展開
b3	幼稚園の先生が言っていた言葉に強弱をつけたりして子供達に興味を持たせる事が良いと言っていたのでその辺も意識しながら読むとよかったかなと思います。	展開
b4	もう1つは読み聞かせする場所で、他のグループと結構距離が近く子供達は隣の絵本が少し気になっていて近すぎるのも良くないとわかりました。	展開
g1	園児へ読み聞かせてみてうまくいかないことだらけでした。話が続かなくてたいくつにさせてしまいました。	展開
c2	最後の反省会で、担任の先生からアドバイスや指摘をもらったこと、絵本を読んでいる時、ストーリーを読むのに説明しながら読んでしまっていて、その間に子どもたちが集中力を失ってしまうこと、しっかりした絵本になっていないことなど、私自身確かにそうだなと自覚し、反省しました。	展開
c3	今回の、園児への読み聞かせを体験してみて、自分が思っているより難しく、子どもを集中させ、話を聞いてくれるようにするのは大変だと分かりました。	展開
h1	絵本を読んでいる時、少し飽きてしまっている園児がいたので、一つの絵本を園児みんなが楽しめるよう工夫して絵本を読むことが大事な事だと思いました。	展開
i1	保育者の方のアドバイスにもあったように、読んでいるうちに絵本に頭が視界に入ってしまったたり、抑揚をつけて読んでみたり、また、子どもたちの声を受け止めながら笑顔で読むという大きなことに気がつくことができました。	展開
i2	なんかいかつかえてしまい話が止まってしまったり、最後の方早口で読んでしまったので気をつけなければいけないと思いました。	展開
i3	指導案を事前にかきましたが、思っていたペースや子供の様子が違っていたり、止まってしまうと子どもたちが話をし始めてしまったりともう少し惹きつけるように読んだり声かけが必要だと感じました。	展開
j1	自分で作った絵本であり内容が野犬やセアカゴケグモなどと園児には難しかった為、絵本を読んでいる途中に質問されたり、そこから園児自身の話になったりと集中力が欠けている部分は沢山あると感じました。	展開
l1	導入では、手遊びを一つしか決めていなくあと2,3個考えておいてももう少し子どもの緊張をほぐせば良いと思いました。主活動では、読み聞かせの際子どもからの質問が多く読み聞かせが途切れ途切れになりストーリーとしては良くなかったです。	導入 展開
e2	余った時間をどのように使うか。事前にグループが分かっていたので余った時間でグループで集まり遊びをすれば良いかと、反省会で気づきました。	全体
m1	自分が作った絵本で園児への読み聞かせを行って分かったこと感想はまず、時間の使い方が難しいと思いました。	全体
d2	子ども一人一人の対応が違う事や自身の語彙力の足りなさを改めて実感しました。	全体
e3	同じ内容の絵本を2冊読むのは園児にとってはつまらないかなと思いました。	全体
a3	設定された時間をいかに有意義に使いこなせるかがとても重要で無駄に時間を使うのではなく、子どもたちが充実した時間を過ごせるように保育者が事前にどのようにすれば子どもたちが楽しめるのか、安全に配慮できるのかを考え準備できれば良いと思いました。	全体
k1	だるまさんがころんだをやる時に絵本を置きっぱなしにしてしまったので、絵本の置き場も考えた方がいいなと思いました。実習では、環境構成をもっと考えないといけないなと思いました。	全体
l2	絵本を読んでいる時に困らないよう指導案もいろいろな予想を立ててましたが予想を超えることが起きてしまったり思ったより緊張してしまいうまくいきませんでした。	全体
i4	野外を散歩し、それを実際に自分で感じたこと、目で見ただけ危険なことなどを絵本にするのにとても難しく感じました。	全体
p1	内容も、説明的すぎると子どもたちには難しく理解できず、かといって絵本的すぎると自然の怖さが伝わらないということがわかりました。	全体
p2	今回のことで、活動の前にしっかりと指導案を練ることが、いかに大切かがわかりました。	全体

1) 例えばa1, a2, a3であれば、学生aの同じ感想の中で記述箇所を示す。

「導入」に関して学生 a1 「導入の手遊びなどはレパートリーがあればあるほど万能に使えると思いました。」、b1「子供達に興味を持ってもらえるよう手遊びをもう少し覚えたり、笑顔も大切だなと思いました。」、c1「手遊びのレパートリーも増やし、スムーズに子どもたちの前でなんでも出来るようにしないといけないと感じました。」のように手遊びの種類をもっと覚えることの重要性に気づいている。

「展開」については d1 「子供達をまとめる力や、脱線してしまわないように話を持って行く力が、いかに自分に身についていないかが分かりました。」、b2「絵本に集中させる事が難しかったのが改善点です。」、b3「言葉に強弱をつけたりして……意識しながら読むとよかったかなと思います。」、g1「園児へ読み聞かせてみてうまくいかないことだらけでした。話が続かなくてたいくつにさせてしまいました。」、c2「絵本を読んでいる時、ストーリーを読むのに説明しながら読んでしまっていて、その間に子どもたちが集中力を失ってしまうこと……など、私自身確かにそうだなと自覚し、反省しました。」、c3「子どもを集中さ

せ、話を聞いてくれるようにするのは大変だと分かりました。」、i1「抑揚をつけて読んでみたり、また、子どもたちの声を受け止めながら笑顔で読むという大事なことに気がつくことができました。」、i2「話が止まってしまったり、最後の方早口で読んでしまったので気をつけなければいけないと思いました。」、i3「止まってしまうと子どもたちが話をし始めてしまったりともう少し惹きつけるように読んだり声かけが必要だと感じました。」、j1「絵本を読んでいる途中で質問されたり、そこから園児自身の話になったりと集中力が欠けている部分は沢山あるなと感じました。」、h1「一つの絵本を園児みんなが楽しめるよう工夫して絵本を読むことが大事な事だと思いました。」のように子どもを集中させ、惹きつける力の必要性に気がついている。

e1『ここにへびがいる～！』とかすぐ反応してくれることがすごく嬉しいなと思いました。反応してくれるので読みやすいし、他のお友だちが知らない、知っているお友だちが教えることで、お互いもっと知れることができていいなと思いました。」のように子どもが教え合うことができる良さに気づき、述べている。f1「読むのが早い、余韻がないと注意されたので今回の授業で改善することができて良かったです。」のように読み方の改善がうまくいったことが分かったことを述べている。a2「絵本の持ち方も子どもたちが見えるように……意識することが大切だと思いました。」は絵本の持ち方の改善について述べている。b4「読み聞かせする場所で……隣の絵本が少し気になっていて近すぎるのも良くないとわかりました。」のように環境構成の重要性に気がついている。l1「導入では、手遊びを一つしか決めていなくあと2、3個考えておいてももう少し子どもの緊張をほぐせれば良いと思いました。主活動では、読み聞かせの際子どもからの質問が多く読み聞かせが途切れ途切れになりストーリーとしては良くなかったです。」のように導入の大切さと絵本のストーリー改善の気づきを述べている。

「全体」ではe2「余った時間をどのように使うか。……反省会で気づきました」、d2「……語彙力の足りなさを改めて実感しました。」、e3「同じ内容の絵本を2冊読むのは園児にとってはつまらないかなと思いました。」、a2「設定された時間をいかに有意義に使いこなせるかがとても重要で……」m1「……時間の使い方が難しいと思いました。」、k1「絵本を置きっぱなしにしてしまったので、……実習では、環境構成をもっと考えないといけないなと思いました。」、l2「絵本を読んでいる時に困らないよう指導案もいろいろな予想を立ててましたが予想を超えること……緊張してしまいうまくいきませんでした。」のように時間の使いかた、自分の語彙力の足りなさ、環境構成の重要性、指導案改善についての気づきを述べている。i4「野外を散歩し、それを実際に自分で感じたこと、目で見た危険なことなどを絵本にするのにとても難しく感じました。」p1「内容も、説明的すぎると子どもたちには難しく理解できず、かといって絵本的すぎると自然の怖さが伝わらないということがわかりました。」のように幼児が理解できる視点からの絵本制作の難しさの気づきを述べ、p2「今回のことで、活動の前にしっかりと指導案を練ることが、いかに大切かがわかりました。」のように指導案の改善の大切さを述べている。

2-2-2 「思考力・判断力・表現力」

「思考力・判断力・表現力」とは「気づいたことなどを使いながら、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること」²⁾であり、学生の感想をこの観点から抽出し、「指導過程」に分けて表2に示した。

表2 読み聞かせによる学生の「思考力・判断力・表現力」

学生 ¹⁾	思考力・判断力・表現力	指導過程
f2	まずは子どもたちに興味を持ってもらえるように導入のところからしっかりと始めないと初対面でお互い緊張している中で手遊びや絵本を読んでも子どもたちには何も伝わらないと思いました。なので自己紹介をして身近な事を質問して答えてもらって距離を詰めて子どもたちの緊張をほぐしたところで手遊びの説明を1からして手遊びをやって楽しんでくれていたと思うので良かったです。	導入
g2	手遊びのレパートリーがなかったのでレパートリーを増やすべきだと思いました。知っていても頭が真っ白になり子供の前で出来なきや意味がないので人の前でやれるようになっておくべきだと思いました。	導入
f3	私の今回の授業での目標は絵本をゆっくり読んで子どもたちに余韻をとり内容を理解して楽しんでもらうという事だったのでゆっくり読みました。ゆっくり読んだ事によって最後には楽しかったと言ってもらえました。	展開
g3	読み聞かせのとき、説明をいれてしまったので楽しませる工夫が大切だと思いました。	展開
i5	どうしてそうなるのかを前や後に付け加えたりして、クイズ形式にしても面白かったかなと読んでいて思いました。園児達も”なんでだろうね?”と子供達で考えて話し合う姿も見られたのでうちちょっとそうした工夫が必要だと思いました。	展開
i6	子どもたちは思ったよりも多くのことを知っていて、ある場面で手袋が出てきたときに子供の方から「手袋は、危ないものとかに触ったときに危なくないようにするんだよ」などと話していて感心しました。改めて確認することによってよい学びに繋がれたことがとても良かったなと思いました。	展開
a3	絵本に出てきた注意する部分を、問題形式にして『こうなったときどうすれば良いんだっけ?』などと質問したら〇〇!!と答えてくれたのがとても良かったと思いました。	まとめ
a4	2つの絵本を何回か繰り返し読んでいくと、子供たちはストーリーを覚えて私が読んでいることに対して興味を持ち子どもたちからこれは〇〇だ!などと会話をしながらの流れになりました。質問をして答えてくれることでそこからまとめて外へお出かけするときは今日お話ししたことにつけようねというまとめができました。	まとめ
l1	まとめでは、楽しかったと喜んでいて絵本にでてきたことを振り返りクイズをだしてみると、危ないことをしっかりと覚えていたのでまとめとしては良いまとめができました。	まとめ
r1	今回は指導案通りに進めることは出来ませんでした、柔軟な対応をとり、子ども達に関わることが出来たのではないかと思います。	全体
q1	最後の反省の時に園の先生が言ったとおり読み終わってからさっきわからないって言ったところを読み返す方がいいのかなって思いました。でも分からないって言うのに流して先進むのは子どもが分からないまま進まれたって思ってた先の話が聞かなくなるのではないかともし思いました。	全体
m2	指導案を書いて行ったけど指導案通りにいかないことが多かった。子どもだから話がそれちゃったりする事も多くて話がごちゃごちゃになっちゃったりすることがあって難しい部分もありました。だからそういう時になった時の対応もしっかり指導案など頭に置いておくのが大切になると思いました。	全体

1) 例えばa1, a2, a3であれば、学生aの同じ感想の中で記述箇所を示す。

「導入」ではf1「……導入のところからしっかりと始めないと初対面でお互い緊張している中で手遊びや絵本を読んでも子どもたちには何も伝わらないと思い……自己紹介をして身近な事を質問して……子どもたちの緊張をほぐしたところで……手遊びをやって楽しんでくれていたと思うので良かったです。」のように導入の手遊びを行う前に何をしたらよいかと思考し、自己紹介などを行ったことが首尾良くできたとのことである。

g2「手遊びの……レパートリーを増やすべきだと思いました。知っていても……子供の前で出来なきや意味がないので……なれておくべきだと思いました。」のように、子どもの前でどうしたらよいかと思考し、慣れが必要だとしていた。

「展開」ではf3「私の今回の授業での目標は絵本をゆっくり読んで子どもたちに余韻をとり内容を理解して楽しんでもらうという事だったので……最後には楽しかったと言ってもらえました。」はゆっくり読む、余韻もとることを思考し、実行した結果、子どもから楽しかったとの感想を得たとのことであった。g3「読み聞かせのとき、説明をいれてしまったので楽しませる工夫が大切だと思いました。」のように楽しませる工夫を考えている。i5「どうしてそうなるのかを前や後に付け加えたりして、クイズ形式にしても面白かったかなと読んでいて思いました。……もうちょっとそうした工夫が必要だと思いました。」のようにクイズ形式などを組み入れるような工夫を考えていた。i6「子どもたちは思ったよりも多くのことを知っていて、……改めて確認することによってよい学びに繋がれたことがとても良かったなと思いました。」のように改めての確認を工夫したところ、学びにつながれたと述べている。

「まとめ」ではa3「絵本に出てきた注意する部分を、問題形式にして……と質問したら〇〇!!と答えてくれたのがとても良かったと思いました。」のように、子どもに注意させたい箇所を質問形式にと工夫したところの効果があつたと述べている。a4「2つの絵本を何回か繰り返し読んでいくと、子供たちはストーリーを覚えて私が読んでいることに対して興味を持ち……質問をして答えてくれることでそこからまとめて外へお出かけするときは今日お話ししたことにつけようねというまとめができました。」は子どもが理

解している内容を質問して確かめていく方法を考え、それによって子どもの興味関心を高め、外出の際のまとめができた」と述べている。l1「まとめでは、楽しかったと喜んでいて絵本にでてきたことを振り返りクイズをだしてみると、危ないことをしっかり覚えていたのでもとめとしては良いまとめができました。」も同様に振り返りクイズを行う工夫を述べている。

「全体」ではr1「今回は指導案通に進めることは出来ませんでした、柔軟な対応をとり、子ども達を関わる事が出来たのではないかと思います。」のように指導案どおりにいかない現状を考え、柔軟な対応の必要性を考え出している。q1「最後の反省の時に園の先生が言ってたとおり読み終わってからさっき分からないって言ってたところを読み返す方がいいのかなって思いました。でも分からないって言うのに流して先進むのは子どもが分からないまま進まれたって思って先の話の聞かなくなるのではないかなとも思いました。」は指導講評の教員のアドバイスに関して、それとは違う考えを出している。m2「指導案を書いて行ったけど指導案通りにいかないことが多かった。……そういう時になった時の対応もしっかり指導案など頭にいられておくのが大切になると思いました。」のようにうまくいかない場合も考えた指導案が大切であることを述べている。

2-2-3 「学びに向かう力・人間性」

「学びに向かう力・人間性」とは「心情、意欲、態度に関わるものであり」²⁾、学生の感想をこの観点から抽出し、「指導過程」に分けて表3に示した。

表3 読み聞かせによる学生の「学びに向かう力、人間性」

学生 ¹⁾	学びに向かう力、人間性	指導過程
a5	導入から自己紹介をして手遊びを1曲やったのですが時間配分を考えずにやってしまい、絵本を2つ読んだのですが早く読み終わってしまいました。しかしなんとか時間を繋げようと努力はしました。	導入
k2	園児への読み聞かせをした感想は、自己紹介をしたりしたのですが早く絵本2冊を読み終わってしまい、手遊びも全部飛んでしまったり、クイズも思い浮かばなくてあたふたしてしまいました。その後に、園児から「その絵本好きだからもう一回読んで」と言って貰えて良かったなと思いました。	導入
c4	絵本を読む前に手遊びや、はじまるよはじまるよをやったりして、子どもたちも笑顔で楽しそうに一緒にやってくれて嬉しく思いました。	導入
s2	「これは蛇だよ」と説明を入れながら読んでいたので少し飽きている子どもがいて次読むときは子どもが興味を持てるような工夫をしようと思います。	展開
f4	絵本を読み終わって絵本に出た事を子どもたちに質問したらしっかりと答えてくれたのでちゃんと理解してくれたんだなと嬉しくなりました。	まとめ
f5	もし次にまた絵本を作ることがあるのなら短く簡単な絵本を作って集中力が切れてつまらないと思われないような絵本を作りたいと思いました。	全体
b5	次の幼稚園実習で今回の読み聞かせの改善点を改善していけたら良いなと思います。	全体
s1	余った時間で手遊びをしようと思ったのですが手遊びがややふやになってしまっ上手くできなかった、しっかり覚えるようにしたいなと思います。	全体
t1	幼稚園実習に行ったら絵本や紙芝居を読む機会が必ずあると思うので指導案をしっかり書いてどんな場面になっても対応できるようにしたいなと思います。	全体
l3	絵本を自分で作り子供に提供するという事を今回初めてやりました。絵本を作っている時から子供にわかりやすく伝える難しさを感じていました。	全体
l4	保育者にアドバイスをいただいたことを受け止め幼稚園実習に生かしたいなと思います。	全体
g4	空いた時間の工夫や、時間配分が特に出来ていなくて、飽きさせてしまったことが申し訳ないと思いました(d)	全体
c5	担任の先生からアドバイスや指摘を頂いたことを忘れず、またこういう体験があったりしたら、反省を活かしていきたいなと思います。	全体
m3	時間の使い方をしっかり考えておくことが大切で大事だなと思いました。導入を長めに取るとか、ゆっくりひとつひとつ危ない事を説明したりとか、いろんなやり方はあると思うので実習の時とかに自分が困らないように考えておきたいです。	全体
m4	今回の反省を生かして実習頑張りたいと思いました。	全体
r2	子ども達とクイズ形式で環境についてたくさんを話しがで、子ども達に園外保育での楽しさと危険について覚えてもらえてとても嬉しかったです。	全体
r3	今回の経験を生かして、幼稚園実習に取り組んでいきたいなと思います。	全体
h2	自分で作った絵本を園児たちが「面白かった！」って言ってくれたのは嬉しかったです。	全体
i7	これからの実習でも絵本や紙芝居などを読む機会にはそうしたところに気をつけたいと思い、保育者のアドバイスや勉強してきたことを生かしたいです。	全体
i8	読んでいて最初は緊張しましたが、とても楽しく臨みました。	全体
p3	幼稚園実習の全日指導案を作る際は、特に安全に配慮して、実習を行いたいと思います。	全体
j2	今後の実習でそうならないためにも、最初からどのように絵本を読んだら子どもたちは飽きないか、集中してくれるか試行錯誤しながら自分のやりかたを見つけていきたいと思っています。	全体

1) 例えばa1, a2, a3であれば、学生aの同じ感想の中で記述箇所を示す。

「導入」ではa5「絵本を2つ読んだので効はやく読み終わってしまいました。しかしなんとか時間を繋げようと努力はしました。」では努力しようとする意欲を示している。k2「園児への読み聞かせをした感想は、……園児から「その絵本好きだからもう一回読んで」と言って貰えて良かったなと思いました。」のように、子どもの反応から成功感を得ている。c4「絵本を読む前に手遊びや、はじまるよはじまるよをやったりして、子どもたちも笑顔で楽しそうに一緒にやってくれて嬉しく思いました。」のように、考えた手遊びの活動が好評だったことから喜びを感じ、この活動の達成感を示している。

「展開」「まとめ」ではs2「これは蛇だよ」と説明を入れながら読んでいたので少し飽きている子どもがいて次読むときは子どもが興味を持てるような工夫をしようと思います。」のように、飽きている子どもの様子から読み聞かせの工夫意欲を示している。f4「絵本を読み終わって絵本に出た事を子どもたちに質問したらしっかりと答えてくれたのでちゃんと理解してくれたんだなと嬉しくなりました。」は、絵本の内容を子どもに確認したところ、理解していたことの喜びであり、自信につながる。

「全体」ではf5は「もし次にまた絵本を作ることがあるのなら短く簡単な絵本を作って集中力が切れてつまらないと思われぬような絵本を作りたいと思いました。」、b5「次の幼稚園実習で今回の読み聞かせの改善点を改善していけたら良いなと思います。」のように、今回、自作した絵本の反省を次回、どのようにするかと意欲を示している。s1「……手遊びがあやふやになってしまって上手くできなかったのも、しっかり覚えるようにしたいと思います。」は手遊びを覚えることの意欲、t1「幼稚園実習に行ったら絵本や紙芝居を読む機会が必ずあると思うので指導案をしっかりと書いてどんな場面になっても対応できるようにしたい(d)と思いました。」では指導案の改善意欲を示している。l3「絵本を自分で作り子供に提供するという事を今回初めてやりました。絵本を作っている時から子供にわかりやすく伝える難しさを感じていました(d)」は絵本を制作することの難しさを感じているが、子どもにわかりやすいように、を目指した意欲が感じられる。l4「保育者にアドバイスしていただいたことを受け止め幼稚園実習に生かしたいと思います。」、c5「担任の先生からアドバイスや指摘を頂いたことを忘れず、またこういう体験があったりしたら、反省を活かしていきたいと思います。」、i7「これからの実習でも絵本や紙芝居などを読む機会にはそうしたところに気をつけたいと思い、保育者のアドバイスや勉強してきたことを生かしたいです。」はt幼稚園教諭から助言を生かそうとする意欲を示している。g4「空いた時間の工夫や、時間配分が特に出来ていなくて、飽きさせてしまったことが申し訳ないと思いました。」、m3「時間の使い方をしっかり考えておくことが大切で大事だなと思いました。導入を長めに取るとか、ゆっくりひとつひとつ危ない事を説明したりとか、いろんなやり方はあると思うので実習の時とかに自分が困らないように考えておきたいです。」は時間の使い方、工夫しようとする意欲を示している。m4「今回の反省を生かして実習頑張りたいと思いました。」、r3「今回の経験を生かして、幼稚園実習に取り組んでいきたいと思います。」、p3幼稚園実習の全日指導案を作る際は、特に安全に配慮して、実習を行いたいと思います。」、j2「今後の実習でそうならないためにも、最初からどのように絵本を読んだら子どもたちは飽きないか、集中してくれるか試行錯誤しながら自分のやりかたを見つけていきたいと思っています。」ではこれから始まる幼稚園実習に前向きの姿勢を示している。r2「子ども達とクイズ形式で環境についてたくさんを話しができ、子ども達に園外保育での楽しさと危険について覚えてもらえてとても嬉しかったです。」、h2「自分で作った絵本を園児たちが「面白かった!」ってしてくれたのは嬉しかったです。」、i8「読んでいて最初は緊張しましたが、とても楽しく臨めました。」では、絵本を通して、子どもと関わることの楽しさ、うれしさを示している。このようなことは保育者としての生き甲斐、意欲につながる。

3. まとめ

(1) 学生が制作した絵本テーマ『ピコちゃんとたけのこほり』は園児が親しみやすいヒヨコを主人公にしたタケノコ探しの冒険物語である。テーマ『おさんぽ』はおばあちゃんと男の子による散歩であり、いろいろな危険を教えてもらいながら、それを回避していくストーリーである。『きをつけて』は各場面に○×をつけて、危険と安全な対応を一見して分かりやすく解説した絵本である。学生は授業「園外保育を安全

に」(参考資料)を幼児が実践できるような観点から咀嚼し、描いている。絵本の各場面は子どもに何が危険かを分かって欲しい絵と言葉があり、「知識・理解」を育む場面があり、「からすのあかちゃんがいたら……」の「……」で子どもにいろいろな場面を考えさせる(=思考力)を育む場面もあった。また「なんてなまへのむしかな　こんどしらべてみよう」のように、子どもの探求心(=学びに向かう力)やタケノコを発見し、力を合わせて掘ることにより、目的の共有、協力(=人間性)を育もうとしている場面もあった。以上のことから、学生による絵本づくりは「育みたい資質・能力の3つの柱」である「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」を織り込みながら5歳児が理解できる表現で、園児自らが危険を回避する力を身につけることができるように絵本づくりをしていることが分かった。

(2) 園児を対象にした読み聞かせ活動によって学生がどのような能力を身につけたのかにおいて、「知識・技能」ではc3「子どもを集中させ、話を聞いてくれるようにするのは大変だと分かりました」などのように、幼児を対象にした読み聞かせの難しさに気がついている。「思考力・判断力・表現力」では11「まとめでは、楽しかったと喜んでいて絵本にでてきたことを振り返りクイズを出してみると、危ないことをしっかり覚えていたのでまとめとしては良いまとめができました」のようにクイズを行うことを思考・判断し、工夫したことを述べていた。「学びに向かう力・人間性」ではj2「今後の実習でそうならないためにも、最初からどのように絵本を読んだら子どもたちは飽きないか、集中してくれるか試行錯誤しながら自分のやりかたを見つけていきたいと思います。」のように、今回の読み聞かせ実践の反省を踏まえ、今後の実習につなげられるように、子どもが集中する方法を模索しようとする意欲を述べている。以上のことから、園児を対象にした読み聞かせ実践は保育者を目指す学生の「学力の3要素」を育む活動であることが分かった。

以上のことから、保育所保育指針解説が述べているように、園外保育を行うことは非常に重要であるが、それはしっかりした安全対策が基盤にあってこそ成り立つものである。それには園児が危険回避を身につけるための視点を保育者となる学生に育むことが必要であり、学生は幼児期において「育みたい資質・能力の3つの柱」を「園外保育を安全に」を想定した絵本づくりによって織り込むことができた。

また、園児を対象にした自作絵本の読み聞かせ活動は、学生に指導過程における導入、展開、まとめの工夫についてどのようにしたらよいか、子どもを飽きさせないような対応はどうするべきか、もっと興味をもつような絵本とはどのようなものかなど、実践的な課題を与えるとともに実習への意欲を喚起する効果があった。このようなことから、学生の自作絵本及び読み聞かせ活動は保育者を目指す学生にとって、効果的な教材となることが分かった。

参考文献

- 1) 入江和夫、福地昭輝、入江三津子：保育者を目指す短大生の「野外活動の危険」に対する理解向上を図る授業実践の効果～カルタ製作と遊びの授業実践を通して～、山口大学教育学部研究論叢（第3部）65巻、pp 23-33（2016）
- 2) 文部科学省：「新幼稚園教育要領のポイント」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/shiryo/_icsFiles/afile2/0112/051398944_006.pdf
- 3) 東京大学環境安全本部：「野外活動における衛生管理・事故防止指針」第3版
http://ehs.k.u-tokyo.ac.jp/_src/sc_598/jikoboushishishin_ver_3_H24.3.5.pdf

注

「生活と科学」は卒業必修、幼免必修、保育士必修科目。講義概要は「保育者として必要である子どもの生活に関する健康・安全に関して実習や実験などを通して理解する。具体的には園外保育、食中毒、室内空気汚染、水汚染、震災などを扱い、保育者の立場からどのように対応したらよいかについて学習する。授業内容の理解を深めるために、絵本作り、ポスター、保護者へのおたよりなどを作成し、発表する。」

参考資料

2018 生活と科学「園外保育を安全に」 1 ページ

学生番号（ ）氏名（ ）

問題 1 園外保育に関して

1) 幼稚園教育要領（幼稚園教育要領解説平成 30 年 2 月 p127 文部科学省）

「園外の活動は、幼児の発達を十分に考慮した計画の下に実施する必要がある、保護者の参加なども考え、（安全）に配慮して実施することが必要である。」

2) 保育所保育指針解説書 p302（厚生労働省 平成 30 年 2 月

特に保育所外での活動においては、移動も含め（安全）に十分配慮することはもちろんのこと、子どもの発達や状態を丁寧に把握し、一人一人の子どもにとって無理なく充実した体験ができるよう指導計画に基づいて実施すること

問題 2 雷

(1) 「発達した（ 積乱雲 ）がもたらす風水害」
→「（ 雷雨 ）への対応」と「（ 竜巻 ）等突風への対応」と「局所的（ 大雨 ）」

(2) 積乱雲は急に発達することがあるため、屋外での活動前だけでなく、（活動中）も随時空の様子に注意し、（レーダー・ナウキャスト）等の気象情報を入手する。

(3) 雷雨の予兆

＊真っ黒い雲が近づき、周囲が急に（暗く）なる。

＊雷鳴が聞こえたり、雷光が見えたりする。

＊ヒヤッとした（冷たい）風が吹き出す

(4) 雷について保育者の対応

1) 雷鳴が聞こえたり、雷光が見えたりした場合は速やかに（屋内）に避難させる。

2) 雷鳴が遠くても雷雲はすぐ近づいてくる。また雨が降って（いなく）ても落雷はある。

3) 避難場所等に関する留意点

i) （建物）の中、自動車、（バス）、列車の中等への素早い避難が求められる。

ii) 雷は高い場所に落ちやすい。立ち木に落ちると被害を受けるので、立ち木から（離れた）ところに避難する。

問題 3 動物について

(1) 野犬

襲われそうになったときに、（背中）を見せて逃げ出すと噛まれる危険性が高い。対応として真直ぐに立ち荷物や棒を頭上に掲げて自分を（大きく）見せる。

(2) カラス

3 月から（6）月に繁殖期を迎え、特に攻撃性が高くなり、人を襲うことがある。対応としては、つばの広い（帽子）や傘で頭を守り、避難する必要がある。落下したカラスの（ヒナ）には決して近づかない

2 ページ

(3) 毒蛇

1) マムシ：体長は 45cm から 80cm 程度である。踏んだりつかんだりしなければ、攻撃してくることはない。（素手）や（サンダル）などの露出度の高い服装は厳禁である。マムシは一度咬んだ後に、再び複数回咬もうとする習性があるため、一度咬まれたら、すぐに（逃げる）ようにする。

2) ヤマカガシ：体長は 1 ～ 1.5m 程度と大きく、体の前半部分の（オリーブ）色調の斑点が特徴的である通常、踏んだりつかんだりしなければ、攻撃してくることはない。ヤマカガシは口の後方に毒があるため、深く咬まれなければ、通常毒素は体内に入りにくい。（素手）や（サンダル）などの露出度の高い服装は厳禁である。

(4) ハチ

1) （スズメバチ）などの集団生活を営むハチは、巣を守ろうとする防衛本能が強く、場合によっては人が刺されるという被害が生じている。（11）月までくらは活発。

i) ハチに刺されないために巣に近づいたり、（イタズラ）しない。

ii) （洗濯物）にハチがまぎれ込んで刺されることがあるので注意する。

iii) ハチは黒色、黄色に対して激しく攻撃する性質があるため、野外に出かけるときは、黒色、黄色の着衣は避ける。匂いもハチを刺激するため、ヘアスプレーや（香水）などの化粧品の使用にも注意する。

iv) 室内にハチが入ったときは、（明るい）方の窓を開けて静かに出て行くのを待つ。

v) スズメバチは（速く）動く物に注意を寄せるため、手で振り払おうとしたり、走って逃げようとしたするのは、かえって刺激する。スズメバチが近づいてきたら、落ち着いて（静か）にその場を離れるように心がける。

2) 刺されたら

i) 刺された場所からできるだけ遠ざかる。

ii) 刺された部分を指で強くつまんで傷口から毒液をしぼり出しながら、大量の（水）でよく洗い流して患部を冷水または水で冷やす(毒液は水溶性なので、水で流すと毒を（薄める）効果がある)

iii) 決して（口）では毒を吸い出さない。

(5) 毛虫

1) チャドクガ

i) （ツバキやサザンカ）の葉に毛虫が（群れて）いたら、チャドクガ。

ii) チャドクガの全成長段階に毒針毛あり。葉の（裏）に生みつけた卵塊で越冬。卵塊の状態で除去できれば（ベスト）。小さい幼虫のうちに葉を除去するのも効果的。成虫は 2cm くらいの大きさの「ガ」で、翅の先に 2 個の小さい（黒点）のある黄色っぽいガが家の中に飛んできたら要注意。絶対に直接（さわらない）

2) イラガ

i) （サクラ）、ウメ、カキの木やバラ科などの葉に生息している。イラガに刺されると激烈な痛みが生じ、発赤を生じる。アオイイラガは幼虫の背中の帯状模様中央に一本線がある。イラガは（電気）虫とも呼ばれ、刺されると刃物で切られたような激痛を伴うので、チャドクガと同じく絶対に（触らない）。

3 ページ

3) 別名マツクムシとも呼ばれている毛虫はマツカレハ：（松）類の木に生息しており、マツカレハの幼虫の毒針毛に刺されると、激しい痛みがある。毛虫の発生時期 4～6 月

4) タケノホソクロバ幼虫

（竹）や笹にいる毛虫である。竹藪（やぶ）に入ったり、庭の手入れなどをした際に、幼虫に気付かずにあやまって毒針毛に触れてしまい、赤く腫れたり、かゆみなどがおこる。発生時期 5 月～6 月、7 月～8 月、10 月～11 月

(6) 毒グモ

1) コマチグモ

i) （コマチ）グモは体長 1 ～ 1.5cm である。（ススキ）の葉に生息していることが多く、その草むらを用意に歩くとかまれやすい。ススキなどの大型のイネ科の植物の葉を巻いて（巣）にする。

ii) 不自然な巣を見つけても、近寄らない、（触らない）

iii) かまれると激しい痛みがある。赤くなり腫れる。腫れは 2～3 日で引くが、痛みやしびれが 2 週間ほど続く場合がある。重傷例では、頭痛、発熱、悪心、嘔吐、ショック症状などを起こす場合もある。この毒は神経毒で、老人や（子供）、心臓に障害がある人の場合には、かまれると（死亡）することもある。

2) セアカゴケグモ

i) （セアカゴケグモ）は側溝や宅地のパイプ、墓石の隙間などで発見されることが多い。素手でクモをつかんだり、誤って巣に触れてしまったときに発生している。ゴケグモ類に咬まれると、リンパ節の腫れなど

ii) 平成 25 年 7 月に川崎市多摩区菅仙谷内で外来生物法の特定外来生物に指定された“（セアカゴケグモ）”が発見された。

(7) マダニ

1) 生息場所：民家の裏山、（畑）、あぜ道

2) 「北九州市は 11 日、福岡県京都郡在住の女兒（5）がマダニを介して感染する「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」を発症したと発表。女兒は 5 月 30 日に左耳の後ろが腫れ、発熱や嘔吐おうとの症状を訴えた。頭にダニにかまれた痕があり、市環境科学研究所や国立感染症研究所の検査で SFTS と確認された。一時入院したが、快方に向かっている」。潜伏期間は 6 日～2 週間程度。主な症状は発熱と消化器症状（おう吐、下痢など）が中心で、倦怠感、リンパ節のはれ、出血症状なども見られます。致死率は 6～30%

3) マダニから身を守る服装

i) 首は（タオル）などを巻く

ii) シャツの袖口は（手袋）の中に

iii) シャツの裾（すそ）は（ズボン）の中に

iv) ズボンの裾は（靴下）の中に

保育者養成校における学生の学修成果に関する研究（２）

－学生の自己評価の結果から－

A Study on Learning Outcomes of Students at an Early Childhood Educator Training Institution(2):
Based on Self-Evaluation of Students

中村麻衣子 入江和夫

はじめに

大学を取り巻く環境変化や学生の多様化を背景として、日本の大学は教育の質を保証するよう求められるようになった（中央教育審議会、2008）。保育者養成校においては、保育者不足と相まって即戦力となる優秀な人材育成が求められている。こうした中、本学では在学中に保育者としての資質能力を身につけられるよう授業やカリキュラムの改善、すなわち PDCA サイクルの推進をはじめ、教育内容の充実に向けた施策に取り組んでいる。その取り組みの一つとして、筆者らは学修成果の把握に関する研究に着手した。在学中に学生がどのような能力を身につけたか、どのような学びの機会が能力の獲得につながっているのかを具体的に知り、学生の学修成果と保育者として社会に求められている資質能力とのギャップを埋めるような実効性のある施策を実施することが、大学の教育の質向上につながると考える。

学修成果を正確に把握するためには、複数の評価方法によって多角的に検討する必要がある。これまでは教員主体による評価（成績評価やパフォーマンス評価など）が主流であり、第三者主体の評価（たとえば就職先による評価）（入江ら、2018 a）や、学生がどのように学び、何を身につけたかという学生を主体にした学修成果については、まだ議論が始まったばかりである。

そこで、本研究では、学生自身による自己評価のデータを基に学修成果を検討し、教育の質向上の基盤となる知見を得ることを目的とする。

方 法

調査対象者と手続き

保育者養成短期大学生（2016年度入学生）134名を対象に、保育者の資質・能力を測る尺度、および、学修に関するアンケートの２種類の質問紙調査を実施した。統計的解析あたっては IBM SPSS Statistics 26 を使用した。

質問紙調査項目

保育者の資質・能力を測る尺度（以下、23能力）

保育者の資質能力を総合的に測るために開発した本学独自の尺度で、学生の自己評価によって学修成果を数量的に測定するもの（福地、入江、中村2017）。全22項目であったが、本研究においてピアノに関する項目（ピアノ伴奏力：こどもといっしょに歌いながらピアノを弾くことができる）を加え、全23項目について5件法で回答を求めた。回答方法は、各自のスマートフォンかマークシート用紙のいずれか、対象者が回答しやすい方法を選んで実施された。実施回数は3回で、各時期は次の通りであった。

- 1 回目（1 年次）・・・2017年 2 月（実習未体験）
- 2 回目（2 年次）・・・2017年 7 月（実習体験後）
- 3 回目（卒業時）・・・2018年 2 月

学修に関するアンケート

学生の授業に臨む姿勢や態度を測る質問紙調査（百瀬ら、2017）。回答方法はマークシート形式で、2 年次の 9 月（実習体験後）に実施された。本研究では、「授業内容を理解できた」「授業に積極的に関わった」

「シラバスの到達目標を達成できた」、「学ぶ楽しさを感じることができた」「課題に意欲的に取り組んだ」の5項目（4件法）を分析に用いた。

結 果 と 考 察

23能力の因子構造

23能力の因子構造を検討するために、第1回目に実施したデータについて因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、表1のとおり、4因子構造が得られた。

第1因子は、リーダーシップ力や問題解決力、論理的文章力など、思考や判断、表現力に関する項目が多く含まれていたため、「思考力・判断力・表現力」と命名した。第2因子は、異文化理解・尊重や協働力など多様性・協働力に関わる項目が多く含まれていたため、「多様性・協働力」と命名した。第3因子は、保育に関する情報の理解力や専門基礎知識など、専門的な能力に関する項目が多く含まれていたため、「専門知識・技能」と命名した。第4因子は、自分の将来を考える力やチャレンジ精神など、自己実現に関わる項目が多く含まれていたため、「自己実現力」と命名した。

各下位尺度についてCronbachの信頼性係数 α を算出したところ、「思考力・判断力・表現力」が.91、「多様性・協働力」が.82、「専門知識・技能」が.74、「自己実現力」が.77であり、おおむね満足できる水準であった。多重負荷項目もあるが、各下位尺度の α 係数は一定以上の数値を示し、内的一貫性自体はある程度高く、すべての項目が保育者の資質能力として必須であると考えられることから、以下の分析には除外せずに使用した。

表1 23能力の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4
F1 思考・判断・表現力 ($\alpha=.91$)				
15リーダーシップ力 リーダーとして集団を率いて、目標達成に導くことができる	.97	-.12	.04	-.13
5計画行動力 新しいことや考えたことを計画し、実行できる	.87	-.02	-.21	.09
13問題解決力 正しく物事を判断し、必要な対応策を考えたり、他者に働きかけたりして、解決に導くことができる	.77	.12	.05	-.09
4論理的思考力 物事を思い込みや勘ではなく筋道立てて考えることができる	.60	.07	.31	-.17
9自信・自己肯定感 自分の存在意義や価値を肯定したり、自分の能力を信じたりできる	.44	.02	-.06	.40
16自学・自習力 社会状況・環境に関心を持ち、考えたり学び続けたりできる。また自らの資質・能力を高めようと努力できる	.38	.25	.06	.21
8論理的文章力 筋道を立てながら文章を書くことができる	.37	.17	.13	.26
F2 多様性・協働力 ($\alpha=.82$)				
22愛と奉仕 愛情をもって他者に奉仕できる	-.10	.90	-.14	-.07
14協調心・協働力 他者の気持ちを理解したり、積極的に関わったりしながら、協力して活動することができる	.26	.70	-.12	-.05
12自己把握力・自己理解力 自分の行動を振り返り、客観的に見つめることで、自分の問題点や課題を見出すことができる	.19	.67	-.06	-.09
17異文化理解・尊重 グローバル社会における多様な考えや見方を受け入れ、大切にできる	-.09	.56	.24	-.12
18地域貢献 地域社会の一員として、地域に貢献しようとする意識があり、そのための活動ができる	.14	.37	.25	.01
F3 専門知識・技能 ($\alpha=.74$)				
19専門基礎知識 保育に関する基礎知識があり、説明することができる	-.05	.03	.62	.35
3保育に関する情報の理解力 基礎的な英語を読んだり書いたり話したりできる	-.26	.33	.55	.18
21パソコン利用・資料作成力 パソコンなどの情報機器を適切に活用できる	.00	-.05	.53	-.09
20幅広い教養と常識 幅広い教養や常識の必要性を理解し、それを身につけることができる	.00	.30	.51	.01
11情報の収集・整理・読解力 必要な情報を、自ら集め、整理し、活用することができる	.45	.02	.47	-.19
2基礎英語力 基礎的な英語を読んだり書いたり話したりできる	.00	-.13	.40	.02
F4 自己実現力 ($\alpha=.77$)				
1チャレンジ精神 新しいことや高みをめざして、挑戦することができる	-.17	-.15	.06	.65
10粘り強さ・持続力・集中力 物事に集中して、粘り強く取り組むことができる	.01	.32	-.07	.63
7自分の将来を考える力 将来を見据え、自分のやるべきことの方向性や目標を考えることができる	.10	.25	-.20	.61
6伝える力・表現力 自分の気持ちや考えを、的確にわかりやすく相手に伝えることができる	.29	.03	-.05	.48
23ピアノ伴奏力 子どもと一緒に歌いながらピアノを弾くことができる	.19	-.44	.37	.47
F1	—			
F2	.70	—		
F3	.56	.57	—	
F4	.70	.72	.53	—

23能力の結果

学修成果について、1年次、2年次、卒業時の各時期における、各下位尺度の平均値と標準偏差は表2の通りであった。卒業時において、中央値を超えたのは「多様性・協働力」($X=3.15$ 、 $SD=.10$)と「専門知識・技能」($X=3.03$ 、 $SD=.01$)で、中央値未満だったのは「自己実現力」($X=2.80$ 、 $SD=.09$)と「思考力・判断力・表現力」($X=2.90$ 、 $SD=.09$)であった(図1)。「多様性・協働力」が高かったのは、アクティブラーニング型の授業でグループ活動が多いことや、実習で協働力を求められることなどから、学生自身がこれらの能力を使う機会が多く成長実感が得られやすかったためではないだろうか。また、「専門知識・技能」は、ほぼすべての授業が保育者養成に直結していることから、知識が身についたと感じられたと思われる。

「自己実現力」が最も低かったが、これは短期間で身につけられるようなものではなく、学生の実感としてそのような能力が身についたとは感じられなかったと考えられる。「思考力・判断力・表現力」は、「自分の持っている知識・技能を、問題を解決するために活かすことができるかどうか、つまり知識を応用する力(論理的思考力や文章力)」のことであると考えられる。入江ら(2018a)も就職先アンケートの分析結果から、学生の文章力が弱いことを指摘しており、同様の結果となった。下位尺度間に有意差はなく、いずれの尺度も高い得点とは言えない。今後、学生の成長実感を高めることが課題であると考えられる。

次に、時期による違いがあるか否かを調べるため、下位尺度ごとに一要因の分散分析を行った。その結果、すべての下位尺度において有意な違いが見られた(表2)。Tukey法による多重比較の結果、1年次よりも2年次の方が有意に下がっていた。2年次と卒業時には有意差が見られなかった。つまり、1年次から2年次に学年が上がった後、自己評価が厳しくなった。これは、2年次になって実習を体験したことが影響しているのではないだろうか。1年次の調査時は、大学で1年間授業を受けて保育の知識が増えたことで、保育者としての能力が身についたと感じ、自己評価が高くなったと考えられる。しかし、2年次になり実習で現実の厳しさを知ったことにより、自分の能力はこれでは足りない、現場で必要とされるレベルにまで到達していない、などと認知の修正がなされ、得点が下がった可能性がある。

表2 23能力下位尺度の平均値と分散分析結果

	1年次	2年次	卒業時	F値	多重比較結果
I 思考・判断・表現力	3.30 (.09)	2.77 (.08)	2.90 (.09)	13.01 **	1年次>2年次=卒業時
II 多様性・協働力	3.74 (.09)	3.19 (.09)	3.15 (.10)	16.39 **	1年次>2年次=卒業時
III 専門知識・技能	3.58 (.11)	3.00 (.09)	3.03 (.10)	13.08 **	1年次>2年次=卒業時
IV 自己実現力	3.32 (.09)	2.69 (.08)	2.80 (.09)	16.36 **	1年次>2年次=卒業時

() 内は標準偏差、 ** $p<.01$

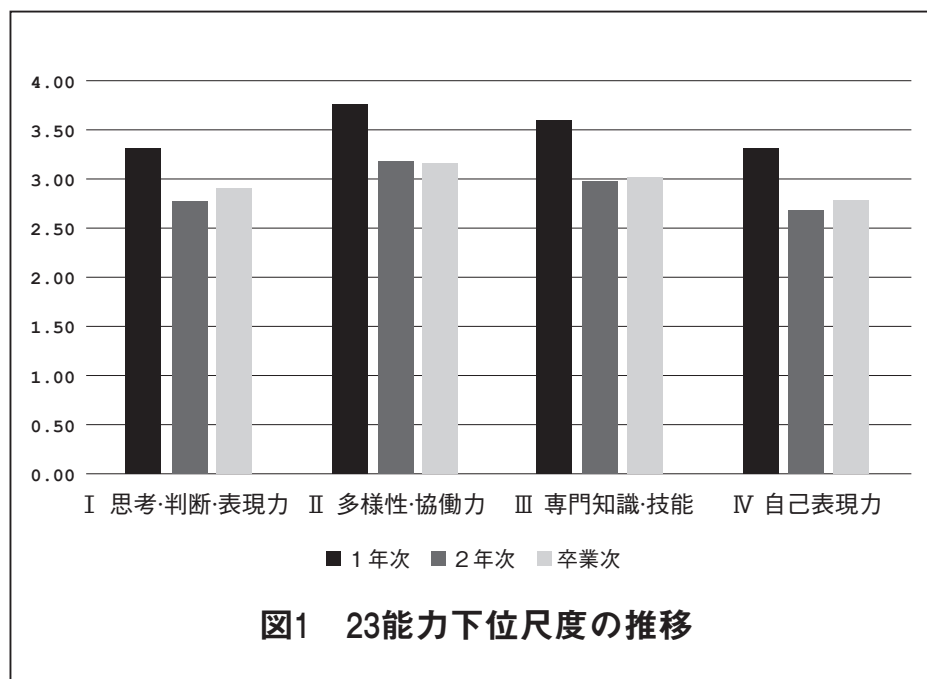


図1 23能力下位尺度の推移

クラスタ分析

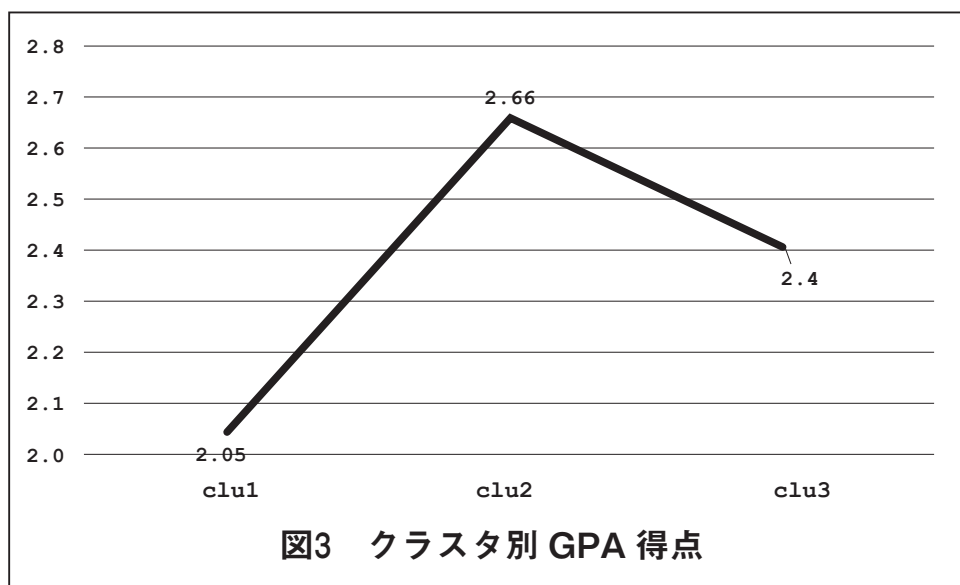
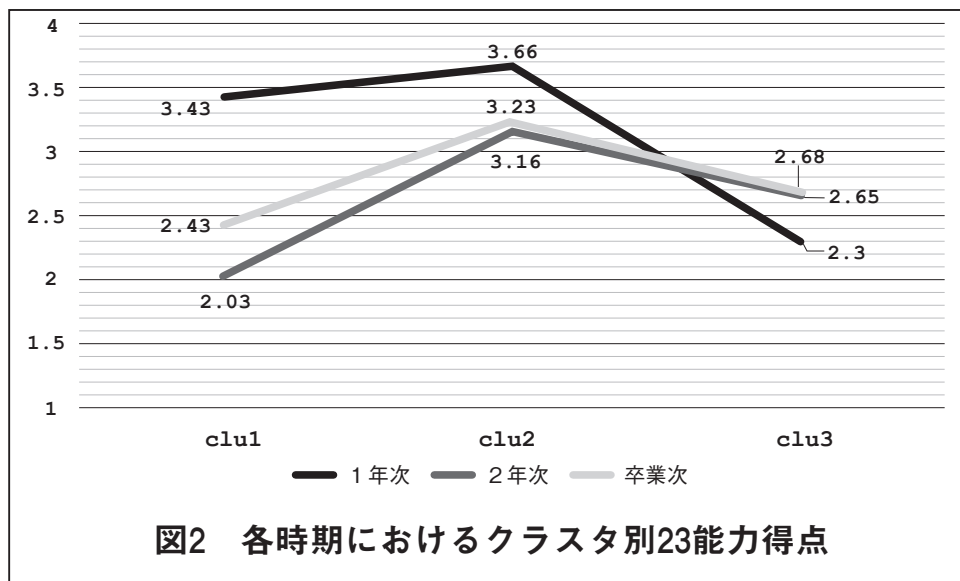
23能力が1年次に比べて卒業時に下がった結果を受け、クラスタ分析によって学生をグループに分け、その特徴を検討する。各時期（1年次、2年次、卒業時）における23能力の平均得点を用いて、Ward法によるクラスタ分析を行った。その結果、3つのクラスタを得た。第1クラスタには14名、第2クラスタには31名、第3クラスタには17名が含まれていた。人数の偏りを調べるためカイ二乗検定を行ったところ、第2クラスタが他の2つのクラスタより有意に人数が多かった ($X^2(2) = 7.97, p < .01$)

得られた3つのクラスタを独立変数、3つの時期を従属変数とした分散分析を行った。その結果、3つの時期に有意差が見られ、Tukey法による多重比較を行ったところ、1年次は第1クラスタ＝第2クラスタ＞第3クラスタ、2年次は第1クラスタ＞第3クラスタ＞第2クラスタ、卒業時は第2クラスタ＞第1クラスタ＝第3クラスタという結果が得られた。各クラスタの平均値は図2の通りであった。

第1クラスタは1年次が高く2年次と卒業時は低かった。このクラスタに属する学生は実習を経て自信をなくした可能性が考えられる。第2クラスタはいずれの時期においても高得点であり自己評価の高い学生であった。第3クラスタはいずれの時期においても低い得点であり自己評価の低い学生であった。

各クラスタによってGPA得点が異なるかどうかを検討するために、一要因の分散分析を行った。各クラスタのGPAの平均値は図3の通りであった。分散分析の結果、群間の得点差は有意であり ($F(2, 59) = 6.27, p < .01$) Tukey法による多重比較を行ったところ、第1クラスタが他の2つのクラスタに比べて有意にGPAが低かった。すなわち、第1クラスタの「実習で自信をなくした学生ら」は教員による成績評価が低い集団であった。1年次の自己評価は高かったが、実習を経て現場の厳しさを目の当たりにし、等身大の自分を見つめる目が養われ、現実的な自己評価に近づいた可能性が考えられる。第2クラスタに属する「自己評価の高い学生ら」は教員による他者評価も高いことが示された。第3クラスタに属する「自己評価の低い学生ら」は、教員による他者評価は比較的高かった。この群の学生は、実力よりも自己を低く評価している可能性が示された。

これらの結果から、23能力が1年次に比べて卒業時に下がったことについて、1年次に不適切に自己を高く評価していた第1クラスタの学生が卒業時には等身大の評価に下方修正したため、見かけ上の23能力が下がったと考えられ、実際に学修成果が下がったわけではない可能性がある。



学ぶ態度が 23 能力に及ぼす影響

次に、学びの姿勢や態度が自己評価に及ぼす影響を調べるため、卒業時の23能力の平均点を従属変数、学修に関するアンケートの5つの項目（「授業内容を理解できた」「授業に積極的に関わった」「シラバスの到達目標を達成できた」「学ぶ楽しさを感じることができた」「課題に意欲的に取り組んだ」）の各得点を独立変数とする重回帰分析を行った。表3に示された独立変数間の相関係数は中程度以下であり、多重共線性の問題はないと考えられる。なお、変数はステップワイズ法を用いた。重回帰分析の結果、重決定係数は、.499であり、1%水準で有意な値であった。23能力に影響度が高い変数は「授業に積極的に関わったこと」（ $\beta = .30$, $p < .01$ ）であった（表4）。また、授業に積極的に関わったかどうかという学びへの取り組み姿勢が、自己評価に影響していたことが示された。積極的に関わることで達成感や充実感につながり、自己評価が高くなった可能性が考えられる。このことから、学生の能動的な授業態度が学修成果に影響していること

が分かった。ベネッセの調査でも、大学教育をより豊かな機会として享受するための学び手の要件について、「グループワークやディスカッションに積極的に参加した」など能動的な学習態度が影響しているデータが得られている（ベネッセ教育総合研究所、2015）。学修成果を高めるには、学生側の個人の努力と、大学が学生の能動的な学習を促す仕掛けを提供することの両方が大切であることが示唆された。

表3 各測定値の基礎統計量と相関係数

	平均値	標準偏差	23能力平均	相関係数				
				授業内容理解できた	授業に積極的に関わった	シラバス到達目標を達成できた	学ぶ楽しさを感じることができた	課題に意欲的に取り組んだ
23能力平均	3.00	0.82	—					
授業内容理解できた	3.01	0.58	.07	—				
授業に積極的に関わった	2.86	0.70	.28	.46	—			
シラバス到達目標を達成できた	2.62	0.68	.00	.51	.42	—		
学ぶ楽しさを感じることができた	2.97	0.65	.14	.46	.40	.42	—	
課題に意欲的に取り組んだ	2.96	0.74	.20	.43	.43	.32	.41	—

表4 重回帰分析結果

	β
授業内容理解できた	-.08 <i>ns</i>
授業に積極的に関わった	.30 **
シラバスの達成目標を達成できた	-.16 <i>ns</i>
学ぶ楽しさを感じることができた	.08 <i>ns</i>
課題に意欲的に取り組んだ	.12 <i>ns</i>

** $p < .01$

結 論

本研究では、23能力のデータを基に、学生の自己評価としての学修成果を検討した。その結果、卒業時に「多様性・協調性」と「専門知識・技能」は中央値を超えていた。しかし、すべての下位尺度において、1年次の評価がもっとも高く、2年次と卒業前には下がっていた。これは、実習を経て自己理解が深まった結果とも考えられる。現実を知ることによって自分を見る目が厳しくなり、自己評価が下がるというのは、一見マイナスのもののように見えるが、自分自身への現実的な気づきが得られた、というプラスの側面としてとらえることができる。本研究では、クラス分析の結果、1年次に高い自己評価だった学生が卒業時には低い評価に下方修正していたが、GPA得点（教員による他者評価）を考え合わせると卒業時の低い得点の方が妥当であることが示された。このことから、1年次に比べて2年次・卒業時の23能力が下がったのは、学生の主観的なもので、実際に能力が下がったわけではないと考えられる。

自己評価の高低に関して、星野（2015）は教育実習の評価について学生による自己評価は実習先の教師からの評価（成績）よりも有意に高く、この傾向は成績が低い学生ほど顕著であることを見出し、成績の低い学生は適切な自己認識ができていない可能性を指摘している。本研究でも、GPAの低い学生が実習前に高い自己評価であったことから同様の傾向が見出された。一方で、GPAが比較的高いにもかかわらず、自己

評価が低い学生も一定数おり、自己評価による効果測定は慎重に検討される必要があり、学修成果を複数の評価方法によって多角的に分析することの重要性を裏付けるものになった。

最後に、自己評価の判断基準の一つの要素として、授業に積極的に関わったかどうかという学習への取り組み姿勢が能力向上に関係していることが示された。すなわち、学ぶ側の要件として、能動的な学習態度が学修成果に影響しているということである。したがって、保育者の資質能力が身についたという学生自身の満足感を得るためには、学生個人の努力と、大学が学生の能動的な学習を促す仕掛けを提供する必要がある。大学の授業において、主体的、対話的、体験型などいわゆるアクティブラーニングを提供し、積極的な発言を促すような雰囲気づくりなどを工夫することが大切であると考ええる。

以上、本研究では学生による自己評価を基に学修成果を検討し、今後どのような取り組みをするべきかを一考した。教員側からの一方的な学生評価だけではなく、学生の自己評価による成長実感や満足度などを大学側が具体的に認識し、教育の質向上に向けてカリキュラム・授業の改善を促すPDCAサイクルにつなげるため、今後さらにデータを積み重ね、議論を深めていきたい。

引用文献

- 1) 中央教育審議会 (2008)「学士課程教育の構築に向けて」(答申) https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf
- 2) 入江和夫、相澤京子、大見由香、中村麻衣子、福地昭輝、小林真由美、田中由起子 (2018 a)「保育者養成短期大学卒業生に求められる学習成果の分析～平成27年度生の就職先アンケートから～」鶴川女子短期大学研究紀要36、81-91
- 3) 入江和夫、相澤京子、大見由香、中村麻衣子、福地昭輝、小林真由美、田中由起子 (2018 b)「保育者養成短期大学卒業生の学習成果の分析～平成26年度生のフォローアップアンケートと在学生へのフィードバックから～」鶴川女子短期大学研究紀要36、69-79
- 4) 福地昭輝、入江和夫、中村麻衣子 (2017)「なぜ「22能力」が必要か「教育の質保証」学(習)修成果の見える化」 鶴川女子短期大学 FD・SD 研修会発表資料
- 5) 入江和夫、中村麻衣子、福地昭輝 (2017)「保育者資質22能力に関する満足感・期待感」鶴川女子短期大学 FD・SD 研修会発表資料
- 6) 中村麻衣子、入江和夫、福地昭輝 (2017)「学修の成果－22能力のデータから－」鶴川女子短期大学 FD・SD 研修会発表資料
- 7) 百瀬志麻、中村麻衣子、竹田恵、相澤京子、橋元知子、福地昭輝 (2017)「幼児教育教員の資質・能力向上をめざす学修ポートフォリオの開発と実践(2)」鶴川女子短期大学研究紀要35、139-148
- 8) 中央教育審議会 教育課程部会 ワーキンググループ (2010)「児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループにおける審議の中間まとめ」 <http://esachn.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000061130>
- 9) 星野美穂子 (2015)「幼児教育実習における自己評価「振り返りシート」の分析」聖徳大学幼児教育専門学校研究紀要 第7号 007-010
- 10) ベネッセ教育総合研究所 (2015)「大学での学びと成長に関するふりかえり調査」 <http://bed.benesse.jp/koutou/research/Detail1.php?id=4701>

日領時代の臺灣に於ける「蠶業」

—郡是製絲株式會社の進出と霧社事件—

The Industry of the Sericulture in the Occupied Taiwan by Japan :
The Advance to Taiwan by the Gunze Filature Corporation and the Musya Affair

池山せりょう

I. はじめに

日清講和条約締結により日本が領有した臺灣は、臺灣總督府設置によって統治が開始され、日本による臺灣支配は昭和20年10月の連合国軍による臺灣占領まで継続した。

先の論説では、臺灣統治時代に於いて最大の殖産興業として成果を上げた「糖業」（鶴川女子短期大学研究紀要第32号）、大日本帝国憲法下で特別な存在であった帝室財産「御料林」の臺灣での設置検討（同第33号）、〔臺灣鑛業権第一號〕事業者として名を馳せた「藤田組」藤田傳三郎が率いた領臺初期の「鑛業」の事績（同第34号）、「教育」のうち「幼稚園」設置を巡る諸問題（同第35号）に着目し、その歴史的意義を明らかにした。

今回は國史館臺灣文獻館所蔵の臺灣總督府文書から、日領時代の臺灣に於ける「蠶業」（＝蚕業）を取り上げ、日本から初めて進出した郡是製絲株式會社の記事を中心に紹介する。養蚕・製糸関係の内情を詳述した「臺灣日日新報」を手引きとして（本文中で特段の注記なく、〔年月日のみ〕記載する場合は、臺灣日日新報記事の引用を示す）、当時の臺灣の理蕃を巡る諸問題をテーマに小論を纏めることとする。

II. 近代に至る「蠶業」の概略

近代日本の飛躍の一翼を担った「蠶業」の起原は、遠く記紀の時代に遡る。「仁徳天皇位に即かせらるゝや、御心を深く農桑に用ひられ、又皇后には山城の筒木に住せる奴理能美（韓人）が三色に變る不可思議な蟲を飼ひ居るを聞召され、態々行幸遊された。（中略）即ち仁徳皇后（磐之媛）の此行幸は、皇室の蠶飼を嚆はせられた始めて」（今井五介著『日本蠶業發達史』（昭和2年3月発行））あり、更に雄略天皇が「皇后をして親しく蠶飼ひの業に従はしめ、又は諸國に散在せる歸化民を集め、功滿王の子孫酒公をして之れを率ゐさせ蠶飼機織の業に就かしめ」（同前）、桑の植樹を諸國に勅して養蚕を奨励した為、蚕糸業が発達したという。

以後、蚕糸業は時勢や度重なる戦禍によって、隆盛と衰微を繰り返しながらも命脈を保持し、連綿と受け継がれた。そして貨幣経済へと変化した江戸時代中期、徳川幕府の産業政策によって、蚕糸業は大きな転換期を迎えた。「貨幣経済の浸透と共に、藩財政も逼迫するに及んで、各藩は殖産興業策を進める必要に迫られ、桑や漆の栽培を奨励し、養蚕や絹織物の生産を勧めた。日本の蚕糸業は、これによって最初の発展期を迎えたと云えよう。」（村上毅「我が国蚕糸業の歴史と近代化過程における役割」『Fiber』vol.63 平成19年）とあるように、各地の絹織物産地の土台はこの時期に築かれた。さらに、「第二の発展期は江戸時代末から明治初期である。江戸時代末期には全国各地で養蚕が行われ、生糸や絹織物が、江戸・京都・大阪などに集まり、武士階級や富裕な商人などの衣料として広く利用される一方、神戸・横浜などの開港と共に、輸出货量も増加した。」（同前）のである。

明治初期には、世界の養蚕業を牽引するフランス・イタリアが微粒子病の蔓延によって、壊滅的な打撃を蒙っており、阿片戦争で西欧列強の侵略を受けた清國は、政情不安に陥っていた。日本の蚕糸業は、世界的な壊滅状態の「その間隙を縫って世界の蚕糸業に成長した」（同前）のである。外貨獲得の為に生糸が極めて有効である事を認めた政府は、養蚕を積極的に保護・奨励し、富国強兵の柱とした。明治5年（1872年）、政府は洋式製糸法を普及させる為、ポール・ブリュナーらフランス人技師を招聘して、官営模範製絲工場を富岡に設置した。富岡製糸場では、全国から集まった士族の子女が工女として働き、習得した技術を

各地の製糸工場へ普及させる役割を担い、器械製糸業の発達に尽力した。こうして蚕糸業は近代日本の基幹産業として発展を遂げた。

Ⅲ. 清領時代の臺灣に於ける「蠶業」

扱て、「蠶業」は日本による領有が齎したものなのだろうか。昭和3年（1928年）9月発行の伊能嘉矩『臺灣文化志』中巻によると、古来より臺灣が養蚕の適地であるとの認識はあったことが各地の風俗志の記述で明らかである。時代が下り、同治初年頃に「臺灣城守營參將凌定國、臺地に蠶桑の利を興すを企圖し、其原籍廣東より蠶種を移入し、（中略）佳苗を支那本土より搬び、府城東門外に栽植せしが、數年の後收支相償はずして終に中止に歸せり」（同前）と本格的な養蚕には至らなかった。

臺灣の清領時代は212年の長きに亘るものの、為政者その人を得ぬ中、小叛大乱続きで匪賊が横行し、民族・宗教・出身地によって徒党を組んで騒擾を事とする有様であった。光緒10年（1884年）、臺灣占領を目論むフランスのインドシナ侵略が進行して清仏戦争が起こった際、清の防務總辦として本島防備の任に当たり、頭角を現したのが劉銘傳である。「清國は戦後この臺灣の重要性を認め、従來福建省に屬してゐたものを獨立した一省として統治することゝなり、その初代巡撫となつた」（山本運一「劉銘傳を語る」『科學の臺灣』26號 臺灣博物館協會 昭和15年12月発行）のである。李鴻章と親交があり、臺灣巡撫（臺灣省省長を表す）となった劉銘傳は、政治機関の改造、兵制の改革、鉄道や海運の拡張、土地制度の確立、都市計画の充実等、実に広範かつ画期的な事業計画を有した「達眼の士」（同前）であった。しかし、莫大な費用を要した急激な改革は島民の反対を招き、遠大な計画は結局頓挫し、巡撫を辞した。劉銘傳の達眼は「殖産興業の方面に於ては、樟腦と硫黄を専賣事業としたこと。茶葉の奨励を圖り、大稻埕に茶業組合を設けてウーロン茶の輸出を圖つたこと。煤務局を設けて石炭の採掘に當つたこと。又蕃政施設に於て撫蕃をその一つの目標としたこと（後略）」とあり、それらは臺灣總督府による統治の道標となったのである。

陳運造總編輯『臺灣蠶業百週年暨 蠶業改良場遷場十週年紀念專刊』（民國76年5月発行）によると、清光緒12年（1886年）「臺北富豪林維源氏在大龍峒大稻埕、冷水坑和土城等地栽桑養蠶繅絲爲臺灣蠶業之濫觴。」とあり、既に養蚕は行われていた事が認められる。

そして、光緒15年（1889年）劉銘傳が企図した産業発展の一環として、「蠶業」も含まれていた。

「既にして光緒十五年八月、臺灣巡撫劉銘傳は實業振作の一策として雲林知縣李聯奎等に委し、江蘇・浙江地方より桑苗蠶種の移搬を行はしめ、且大に其栽培及び飼育の方法を宣傳し、之を全臺の有志に頒與し、以て奨励を示し、又臺北の富豪林家を勧誘し、桑樹を大稻埕・大龍峒の附近及び觀音山麓に植ゑしめ、盛に蠶桑の業を興さんとするの計畫を立てしも、尋で其辭任と共に全く中止せられたり。」（『臺灣文化志』中巻）とあり、養蚕事業を推進する為、臺北の富豪・板橋林家当主林維源氏に勧めて養蚕事業の計画を立てさせたが、1891年劉巡撫の退任で中止になった。

Ⅳ. 臺灣總督府による統治開始

そして明治28年（1895年）、日本による統治が開始された。臺灣總督府発行『事務成績提要 明治二十八年年度版』では、「明治二十八年夏季已降農事上ノ調査ニ從事シ併セテ重要農産物ニ就キ數様ノ試験ヲ施行セシニ其大要左ノ如シ（中略）一 臺北ハ陰晴常アラス初春殊ニ多濕ニシテ晝夜空氣溫度ノ變轉スルコト最モ甚シ而シテ蠶兒ノ發育佳良ニシテ一病兒ヲ生セス是一月中旬ヨリ三月上旬マテハ連日降雨ナリシモ三月中旬以來日日晴天ニシテ空氣乾燥シ天候能ク蠶兒發育ニ恰適スルニ依レリ其繭質ノ佳ナル亦豫想外ニ出テタリ」とあり、日本とは大きく気候が異なる利点に着目し、領有開始時点で既に「蠶業」を有望視したことが分かる。

しかし、蚕業の浸透は難航した。「惟るに古來南支の蠶業は夙に其の名高きに拘はらず、一葦帶水の本島に其の發展を缺き僅かに翫具的か將業用的かの飼育に委せあつたことは奇異の觀がある。改隸後臺北臺中兩農會の如きは、疾くより研究を續けてはゐたが未だ具體的たるに至らなかつた。」（『愛國婦人會臺灣本部沿

革誌』昭和16年2月発行）とあり、千葉豊治「本島に於ける養蠶試験の再興を望む」（『臺灣農友會會報第4號』明治39年5月発行）によると、「臺中農事試験場に於て、明治三十四年より三ヶ年間飼育研究せられたるも、經濟上收支相償はずとして遂に之を廢止せられたり」と短期間で打ち切られた。「生産業としての蠶業がなかつたため、農家が其の副業としての價值を認める迄に彼は十年間を費した。」（『臺灣事情』昭和十八年版）のであった。

領有開始から10年間、蚕業の進展は捗々しくなく、第5代總督・佐久間左馬太の就任により、漸く転機が訪れた。「明治三十九年佐久間總督の任に莅むや、島内野桑の豊富なるに着目し、養蠶可能を主唱して、總督自ら邸内に飼育を試み婦人會員に觀覽せしむる等して、遂に積極的獎勵斷行となつた」（『愛國婦人會臺灣本部沿革誌』）のである。

『臺灣事情』発刊号である大正五年版には「農業 蠶業獎勵」項に下記の記述がある。

「蠶業ハ本島ニ於テハ最新ノ産業ニシテ大正元年九月蠶業獎勵規則ヲ發布セリ其ノ大要ハ新ニ桑園ヲ設置スル者ニ對シテハ桑苗ヲ無償配布シ且設置獎勵金ヲ附與スルコト、蠶種ハ無償配布スルコト、各廳農會ニ獎勵金ヲ交付シ稚蠶飼育場ヲ設置シ養蠶教師ヲ雇用セシメ飼育法ノ指導ヲ爲スコト、生産繭、生絲及眞綿ノ買収ヲ爲スコト等ニシテ現今此ノ規則ニ基キ獎勵シツ、アリ」

このように、大正元年（1912年）9月「養蠶獎勵規則」發布によって補助の便宜を与えられることとなり、蚕業の保護と奨励の環境が整い始めた。

臺灣での養蚕の特色は「（一）一年中桑葉が繁茂して居るため年中養蠶を爲し得ること。（二）内地では被害の極めて多い蠻蛆が本島には全然居らないこと。（三）微粒子病皆無なること。（四）生産費低廉なること。此等諸點は將來本島蠶業が相當有望であることを證するもの」（『臺灣事情』昭和十八年版）であった。

「台湾の蚕業には、他には見ることのできない特色が」（『外地法制誌』第三部の三「日本統治下五十年の台湾」昭和39年5月発行）あり、それらは内地では得られぬ魅力的な利点であった。

V. 皇室との深い関わり

日領時代の「蠶業」は、他の殖産事業とは一線を画す特殊性を有した。それは明治期以降、格別な意義を持った皇室との不可分な関わりである。親蚕は、現在も我が国の農耕文化を象徴する重要行事と位置付けられているが、明治元年（1868年）、皇后（昭憲皇太后）が吹上御苑内に蚕室を設けて養蚕を開始し、明治6年（1873年）6月、皇后は英照皇太后と共に富岡製糸場へ行啓し、視察した。以後、大正期には貞明皇后が紅葉山に養蠶所を設け、範を垂れたのである。大正6年（1917年）には、郡是製絲本社への皇后行啓があり、綾部では道路の敷設等を急ぎ、官民挙げた大行事となった。このように、歴代皇后の親蚕は特別な意味を持ち、同時代の新聞各紙に掃立等の模様が頻繁に報じられたことから、その重要さが看取出来る。

植民地・臺灣に於いても、当然ながら、日本国内の状況が色濃く反映された。臺灣でも養蚕が励行された背景には、経済的な面はもとより、遙かなる内地の「皇室崇拜」という精神的な支柱を確立させるという目的があり、その具現化に適した卑近な産業であったと考えられる。

先の「幼稚園」に関する論考で、皇族を総裁宮とする「愛國婦人會臺灣支部」が担った役割を取り上げたが、主として女性が従事する「蠶業」に於いても、それは同様であった。『愛國婦人會 臺灣本部沿革誌』（昭和16年2月発行）により引用する。

「抑々養蠶業の如きは農家の副業とは云ひながら、其の實家庭婦人の作業として經營するの最も相應はしく又有利にして之が發達を企圖せんには全く婦人の力を藉らねばならぬ。乃ち國家有用の生産たる養蠶を指導啓發するの途は獨り爲政者にのみ待たず寧ろ愛國婦人會の如き婦人團體に於てなすのが當然であり、又得策なることは明かである。依つて當支部は疾くより之に着手せんと焦慮してゐたが、如何せん適當なる場所（當時總督府舊廳舎内に假寓執務）が無かつたが、幸にも臺北城内樞要の一角をトし得るの氣運は到達した。」

と、明治45年（1912年）2月、敷地約700坪を無料借受し、養蠶所を新築して講習生を育成する一方、大正元年（1912年）10月淡水河の対岸江子翠庄（現板橋庄内）官有地28甲3分の貸下げを受け、桑園經營を開始

した。事業は井村臺北廳長（出張所長兼主事）に完全に委嘱し、廳では臺北廳農會に委託して経験ある職員を置き、大正2年（1913年）3月掃立を初めて行った。この経営は「大正二年八、九兩月の大洪水氾濫の爲浸水埋没或は土砂流出の災害を受け、従つて甚しく地形の變化を來し」（同前）、開始早々天災に見舞われ頓挫したが、桑園の開墾が進められた。

Ⅵ. 理蕃事業「蕃人授産」としての臺灣蠶業

臺灣での「蠶業」は、主として山間地で営む産業であることから、他の主産業と比しても「蕃人授産」として重要な意味を持っていた。清時代に於いても、蕃人の撫育に腐心したもの、効果は上がらなかった。日清講和談判の席上、「臺灣には泉漳民族の外に、全島十中六を占める蕃地に、慄悍治し難い蕃人の存することを述べ立て」（鷺巣生「理蕃の四十年史話（一）」『理蕃の友』12號 昭和12年1月発行）、臺灣割譲に難色を示す清國全權李鴻章に対し、伊藤博文全權は「割譲せられし後の治安については御心配無用」と斷つて、ついに臺灣島を接受した。（同前）が、李鴻章の言に違わず、「五箇年理蕃計畫事業に於てさへ、豫算面千五百餘萬圓、事實は之を突破すること約五百萬圓、その後と雖も當局の理蕃に費した金は、實に莫大なるもので」（同前）あり、「理蕃政策」の成否が臺灣統治の最重要課題であった。明治36年（1903年）、警察が蕃人蕃地事務を管掌するに至り、以後、蚕種の無料配布や養蚕法などの講習会が頻繁に行われ、撫育に注力したのである。

『理蕃誌稿』第三卷（大正10年3月発行）では「理蕃の三難として、一、天候の異常、二、地勢の險峻、三、蕃人の決死的反抗」を挙げている。加えて「も一つ忘れてならぬことは蕃人に容易に去り難き迷信の存することではあるまいか」（『理蕃の友』「理蕃の四十年史話（一）」）とあるように、「領臺當時臺灣全土に盲動を逞ふした土匪は一部の者の煽動に依つて無辜を殺戮すること大であつた。蕃人に至つては吾々から見れば、荒唐無稽とも云ふべき迷信に依つて、時變を勃發せしめたことも尠くな」（同前）かった。理解し難い因習・迷信を固守する蕃界では、容易には養蚕に手を染めず、これが蚕業の發展を妨げた大きな要因であった。迷信とは「當初は之を害蟲視し之を飼育せば耕作物の收穫減し、糧食を得ること能はざるに至るべし等」（『理蕃概況』昭和十年）であり、指導に難渋した結果、「收繭二千立餘（十一石餘）を得たる以來、漸次收益あるを知り且趣味を伴ひ、爾來良好の成績を挙げ今や桑園を設置し、蠶具を購ひ各地に於て飼育するに至り、金錢收入の手段なき蕃地の副業として、頗る有望なるを認め」（『理蕃概況』昭和十三年）たのである。蕃地に於ける蚕業の浸透は、危険を孕む上、時間を要した至難の事業であった。

Ⅶ. 昭和2年「郡是製絲株式會社」による「臺灣蠶種製造所」設置

昭和2年（1927年）2月、郡是製絲株式會社によって、臺灣の地に「蠶種製造所」が設置された。『臺灣蠶業百週年暨 蠶業改良場遷場十週年紀念專刊 臺灣蠶業百年大事記』年表によれば、「郡是製絲株式會社在臺南新營正式成立臺灣蠶種製造所、派專任技術員試製蠶種500張。是日本製種家來臺製種の開始。」とあり、正式に臺南州下新營に臺灣蠶種製造所を設立し、ここに専門の技術者を派遣して、実験的に蚕種500枚を作った。これが臺灣に於ける日本の専門家による蚕種生産の嚆矢である。

郡是製絲株式會社（現グンゼ株式会社）は、明治29年（1896年）、波多野鶴吉によって京都府何鹿郡綾部町（現京都府綾部市）に設立された。

明治18年（1885年）4月、東京上野で開かれた全国五品共進会〔繭・生絲・織物・漆器・陶器〕で京都府産の繭・生絲は“粗の魁”と酷評された。その不評を受けて、蠶絲組合結成が進められ、明治19年（1886年）何鹿郡蠶絲業組合長に就任した波多野は、蚕業先進地への技術者派遣や高等養蠶講習所設立など、養蚕・製糸技術者の養成に取り組み（『郡是製絲株式會社六十年史』昭和35年12月発行 参照）、産額の増加と品質の改良を計った。そして日清戦争後の事業勃興期に際して、製糸場設置の必要を認め、“郡是”の名の示すごとく、「何鹿郡に蠶絲業の天國を建設」（「創業三十周年記念郡是江原工場小史」昭和15年11月発行）することを理想に掲げ、郡内蠶絲業奨励機関として創立した。「創業二十周年に當る記念すべき」（『郡是四

十年小史』昭和11年5月発行)大正6年(1917年)11月には皇后行啓の「御恩澤に浴して會社の地位内外に重きを加へ、發展の機運はいよいよ促進された。」(同前)。後述する昭和4年(1929年)の臺灣からの「内地視察團」によると「取引は全國各府縣下に互り、生繭量が約四百萬貫、取引組合數が約三千組合、其の養蠶戸數が約十萬戸と聞きました。同社に勤めて居る人員は女一萬人餘、生産高は生絲が約三十八萬貫、玉絲一萬八千貫、屑物十萬貫、蠶種が四十二萬枚餘と云ふ」(渡井三郎・宇都木一郎「内地觀光記」『臺灣警察協會雜誌』(昭和4年7月発行))状況であった。

郡是製絲は、植民地・臺灣で、どのように蚕業發達を企図したのだろうか。当時の臺灣での郡是製絲の事業展開に関する詳細な記録は、臺灣總督府文書またグンゼ博物苑双方で確認出来ず、未詳であるものの、統治期である昭和11年発行の『郡是四十年小史』では、優良蚕種の製造への注力と拡大發展について、「續いて朝鮮、臺灣、奥羽、九州、沖縄等廣く全國に適地を求めて(中略)利便の地に製造所を置き、取引養蠶家への配給は勿論、廣くその他へも販賣してゐる。」との記述があり、郡是製絲は大正15年(1926年)3月「朝鮮における製造免許を得て新灘津で製造を始め、(中略)一方、昭和2年(1927年)1月から台湾新營において秋冬品種増殖試験を行なったが、その結果翌3年(1928年)には潮州に台湾製造所を設け」(『郡是製絲株式會社六十年史』)ており、共に植民地である朝鮮と臺灣は、およそ2年の差で蚕種製造を開始した。

〔昭和2年5月22日記事〕「郡是製絲活動 蠶兒部の新試験」

京都の郡是製絲會社では本島の養蠶に眼をつけ昨年首脳者渡臺して種々調査を遂げた結果臺南州新營郡において郡是蠶兒部の事業として本島に適する蠶種を供給すべき目的のもとに本年二月から社員二名渡臺して飼育試験を行ひつゝ、あるが其の完全な蠶種を作り上げるまでには四箇年を要するも本島は氣候溫暖にして内地は四、五月頃からでない春蠶の飼育が出来ぬが本島では二月頃から飼育することが出来るので本島で飼育した春蠶を更に内地で飼育して試験を重ねる方針であるから三年目には完全な蠶種を作り出すことが出来るであらうと期待されてゐる」

とあるように、内地と臺灣の寒暖差を有効に活用して、蚕種改良を図った。臺灣で蚕業を展開する上で最大の魅力は、「氣候溫暖」である。年間飼育回数の倍増を可能とする臺灣の氣候は、やがて内地のみならず、朝鮮からも蚕種製造に渡臺するようになった。

Ⅷ. 昭和4年「第一回本島巡查内地視察團」の郡是製絲訪問

昭和4年(1929年)4月25日から5月8日まで、蕃族(原住民)を多く含む「第一回本島巡查内地視察團」が日本各地を訪れた。『臺灣警察協會雜誌』によれば、この視察團は大正11年(1922年)に組織された「角板山教育所同窓會」が主催となって内地観光を計画し、大溪郡下から22名の参加者を募り、總督府警務局の許可を得て実現した。この同窓會は、大正15年(1926年)の蕃族に対する私有銃器引揚断行の際、「全員戮力東奔西走よく其の利害を説き聞かし、平和の裡に相當の成績を収めたので、先覺者としての働きを、幾分なりとも、認めらるゝことになつた」(「内地觀光記」)皇民化教育を受け、蕃族との仲介を成す總督府にとって好適な存在であった。観光目的は、以下の通りである。

「(一)内地と云ふ所は、どんな處であるか。教育、産業及各地の名勝舊蹟を訪ね、以て地理的歴史的に母國の文物の進展状態を窺知したいのであります。

(二)勿論都會の文化に接するは必要であります、可成母國の、山間僻地の荒地を如何に利用しあるかを見、彼我比較研究し、以て荒地開發の資料に致したいのは、誰人も希望する所であります。

(三)他所の如きは野球團を編成して、内地各地を轉戦しながら、母國の文化及人情美や、母國民の目醒ましき活動振等を目撃しながら、多大の感動より、大なる抱負を産み出し、歸郷後數萬の同胞に其の一端を實現し、大なる好影響を及ぼして居ること、信じて居ります。(後略)」

このように、内地観光によって見聞を博くし、得た智識を斟酌して、「未開の同胞に説明する」(同前)ことを掲げた。条件は、「一、観光人員は、可成多數で、先覺者たること 二、観光日數は一箇月内外 三、観光費用約百五十圓」(同前)とされた。この観光に際して、警務局・各警察が全面的に指導を行った。4

月13日に基隆から乗船、16日神戸に上陸後、東京での臺灣博覧会等の見物、日光、宇都宮、川崎、静岡、名古屋、伊勢、京都、奈良、大阪、下関、八幡等の名所旧跡を視察し、帰国した。皇室と所縁深い地が旅程の大半を占める中、東京・明治製菓、静岡・久能村の苺の温床栽培、綾部・郡是製絲、八幡製鐵の見学記録の詳細な記述ぶりは際立っており、臺灣に所縁深い会社の訪問と情報収集に注力している事が分かる。一行は、5月1日、京都から2時間半超かけて綾部を訪れた。以下、同誌十一月號より引用する。

「郡是製絲 同社は我臺灣蕃地の産繭を取引をして頂いて居る處であり、且つ同社が臺灣で蠶種製造をして居らるる關係があり、又養蠶事業は將來有望なる我同族の副業として随一のものである、同社と吾々は深い關係に在るものと言はなければならない。而も一行中の多くの者の多くが現在自ら養蠶をして居ることとて此の日の見学には非常な期待を持つて居たのであります。(中略)それから蠶事所の設備を見ました。高雄州から來た殼繭が澤山置いてありました。次で本社の方へ伴はれた。實に廣い大きな建物には驚きました。警部さんが遠藤社長さんに御挨拶を申上げてから、此の大きな會社の中を全部見せて貰ひました。(後略)」

こうして見学した郡是製絲の細部を詳述し、「數知れぬ多くの工女が絲を取る所、絲の梱包、大きな乾繭場、學寮、食堂、浴場其他を見ました。この會社の中には學校あり、病院あり、實に大がかりなものです。ホントウに驚かされました。」と、教育・衛生施設の充実ぶりを紹介して、「我臺灣蕃地の産繭も、斯かる大會社と取引する様になつたかと、誠に心強く思ひました。」と結び、臺灣の視察団が郡是製絲見学に寄せた関心、期待の大きさが窺える記述である。

内地視察の計画段階で掲げた「可成母國の、山間僻地の荒地を如何に利用しあるかを見、彼我比較研究し、以て荒地開發の資料に致したい」との目的が注視されるが、この点に最も合致するのが、郡是製絲への訪問・見学であろう。臺灣に蚕業を齎した山間の地・綾部を訪ねて得た知見は大きかったと考えられる。

そして、視察団の訪問後も郡是製絲による花蓮港での経営計画など、順調な事業進展が見られる。

〔昭和5年3月1日記事〕「花蓮港の製絲工場 京都郡是が引受」

「花蓮港廳下が養蠶の好適地であることがすでに周知の事實であるが今回京都郡是製絲工場が本年から花蓮港に製絲工場を經營する計畫ですでに數名の技術員が來花してゐる從來指宿氏が經營してゐた製絲工場一切を引受け製絲と同時に製種工場をも經營する計畫であるが、最近花蓮港廳下の蠶繭は昭和二年二百石、昭和三年百八十石、昭和四年二百五十石位の産出であつたが將來これに更に倍する産出を見込まれてゐる。吉野、林田、豊田等の三移民村へは養蠶に要する諸道具一切の貸附又は養蠶指導者五名を派遣して無料で指導する等諸種獎勵の方法を講じてゐる。繭の價格も從來一升に對して二十五錢から三十錢であつたものを一升六十錢にて内地同様の値段で買受ける由で一貫目六七圓になるので農村としても好副業であるから廳下蠶業に大なるシヨツクを與ふるであらうと見られてゐる」

とあり、臺灣西部と比較すると後発地である東部・花蓮港に於いても、積極的な養蚕奨励と指導を行い、副業として高収入を得られることを見込んだ。

Ⅷ. 昭和5年の生糸暴落と「霧社事件」による事業休止

しかし、佐久間總督以降の理蕃政策が成功したかに見えた昭和5年(1930年)10月27日、内地をも震撼させた「霧社事件」が起こった。霧社事件とは、臺中州能高郡霧社蕃(現 南投縣仁愛鄉)で起こった日領時代最大の臺灣原住民による抗日蜂起である。霧社各地の駐在所を皮切りに、運動会を催す霧社公學校が襲撃され、約140名の日本人が惨殺された。「殊に櫻花を以て蕃地唯一の名所」(『愛國婦人會臺灣本部沿革誌』)として、臺灣百選にも選ばれた風光明媚な地で起こった凄惨な事件の影響は大きく、石塚英蔵臺灣總督以下、多数の高官が引責辞任し、理蕃政策を根本から見直す必要に迫られた重大事であった。

この事件を受け、郡是製絲は事業を「休止」(『郡是製絲株式會社六十年史』)した。郡是製絲が事業展開した地・潮州と霧社とは相当距離が離れており、直接の危険は皆無であつたにも係らず、事業休止を決定したのである。この判断からも、霧社事件が日本内地へ与えた影響が如何に深刻なものであつたか推察出来る。

昭和12年（1937年）1月発行『理蕃の友』所収の「理蕃の四十年史話（一）」で、鷺巢生は「霧社は嘗て吾々が二十年前に勤務したことのある地でその時でさへ理蕃當局が蕃人の開化を誇示する平和境そのものであつた。（中略）然し、之を以て従來の理蕃効果を疑ふには早計に過ぎることは後で説くことである。然し夫等は吾々蕃人蕃地の事情に通するもののみが、諒解し得る處であつて、特に内地に在る人々の如きに蕃人竝に理蕃策の効果を疑はしめたことは、已むを得ざることで、當時練習生募集の爲め内地旅行中の私がつくつく辨解に困難を感じたことであつた。」と回想しており、郡是製絲の判断は至極当然であつたと捉えられる。

綾部の郡是製絲の活況を目の当たりにして、臺灣でも蠶業の機運が盛り上がり、内地に比して温暖な氣候を追い風として、軌道に乗り掛けた時期に起こった事件は、臺灣の蠶業發展の芽を摘んだと言っても過言ではない。また、臺灣への進出に先んじて、朝鮮へも進出を果たしていた郡是製絲は、朝鮮で2工場を設置して順調な伸展が看取出来ることから、危険な臺灣への注力は慎重になったと推測される。

加えて、昭和5年8月26日付臺灣日日新報には「繭價の暴落で蠶種を手控へ 高雄州下の蠶況」との記事がある。

「高雄州下の養蠶業はその筋の奨励によつて年と共に良好なる成績をあげ殊に京都郡是蠶絲會社は毎年潮州郡下に夏と秋の兩期に蠶種を製造し來つたので養蠶業の發達に資するもの尠くなかつたが近來の生絲暴落によつて會社は本年秋蠶には蠶種の製造を見合すらしく加ふるに種蠶の相場は一貫目三圓乃至五圓位しか望まれぬのでかくてはこれ迄同様養蠶を奨励する譯には行かぬのみか若損失を見た場合には州下養蠶業に一頓挫を來すやも知れぬので當局は目下慎重に考慮中であるが種蠶を飼育するにしても蕃地平地共に例年の三分の一位の蠶種を配布する方針であると」

この影響を受け、「昭和6年 郡是製絲株式會社臺灣蠶種製造所事業暫停、使民間蠶種製造量遽降爲年僅3,374張。」（『臺灣蠶業百年大事記』）〔昭和6年 郡是製絲株式會社は臺灣蠶種製造所の事業を一時中止した。この年臺灣に於ける民間の蠶種生産量は僅か3,374枚に激減した。〕となり、昭和5年に続けて起こった生糸暴落と霧社事件は、郡是製絲つまり臺灣蠶業の發展を阻むこととなった。

X. 霧社事件後の臺灣に於ける郡是製絲株式會社の展開

尤も、昭和7年（1932年）以降、郡是製絲は潮州にて土地を買収し、高雄州に於ける蚕業の復活が報告されているので、順に紹介する。

「昭和7年 郡是製絲株式會社買収高雄縣（原文ママ）潮州區潮州五魁寮141號土地建造蠶室4棟、建坪共222坪、供飼育原蠶仕様、並於高雄縣（原文ママ）蕃地積極進行蠶種製造。本年民間共製造35220帳蠶種。在臺之日本製種業達21家。」（『臺灣蠶業百年大事記』）（原文中にある「高雄縣」は、正しくは「高雄州」である。）

〔昭和7年 郡是製絲株式會社は高雄州下潮州郡潮州街五魁寮141号の土地を買収、蚕室4棟を建設し、全部で222建坪であつた。此處で標準的な原蚕種を飼育した。その他に高雄州蕃地でも積極的に蚕種を生産した。この年民間では35220枚の蚕種を製造した。臺灣に居る日本の蚕種製造業者は21軒あつた。〕

「昭和8年 郡是製絲、在屏東潮州設立蠶種製造所。」（同前）

〔昭和8年 郡是製絲株式會社は屏東潮州（恐らく戦後中華民國の屏東縣潮州鎮を指す。当時、高雄州潮州郡潮州街であろう）に蠶種製造所を設立した。〕

〔昭和8年3月21日記事〕「高雄州下の蕃地養蠶の復活 郡是製絲が進出」

「高雄州下蕃地の養蠶は昭和二年より五年度までは順調であつたが六七兩年度は繭の相場安で一頓挫を來したが本年度から復活し内地の郡是製絲より社員五名來住潮州郡役所所在地に本部を置き一名駐在他の四名は蕃地四十餘ヶ所の各駐在所を巡回して指導してゐるが従來は絲繭の奨励買収であつたが現在は蠶種の製造指導で之には蕃地は野蠶が豊富なる事と取引値段の良い事で將來蕃人授産として囑目されて居る」

「昭和10年 郡是製絲、出賣前有土地和設施、另購潮州255號土地、興建製種用建物十樓、繼續辦理蠶種製造業務。」（『臺灣蠶業百年大事記』）

〔昭和10年 郡是製絲株式會社は以前購入した土地と施設を手放し、別に潮州第255号の土地を購入し、

ここで蚕種を生育させる建物10棟を建て蚕種製造の事業を継続した。]

このように事業展開がなされた結果、蚕種製造の為の渡臺者が増加し、臺灣全体としては「昭和二年に於ては其の製造額僅かに五千瓦に過ぎなかつたが、近年異常なる進展を示し昭和十六年度に於ては三千十六萬三千瓦の産額を製造」(『臺灣事情』昭和十八年版)するまでになった。

しかし、発展が確実視されたかに見えた蚕業は戦争によって脆くも全壊し、戦後接収されたのである。

「昭和18年 郡是製絲株式會社臺灣蠶種製造所、因戰事影響業務暫停、僅留1名職員保護蠶種製造設施。」(『臺灣蠶業百年大事記』)

〔昭和18年 戦争の影響で郡是製絲株式會社臺灣蠶種製造所の事業を一時中止し、僅かに職員一人を残して蚕種製造施設を保護の任に当たらせた。〕

「昭和20年 郡是製絲株式會社臺灣蠶種製造所之設備、幾全毀於戦争。」(同前)

〔昭和20年 郡是製絲株式會社の臺灣蠶種製造所の設備は、戦争によって全て破壊された。〕

XI. 総括

大正元年より農家の副業として本格的に奨励された臺灣での「蠶業」は、温暖な気候で「養蠶ハ資金化迅速ニシテ、値不廉且搬出容易ナルト、飼育比較的簡單」(『理蕃概況』昭和二年)な事から、発達 of 素地を有していた。昭和期に入り、「昭和二年以降本島が蠶種製造地として多くの特長を有してゐることが汎く認められ内地、朝鮮等より渡臺して蠶種を製造するもの逐年増加し」(『臺灣事情』昭和十八年版)、日本企業から郡是製絲が進出し、安定した発展が見込めた矢先、霧社事件が起きた。理蕃は臺灣統治の成否の鍵であり、臺灣總督府は膨大な費用を投じて一応の安定を見たものの、この事件は理蕃の難しさを改めて認識させた。蕃界との関わりが特に深い臺灣蠶業では、より危険度が高かった。郡是製絲は先んじて朝鮮へ進出しており、朝鮮で着実に進展を遂げたことから、後発で危険な臺灣への注力は然程ではなかった。昭和10年代、内地から技手が来臺するなど、内地に於ける臺灣蚕種の需要も増大し、発展の機運が高まったが、間もなく戦争が始まり、日本による蚕業は完全に潰えた。

日領時代の臺灣に於ける「蠶業」は、中国への蚕種逆輸入の成果も認められ、副業として成功した産業だと言える。しかし、蕃界を舞台に展開を図るという臺灣特有の事情によって、紆余曲折を余儀なくされた。事件・時勢の巡り合わせにより、更に花開く可能性を逸した不運な殖産事業であり、理蕃の難しさを端的に示す産業だと捉えられるのである。

XII. 今後の課題

今回は、植民地・臺灣に於ける「蠶業」を取り上げたが、臺灣の特色を活かした「野蠶」や「栽桑」、嘉義農林學校等に於いて広く行われた養蚕に関する教育の実態など、取り組むべき問題は数多残されており、これらは次回以降の課題としたい。

(追記)

此度の資料調査・閲覧に当たり、手厚いご指導を賜りました「國史館臺灣文獻館」の陳文添先生をはじめ、劉澤民國史館臺灣文獻館副館長、陳惠芳女史に一方ならぬ御世話になりました。また、『臺灣蠶業百週年暨』執筆である陳運造先生、「グンゼ博物苑」吉川智美苑長にも貴重なご教示を賜りました。ご協力を頂きました全ての皆様に心から御礼を述べたいと思います。

日本の幼稚園における英語イマージョン・クラス設置の試み

English Immersion in the Early Childhood Years: Suggestions Made from the Process of
Establishing an English Immersion Class at a Japanese Kindergarten

中村麻衣子 橋元知子 矢野真里絵

1. はじめに

近年、IT化、国際化、2020年の東京オリンピック、パラリンピックの開催なども追い風となり、初等中等教育段階から英語教育の重要性が論じられるようになってきた。文部科学省初等中等教育局国際教育課は2014年に英語教育の在り方に関する有識者会議を設置し、2020年からは小学校5年生から英語が教科化されることが決められている。このような英語教育の早期化の流れを受けて、幼児教育現場においても英語を導入する園が増えてきている。ベネッセ教育総合研究所が全国の幼稚園を対象に行った調査結果によると、調査された幼稚園の58%、認定こども園の54.7%が通常保育時間内に英語活動を実施していた（ベネッセ、2012）。しかし、現在幼児教育で行われている英語活動は週に1回程度30分のクラスを実施している所が多く、これでは英語を習得することが難しい。この問題を解決するための1つの策として、学習者を英語漬けにする英語イマージョン教育がある。

本研究では、一条校として認定を受けている日本の伝統的な幼稚園が、英語イマージョン・クラスを設立するまでの過程を追う。幼児期から自然に英語に触れる環境を整えるためにはどのようなプロセスが必要なのか、また、イマージョン・クラスの導入が幼稚園全体にどのような影響を及ぼし、園の体制にどのような示唆を与えるのかについて考察する。

2. イマージョン教育について

（1）イマージョン教育の定義

イマージョン教育は、1965年にカナダで始まった初中等教育における外国語教育法で、母語と目標言語の両方を伸ばそうという加算的バイリンガリズムを目指す。その教育実践は、目標言語（イマージョンランゲージ）を学習の道具として教科を学ぶことで、母語、学力の発達を妨げることなく高度の第二言語能力を身につけさせようとするものである（Genesee, 1987; Johnson & Swain, 1997）。一般的に外国語を学ぶときはそれ自体を教科として学習するが、イマージョン教育では、外国語の習得を教科学習の前提とせず、教科学習と外国語の習得が同時に起こることを前提に行われる（中島, 1999）。8具体的には目標言語で算数や理科などの教科の授業を行い、人工的に外国語環境を作る。その外国語環境に幼い頃から子どもたちを浸し（immerse）、教科学習と外国語習得を促すものである。イマージョン教育の目的には、①第2言語能力（目標言語）の習得、②地域学区の規定する教科学習の達成、③異文化受容姿勢の育成、④母語の発達、の4つがあげられる（Curtain & Pesola, 1988; Genesee, 1987）。

本研究では、幼稚園でのイマージョン教育のため教科学習を前提とせず、「英語を学習の目的とするのではなく、英語を使って園活動を行うことにより、結果として英語の習得を目指す教育」と定義する。

（2）イマージョン教育の特徴

イマージョン教育を取り入れ、実践しているプログラムでも、その形態や対象言語、目標言語に浸す長さ、学習内容などは個々の学校がそれぞれのニーズに従い決定する。Brondum & Stenson (1998) が述べるように、イマージョン教育は多様な形態をとることが出来る。代表的なのはトータルイマージョン、パー

シャルイマージョン、ダブルイマージョンである。トータルイマージョンはイマージョンがカナダで最初に始まった時の形態で、100%目標言語に浸かっている環境のことである。そしてこの割合は学年が上がるにつれて減っていく。パーシャルイマージョンでは100%以下（多くの場合約50%）の学習が目標言語によって行われる。多くの場合、この割合は変わらない。そして、第一言語を教える教諭1人と第二言語を教える教諭1人の合計2人の教諭が教えている。最後にダブルイマージョンがある。これは、トータルイマージョンが第一言語以外の2つの言語で行われる状態を指す（Brondum & Stenson, 1998）。

このように、イマージョンのバリエーションは様々であるが、最初にカナダでできた時に想定されたイマージョンの特徴は、①目標言語で教科学習を学ぶ、②学習内容は、地域の教育カリキュラムに準ずる、③加算的バイリンガリズムをめざす、④子どもの母語使用を認める、⑤目標言語との接触は学校の中だけである、⑥入学時の子どもの目標言語の到達レベルはほぼ同等である、⑦教師は目標言語と子どもの主要言語双方を習熟している、⑧教室環境は、地域の学校文化に準ずる、の8つが挙げられる（Johnson & Swain, 1999）。第1の特徴として、目標言語で教科を学ぶことである。イマージョン教育は外国語習得を学習の前提とせず、目標言語を使って教科学習を行い、教科学習の達成と外国語習得の2つを目指すものであることはすでに述べた。そのため目標言語で教科学習の全部、または一部を学ぶことは必須である。第2に、学習内容は地域の教育システムによって規定されたカリキュラムに準ずる事である。日本語イマージョンプログラムなら、日本語で教科学習を勉強するが、学習内容は日本の学習要領ではなく、プログラムが所在する各州のカリキュラムに沿ったものとなる。学ぶための言葉は違っても学習内容はその地域の英語モノリンガル（言語を1つのみ習得している人）環境で学ぶ子どもたちと同じである。第3には、加算的バイリンガリズム、つまり子どもの母語も目標言語も双方を価値あるものとして尊重する事、が挙げられる。例えば、アメリカ公立学校では、日本人の子どもが日本語力があるということは主流言語母語話者の子どもにとって重要ではなく、英語がいかにできるかが重要である。このような環境下においては、英語以外の言語は価値あるものとは見なされない。日本語イマージョンプログラムでは、主流言語（アメリカにおいては英語）母語話者の子どもにとっても、日本語習得は1つの目標である。よって、主要言語の英語だけでなく、日本語も意味があるもの、価値があるものとして認識される。第4としては、授業中でも子どもたちに目標言語の使用を強制せず、母語で話をしてもらい良い環境を整えることが挙げられる。第5は、子どもたちが目標言語と接触するのは、学校のみとなる事である。すなわち、学校以外においては主に母語を使用している。第6は、ほぼ全員が入学時に初めて目標言語に触れる事である。例えば、英語イマージョン・プログラムにおいて、入学の時点でアルファベットを覚えている子どもと、そうでない子どもがいる等学習上の差はない、とされている。つまり学習のスタート地点が同じなのである。第7は、教師は目標言語と子どもの母語（英語）双方に十分習熟していることが挙げられる。そして、第8は、教室内の環境は、子どもを取り巻く地域の学校文化に準ずるものとされている事である。すなわち、言語に優劣をつけるのではなく、母語も目標言語も同じくらい大切だとみなされているのである。

このように当初想定されていたイマージョン教育においては、子どもはほぼ初めて目標言語に触れ、教師は目標言語でクラス活動を進める。そして、子どもは言いたいことや質問があれば母語である英語で発話し、答えを得ることができる。この定義に沿って設立されたイマージョンプログラムは、人為的に設定された外国語環境において、母語使用の自由を持ちつつ教科学習が行われるプログラムと言えるだろう。

（3）日本における英語イマージョン教育の現状

1994年、日本で初めてイマージョン教育を取り入れた学校法人は、静岡県沼津市にある加藤学園である。本学園では、英語イマージョン／バイリンガルプログラムと呼ばれるプログラムが幼稚園から高等学校まであり、高校までの課程を全てイマージョン環境で受けることが現在可能となっている。加藤学園幼稚園では、1日交代で日本語・英語の保育をおこない、その日によって、ネイティブ、日本人教諭が主導している。加藤学園を筆頭にその後、イマージョンの流れは続き、既に英語の活動を取り入れていた園が、より自然と言語習得ができるイマージョン教育に転換するようになるなど、イマージョンを新たに取り入れる園が

増えてきた。現在では、鹿児島県の田上幼稚園（インター）、奈良県のハルナ幼稚園、大阪府の大阪体育大学浪商幼稚園、神奈川県 LC A 国際プリスクール（インター）等、北海道から沖縄まで、様々な形態で英語イマージョン教育を行う園が存在している。しかし、その全体数はまだ少数である。

3. 対象幼稚園における英語イマージョン・クラスの設立過程

（1）設立の背景

本研究で取り上げるイマージョン・クラスは、一条校として認定を受けている幼稚園において設立された。設立の背景として、グローバル社会と言われる昨今、未来を生きる子どもたちへ、英語という第二言語を通して幼児期の柔軟な時期に様々な能力、技能を身につけて欲しいという願いがあった。特に、育てたい子どもの姿として、①日本で育つ子どもとしてのアイデンティティ、②世界・多文化に興味を持つ心、③チャレンジする心であり、英語イマージョン教育を通して子ども達がこれらを身につけられるようになると考えられた。

また、少人数・複数担任（チーム）保育をし、大人数の中の一人ではなく、子どもたち一人一人が大きな存在としていられるクラスを作りたいという願いもあった。

（2）幼稚園の特徴

本研究で協力を頂いた幼稚園は、国内にある、年少、年中、年長の3年保育を行っている施設で、全園児200名以上の規模である。40年以上の歴史があり、愛情を持ちつつ、長く広い視点で幼児教育を行うよう意識している。園児の保護者は大半が両親共に日本国籍で、教育については体操、スイミングなど、身体を動かす活動を取り入れつつ、日本の伝統文化を教えたり、英語を教えたりと、子どもが心身ともにバランス良く成長するよう、配慮している。

英語に関しては、英語イマージョン教育クラス設立時以前にも、民間の英会話教室運営会社に委託し、年長児を対象に週1回程度30分の英語教育を実施していた。ゲーム、手遊び歌、身体遊び歌などを取り入れた授業で、日本語を話さない外国人講師がリードし、日本語を話すバイリンガル日本人講師がアシスタントとして付いていた。対象幼稚園においては英語を話す保育者はおらず、園内使用言語は日本語であり、英語の時間外に英語が学習される環境はなかった。

（3）幼稚園における英語イマージョン教育の環境

週1回程度の年長を対象とした英語活動以外、英語環境を整えていなかったため、どのような形で園内に英語の言語環境を整えるべきか議論がなされた。対象幼稚園の場合、英語イマージョン・クラスは園内に1つで、クラスの外に一步出ると周りは全て日本語環境ではあるものの、基本的にはイマージョン・クラスの教員はイマージョン・クラスの子どもたちに英語で対応することにした。しかし、園生活に慣れるまでの年少児の1学期初めや、行事などで日本語クラスと合同の活動時間には、イマージョン・クラスの日英バイリンガル保育者は日本語クラスの保育者と同じエプロンを付け、イマージョン・クラスの子ども達に日本語を話すようにした（エプロンをつけることを、日本語で話す合図とした）。

（4）幼稚園における英語イマージョン教育の特徴

1) 外国人スタッフの受け入れ：ハンドブックの作成

外国人スタッフの受け入れにあたり、日本の幼稚園の特徴（幼稚園で受け入れる子どもの対象年齢、クラス業務から園全体の行事など総体的な仕事をカバーした仕事内容の提示等）、出欠勤などに関する事務的情

報、緊急時の対応方法、服装・持ち物・昼食についてなどの基本的必要情報などを記したハンドブック（図1）を作成した。事前にこのような内容を共有し共通理解をはかることで誤解などをなくし、早い段階で仕事に慣れることを目的とした。

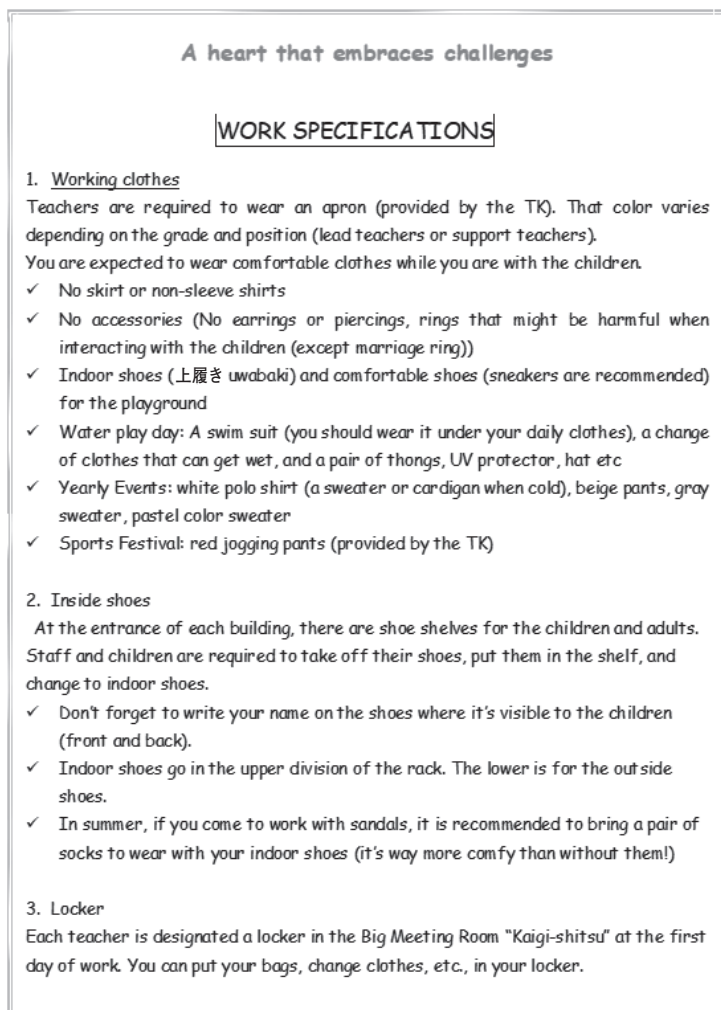


図1 ハンドブック（抜粋）

2) 言語発達の目安：マイルストーン（日本語＆英語）の作成

言語発達の目安として、日本語と英語のマイルストーン（図2）を作成した。これは保育者の指針としてのリストであり、子どもの言語能力をテストするためのチェックリストではなかった。また、必要であればこの指標を元に保育者が保護者に話をする機会があることは想定していたが、保護者に配布するためのものではなかった。更に、作成にあたっては、理解（input）／表出（output）の大きな2つの軸を元に作成した。英語のマイルストーンは、英語に触れた年数による指標／現在の発達状況を捉える事で、言語習得のための次のステップを確認（準備）し、活動や個別対応に活かすものとして作成した。作成は保育が実際に始まる前だったため、現場に沿ったリストにすべく、現在は、内容がより詳細に、現場での声や内容に沿ったものに変化していつている。

また、日本語のマイルストーンに関しては、実際の年齢に基づいた指標／母国語習得の遅れ等を保護者が心配された時などにアドバイスできるように作られた。今後、実年齢ごとの発達の目安に到達する為に活用できる言葉遊びやゲームなどの例を合わせて記録し、より活用できる資料にしていきたいと考えている。

日本語発達の目安	
年少（3～4歳児）	
絵本・話の理解	挨拶・自己表現
・絵本や話の内容が分かり、イメージを起こし、興味を持って見聞きする。 ・興味のある話にス分程度耳を傾けることができる ・スリーヒントゲームで積極的に遊ぶ	
指示理解	機能
・関連性のない二つの語彙を結び付けた指示に理解を示す。（例：粘土のフタとハサミを持ってきてください。） ・条件付きの指示に理解を示す。（例：歩いてトイレに行きましょう。） ・前置詞を理解する（中で、外で、上で、下で、超えて、前で、後ろで）	・幼児語《にゃんにゃん：ネコ、チッチ：おしっこ、ブーブー：車、マンマ：ごはん…など）
語彙の獲得 （名詞・動詞・助詞・反意語など全て）	語彙・文の構成
・赤・黄・緑が分かる ・理解言語から表現言語へと進むので、「～でなく、…だ。」という理解の仕方です語彙を増やす。 ・実際にその言葉を話さなくとも、話す語彙の3倍くらい理解できる。	（語彙） ・身の周りの物の名前が言える ・接続詞が使えるようになる ・意味を理解しないで使っている言葉も多い ・大人や友達の言葉を真似て言葉を増やしていく ・顔の部分の名前が言える（判別できる）（目・鼻・口など） ・形の名前を言える（四角・長四角・丸・三角） （文の構成） ・5語以上で文章を構成し始める ・過去形を使い始める ・代名詞（自分、又は自分以外の対象）を区別して使えるようになる。 ・形容詞・副詞を使う事ができるようになる ・助詞（てにをは）と、接続詞（それでね、だってね、だからね）を使って長い文章で話し始める ・身近な人物の名称を言える（両親の名前）
記憶からの再構築	記憶からの再構築
・自分の名前や他の単語を記憶の中から読み起こす ・身近な人・ものなど経験したことのイメージが持てる	・ごっこ遊びの中で日常生活の言葉を楽しんで使う ・自分の経験と結びつけることができる ・ままごとや電話ごっこを楽しむ ・簡単な伝言ができる ・最近あったことを思い出す
言語による認知力 （数の概念含む）	言語による認知力 （数の概念含む）
・数の概念（5まで） ・時間についても表現しうる力を獲得していく ・今日を軸に、過去をこの前、未来を今度と理解する ・大小・多少の比較ができる ・大きいことから小さいことを理解する（例：大きくないから小さい。） ・前後・左右・反対に気づき始める ・反意語を理解する（上下・開閉・進む/止まる・嬉しい/悲しい・早い/遅い・熱い/冷たい） ・どこ、だれ、いつ、どれ、なに…などの言葉を区別して使い始める	・今日を軸に、過去をこの前、未来を今度と表現する ・経験したものを思い出したことから伝える ・対象物を細部まで表現していく（例：うさぎがいるよ→目が青くて耳が垂れているうさぎがいるよ） ・疑問に思ったことは繰り返し聞く ・ことばがけによって、早い遅いが調整できる
識字力	意志疎通
・クラスや他児、自分の興味のあることの印、柄などを認識するようになる ・覚えていた単語を見てその内の数個は判別できる ・自分の名前や文字を覚え始め、お友達の名前やs黄なものなど身近な名前（固有名詞）に親しみを持ち始める ・文字の形を視覚的にとらえ、覚えたものと似た形を目に留めるようになる	（質問） ・「なんで？」「何が？」「どこで？」の質問をする （答え） ・「どうして？」「どうやって？」の質問に答えられる （全般） ・簡単な会話ができる ・友達との会話が活発になる ・疑問に思ったことは繰り返し聞く
	識字力
	自分の名前をサインで表現する
引用文献	
・鶴川幼稚園年齢別学年目標・方針・ねらい（平成26年度） ・鶴川幼稚園（学年別：目標、方針、ねらい 又は実際の保育内容から） ・【年齢別保育講座】3・4・5歳児の保育 大阪保育研究 年齢別保育研究委員会 ・福井市結婚・子育てサイト（2012年6月20日） ・平成12年度施行版 保育所保育指針（3歳、4歳、5歳～内容より） ・平成28年度教育課程部会 幼児教育とりまとめ（たたき台）－幼児期の終わりまでに育ってほしい姿言葉による伝えあい（以下引用参照）	

図2 日本語のマイルストーン（抜粋）

3) 外部コンサルタントの活用

イマージョン・クラスの開設にあたり、都内にインターナショナルスクールを持ち、新設するインターナショナルスクールや、英語イマージョン教育の立ち上げサポートを手がける機関によるコンサルタントに依頼した。イマージョン・クラス担当教諭（日英バイリンガル教諭）が、実際のクラス運営の1年前より準備期間としてコンサルタントとのミーティングを定期的に重ね、40年の歴史を持つ現在の園の保育を実際に体感しながら、同じ園内に新設する英語イマージョン・クラスの在り方や保育について検討した。コンサルタントは玩具や絵本等の教材購入や保護者サポートの方法、またはそれらを学ぶ手段として、イマージョン教育を既に実施している教育機関やインターナショナルスクール等への見学・対談の斡旋をした。また、言語発達の目安として、対象幼稚園独自のマイルストーン（英語・日本語）の作成指導、外国人スタッフを雇用する際に必要な準備の助言などに関わってもらった。

4) 広報活動—英語であそぼう—

外部に向けての活動として、3年前より「英語であそぼう」という企画を実施。イマージョン・クラスに興味のある保護者に実際の様子を知ってもらう機会として月に1回程度開催した（写真1）。初年度は、外部コンサルタントが主となって企画・運営しており、保育者は毎回数名ずつ日本語クラス担当の教諭がアシスタントとして参加した。実施回数を重ねた後、イマージョン・クラスを担当する英国人教諭と日本人バイリンガル教諭による運営に移行した。初回は人数・年齢制限を設けず、たくさんの親子が参加した。2回目以降は入園を現実的に考えている家庭に対する、より実際の模擬保育の場として人数・年齢を制限し、入園をサポートする機会とした。



写真1 「英語であそぼう」の一幕

4. 考察

以上、主に英語イマージョン・クラス設立過程について見てきた。これにより明らかになった事実と共に、それが今後の幼稚園体制のあり方にどのような示唆を与えるかについて考えていきたい。

（1）外国人（異文化）保育者との関係づくり

1) 個人差を意識した体制の確立

英語イマージョン・クラスの開設にあたり、本幼稚園で初めて外国人保育者を採用した。歴史ある学校法人の幼稚園としては画期的な試みであり、様々な課題をもたらした。例えば、幼児教育に対する考え方の差異についてである。子どもの間で争い事が起こった際の対応について、文化によって介入の違いが有り得る

が、目の前にいる子どもにとって最善の手立てとは何かについて、お互いの違いを受け入れながら、一緒に考えることが望まれる。保育所保育指針でも、保育者間の連携の大切さについて言及していることから、外国人教師と日本人教師という二者構造にとどまらず、個々人の違いを受け入れ、認め合うことが大切だと考える。そのためには、積極的にコミュニケーションをとったり、話し合ったりする必要がある。保育者同士が話し合い、互いに理解し合う事で、子どもにとってより良い保育環境を整える事ができると考える。しかし、幼児の個人差についての研究は数多くあるが（谷田貝, 成田&林, 2001; 森野, 2005; Ryan & Grolnick, 1986）、保育者の個人差や外国人保育者との協働についての研究はほとんどない。日本人保育者同士の協働関係が保育者の力量形成にいかに関与するのかを調査した研究によれば、保育者が自らの保育を否定されることなく、安心して職務に取り組むことができることが安心感の醸成に寄与していた（田中ら, 2013）。より良い保育・教育を目指す上で、教員同士の協働は不可欠であり、このような研究が蓄積されることが望まれる。その際に文化の違いや個人差について考慮することも必要であろう。

2) 日本の幼稚園文化の共有、ルールの明文化

本幼稚園では、英語イマージョン・クラスの設立により、異文化の外国人保育者が幼稚園に在籍したことを契機に、園内のルール（いわゆる「暗黙の了解」として園で守られているもの）を明文化したハンドブックが作成された。このように幼稚園のルールを明文化することは、外国人教師の存在の有無にかかわらず行うのが良いと考える。それは、園でのルールの共通理解を促す働きがあるだけでなく、現状の規則を見直すきっかけにもなるからである。本研究で調査した園のように歴史があるところは、変化が激しい世の中においてルールが時代に合っていない可能性もある。現在、「暗黙の了解」とされているルールを明文化することで、課題や問題点が浮き彫りになり、ルールが精緻化されると思われる。

(2) 保護者との関係づくり

1) 保護者への説明責任を意識した英語教育

幼稚園教育要領も保育所保育指針も、保育者と保護者との連携の重要性について述べている。これは、幼児期においては、特に保護者が子どもに与える影響の大きさを理解しての事だろう。これを受けて、各園では園だより等の配布物、園内掲示、保護者会など、情報発信を積極的に行っている。

しかし、英語教育活動の情報発信についてはあまり行っていない園が多いのではないだろうか。実際、橋元ら（2018）が幼稚園での英語活動について実施した調査によると、約8割の保護者が、子どもが受けている英語教育活動についてその内容を知らなかった。そして英語活動の参観を希望する意見や、内容をもっと把握したいという要望を持っていることが明らかになった。英語活動は外部に委託する園も多く、英語に堪能な保育者も少ない現状が、このような結果を生むのかもしれない。しかし、保護者と保育者との連携を重視し、共に子どもの成長を支えるならば、幼稚園は英語活動を含めた情報提供を積極的に行う必要があると考える。

2) 発達指標としてのマイルストーン

日本語と英語の両方の言語発達について目安（マイルストーン）を作成した。発達には個人差があるため、あくまでも目安であり子どもの発達度合いをテストする目的ではなく、保育者が子どもの発達段階を見極め、発達をサポートしたり、保護者と一緒に子どもの言語発達をサポートしたりするための道具であった。マイルストーンを道しるべとして、保護者と共に子どもの発達を見守ることができるのは有用であると考えられる。

(3) 外部専門家の有効活用

本幼稚園は英語イマージョン・クラスを設置する際、外部コンサルタントを活用した。幼稚園で経営に関

する事項について、外部専門家を導入している幼稚園はまだ少数ではないだろうか。導入していたとしても、教室のデザインや園庭整備など周辺環境についてであり、教育の根幹に関わる部分ではないと思われる。しかし、幼稚園業界から一歩出て社会全体を見てみると、このような専門家の活用は新しい事ではない。例えば、産業界において経営コンサルタントの活用は飛躍的に伸びている。北村（2014）の調査によれば、外部の経営コンサルタントを利用する企業数は、2008年～2012年の5年間で約3.7倍増加している。

本幼稚園では、外部コンサルタントを活用し、イマージョン・クラス開設に先駆けて、保護者と幼児を対象にしたイベントを企画したり、運営のノウハウを教わったりしたことで、イマージョン・クラスの開設がスムーズに行えた。

今後、イマージョン教育など新しい教育を導入する園が増えていくことが予想される中、幼稚園においても経営の助言を外部専門家に託すという選択肢は増えるのではないだろうか。英語イマージョン・クラスの設立によって、このような可能性を意識する機会を得た。

5. おわりに

日本において、イマージョン教育はまだ一般的ではなく、一条校におけるイマージョン教育導入事例はさらに少ない。そのような状況で、対象幼稚園はこの分野の先駆者として様々な試みを実施した。本研究では設立までの過程を追ひ、どのような課題があり、それに対してどのような解決を試みたのかについて調査した。また、それが幼稚園全体の体制に示唆することについても考察した。

対象幼稚園におけるイマージョン教育はまだ始まったばかりである。実際に運営していく中で学んでいることも多くあり、それを基に現在様々な改良がなされている。したがって、引き続き、取り組みの効果を様々な角度から検証し、日本における英語イマージョン・クラスの可能性を追究していきたい。

参考・引用文献

- ベネッセ教育総合研究所(2012)第2回幼児教育・保育についての基本調査報告書 [2012年]. Retrieved from <https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4053>
- Brondum, J & Stenson, N. (1998) Types of Immersion Education: An introduction. ACIE Newsletter, 1(2). Retrieved from http://carla.umn.edu/immersion/acie/vol1/Feb1998_ImmersionTypes.html
- Curtain, H. A. & Pesola, C. A. (1988) *Languages and children--Making the match*. Reading, MA: Addison-Wesley Publishing Company.
- Genesee, F. (1987) *Learning through two languages: Studies of Immersion and bilingual education*. Cambridge, MA: Newbury House.
- 橋元知子、中村麻衣子（2018）「保護者の意識が早期英語教育に及ぼす影響」『日本保育学会 第71回大会発表要旨集』, 402.
- Johnson, R. K. & Swain, M. (1997) *Immersion Education: International Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 北村慎也（2014）「急成長する経営コンサルタント業～5年間で経営コンサルタントを営む企業数は約1.9倍、経営コンサルタント利用者数は約3.7倍に増加～」『TDB Report』帝国データバンク. Retrieved from <https://www.tdb.co.jp/report/specia/pdf/140101.pdf>
- 森野美央（2005）「幼児期における心の理論発達の個人差、及び仲間との相互作用の関連感情理解発達の個人差」『発達心理学研究』第16巻、第1号、36-45.
- Retrieved from: https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjdp/16/1/16_KJ00003367811/_pdf
- 中島和子（1998）『バイリンガル教育の方法増補版 12歳までに親と教師ができること』アルク
- Richard M. Ryan, R. M. & Grolnick, W. S. (1986). *Origins and Pawns in the Classroom: Self-Report and*

Projective Assessments of Individual Differences in Children's Perceptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50(3), 550-558. Retrieved from : https://selfdeterminationtheory.org/SDT/documents/1986_RyanGrolnick_JPSP.pdf

田中浩司、吉長真子、小野方資、高澤健司（2013）「同僚性に基づく保育士の力量形成に関する質的研究」
『福山市立大学 教育学部研究紀要』第1号, 49-54.

谷田貝公昭・成田国英・林 邦雄（編）（2001）『幼児・児童心理学（教職課程シリーズ・3）』一藝社

保育者養成短期大学卒業生の学習成果の分析

～平成26年度生のフォローアップアンケートと在学生へのフィードバックから～

Analysis on the Learnings of Students who majored in Early Childhood Education and Care :
Based on the Feedbacks from the Students, Class of 2016, and the Senior Students in 2019

入江 和夫^{1,2} 相澤 京子² 大見 由香² 中村麻衣子¹ 福地 昭輝¹ 小林真由美¹ 田中由起子²

1. はじめに

幼稚園教諭二種免許と保育士資格が2年間で取得できる本学は、一般財団法人短期大学基準協会による平成28年度第三者評価の結果、適格と認定されている。同協会は平成30年度から第3評価期間に向けた短期大学評価規準を改訂¹⁾し、その重点化の一つとして内部質保証を取り上げている。具体的には審査を受ける短大は提出する自己点検・評価報告書を基に4項目から構成される「内部質保証ルーブリック」を用いて自己判定を行うことになっている。その項目の1つ、学習成果 (Student Learning Outcomes)²⁾³⁾とは短期大学で何を学んで、何を身につけて、何ができるようになるかであり、進学者が短期大学の教育課程を修了した時に獲得するものである。また「質保証」とは学習成果を定量的及び定性的に査定 (アセスメント) し、見つけた課題を改善する仕組みを実行していくことである。

本稿では学生支援委員会が本学卒業後約1年を経過した卒業生を対象に実施した卒業後フォローアップアンケート (以下、フォローアップアンケート) や在学生へのフィードバックについて学生支援委員会及びIR委員会が協力して分析した結果を述べていく。具体的には「就職先の満足度」、「学生生活の有意義さ」「在学生へのアドバイス」については集計した結果を説明する。また本学の教育活動で「学んでよかったことや、社会に出て役立ったといえるもの」についてはどのような力が養われたのか、「社会に出て、短大でもっと学んでおけばよかったと感じたもの」については、どのような力が社会に出て不足していると感じたのかを学習成果の観点から述べていく。

2. 方法

(1) フォローアップアンケート

- 1) 調査対象者 平成26年度生 (平成28年3月卒業) 131名
回答のあった31名のうち、無職及び未記入者を除いた29名を分析対象とした。
- 2) 調査日 平成29年2月1日～15日
- 3) 統計解析 SPSS Ver.23

(2) (1) の結果を在学生 (2年生) に配布、説明後、感想を回収し (平成30年6月実施)、どのようなフィードバック効果があるかを分析した。

3. 結果と考察

1 フォローアップアンケートの分析結果

(1) 分析対象者の属性

表1から、在職者は30名、無職は1名であったが、在職者のうち記述内容が不明の1名を除いた29名を調査対象者とした。表2から職種は大分類を用いた。就職先の人数は保育所保育士45% (13名)、幼稚園教諭

¹ IR委員会

² 学生支援委員会

28%（8名）、施設保育士10%（3名）、企業17%（5名）であった。表3から転職経験者は10%（3名）であった。

表1 「Q1-A 現在、在職していますか」

	している(人)	していない(人)
在職	30	1

表2 「Q1-B 職種は何ですか」

職種	小分類(人)	職種	大分類(人)
幼稚園教諭(常勤)	6	幼稚園教諭	8
幼稚園教諭(非常勤)	2		
保育所保育士(常勤)	12	保育所保育士	13
保育所保育士(非常勤)	1		
施設(常勤)	2	施設保育士	3
施設(非常勤)	1		
一般企業	5	企業	5

表3 「Q1-C 卒業後に転職しましたか」

	している(人)	していない(人)
卒業後の転職	3	26

（2）就職先の満足度

2-1）全卒業生

「今の就職先に満足していますか」に対する回答の内訳を表4に示した。

表4 「Q1-D 今の就職先に満足していますか」

	人数
満足	9
まあまあ満足	13
あまり満足していない	6
全く満足していない	1

全卒業生のうち、「満足」＋「まあまあ満足」の「満足感」は76%（22名）、「あまり満足していない」＋「全く満足していない」の「不満足感」は24%（7名）であった。カイ二乗検定をおこなったところ、人数比は「満足感」の方が多かった（ $\chi^2=7.76$, $df=1$, $p<.01$ ）。

2-2）就職先別

就職先別にみると、教育・保育系（＝幼・保・施）の「満足感」は62%（18名）、「不満足感」は21%（6名）であり、企業系の「満足感」は14%（4名）、「不満足感」は3%（1名）であり、就職先別による違いはなかった（Fisherの直接確率法）。

2-3）満足感・不満足感の理由

満足感・不満足感の理由（自由記述）を表5に示した。

表5 Q1-D 就職先別の満足・不満足の原因

満足	幼4名	a 先生たちが優しくアットホームな感じだから
		b 職員の対応
		c 勤務時間が長い
		d 記載なし
	保11名	e 人間関係
		f 職場環境もよく働いていてやりがいがある！
		g 有給が好きなとき取れないがそれ以外は人間関係、金銭面等まあまあ満足している
		h 人間関係は素敵だが、認可外なので経歴にならない事が少々不満。
		i 園全体の雰囲気もよく、職員同士の仲がいい。保護者も穏やかな方が多い。
		j 行事の担当の時保育士の先輩達が優しく教えてくれたり、同期の保育士と相談し合うことなど大変なこともあります、保育士同士の人間関係含めてこの環境がとても良いです。
		k スタッフ関係がいいから
		l 保育の質が高い。人間関係が良い。
		m 自分のペースで仕事ができる。また保育分野の中でも、更に子どもの生活に踏み込んで保育出来る環境に身を置いている事にやりがいを感じている。
		n,o 記載なし
	施設3名	p,q,r 記載なし
	企業4名	s 職場がよいとこなので
		t,u,v 記載なし
不満足	幼4名	w 多忙・同僚との人間関係 … 新人が酷使される
		x,y,z 記載なし
	保2名	aa 始めの給料の契約との違い。大規模人数に対しての職員の数。感染症や大きな病気をした際の職場の対応について。
		ab 記載なし
	企業1名	ac 手が荒れるし他の企業より労働時間長いから。

「満足感」の理由としては a「アットホームな感じ」、b「職員の対応」、e「人間関係」、f「職場環境もよく」、g「人間関係」、h「人間関係は素敵」、i「園全体の雰囲気もよく、職員同士の仲がいい」、j「職員同士の人間関係」、k「スタッフ関係がいい」、l「人間関係が良い」があり⁴⁾、「不満足」の理由として w「同僚との人間関係」があった。このように、「人間関係」についてあげているのは教育・保育系に就職した者であり、全体（n=25）の約4割を占めた。特に「人間関係の良さ」を就職先の「満足感」の理由としてあげている卒業生が多いことから、教育・保育系の仕事はチーム力が求められていることがうかがえる。

（3）本学で学んでよかったことや、社会に出て役立ったといえるもの

この質問項目は本学の教育活動に関する内容である。選択肢（＝1.授業 2.実習 3.先生方からの指導・助言 4.学校行事（文化祭など）5.その他）は複数回答可であったが、すべて単一回答となっていた。その選択率と「具体的にどんなところが役立ったか」の内容を就職先別に表6に示した。

表6 Q2「本学で学んでよかったことや、社会に出て役立ったといえるもの」の「具体的にどんなところが役立ったか」

実習	幼4名	a どれかと言えば実習だと思った。なぜなら実際にクラスを持ち現場に出てみないとわからないことだらけだったから。
		b いろいろな園のやり方を見ることが出来役に立ちました
		c 実際の子どもの様子を見ること。たったの二年で子どもの命を預かる責任職になるため、最低限の現場での知識や様子を見てから職に就くべき。
		d 記載なし
	保5名	e 実習に行ってみて今の仕事でも同じような出来事があるから！ちゃんと実習に行かなきゃ分からないこともあるから！
		f 実習をすることで子ども達の様子や保育士がどのような仕事をしているのか、子どもへの接し方など実習を通して授業では習わない実践的なことを知ることができました。
		g 書類等の書き方や制作時の子どもへの指導方法
		h 現場の様子を直接見て感じる事が出来る事。
		i 記載なし
授業	施設2名	j,k 記載なし
	企業1名	l 記載なし
	幼1名	m 記載なし
	保3名	n 普段の保育、子どもへの怪我などの対応
		o ピアノの個人レッスンと製作活動、コミュニケーションがとれるグループワークなど
		p 記載なし
	施設1名	q 授業・実習
先生方からの指導・助言	幼2名	r 提出物
		s 記載なし
	保4名	t 手遊び
		u,v,w 記載なし
学校行事(文化祭など)	企業2名	x,y 記載なし
	保1名	z リーダーシップがとれた
		aa 役立ってるのか役立ってないのかよく分からない。
	企業2名	ab 記載なし
その他	幼1名	ac 授業・実習

社会に出て役立ったといえるものとして「実習」は41%（12名）、「授業」は17%（5名）、「先生方からの指導・助言」は28%（8名）、「学校行事（文化祭など）」は10%（3名）、「その他」は3%（1名）であり、これらの人数比に違いがあった（ $\chi^2=12.90$, $df=4$, $p<.05$ ）。正課教育の「実習」「授業」「先生方からの指導・助言」「その他」の合計27名に対して「学校行事」は3名であり、前者の方が明らかに多かった（ $\chi^2=18.24$, $df=1$, $p<.0001$ ）。

「実習」に関する具体的な内容を見ると、aは「現場に出てみないとわからないことだらけだったから」、bは「いろいろな園のやり方を見ることが出来役に立ちました」、cは「実際の子どもの様子を見ること」をあげていた。eは「実習に行かなきゃ分からないこともある」、fは「子どもへの接し方など実習を通して授業では習わない実践的なことを知ることができました」、gは「書類等の書き方や制作時の子どもへの指導方法」、hは「現場の様子を直接見て感じる事が出来る事」と述べていることから、「実習」では「実践的保育力」が養われると考えていることがうかがえる。「授業」及び「先生方からの指導・助言」では、nが「子どもへの怪我などの対応」、oが「ピアノの個人レッスンと製作活動、コミュニケーションがとれるグループワークなど」、「先生方からの指導・助言」ではrが「提出物」、tが「手遊び」と述べていることから、ここでは「専門知識・技能」が養われると考えていることがうかがえる。

「学校行事（文化祭など）」ではzが「リーダーシップがとれた」と述べていることから、ここでは「統率力」が養われると考えていることがうかがえる。

以上のことから、就職1年目の学生が「社会に出て役立ったといえるもの」として最も多かったのは「実習」であることが明らかになった。その理由は、「実習」では保育の現実的、実践的な内容が示されていることから、学生にとって印象に大きく残ったのではないかと考えられる。

（4）社会に出て、短大でもっと学んでおけばよかったと感じたもの

4-1）内訳

この質問項目は、短大在学中に身につけるべき力が足りなかったものと解釈できる。選択肢は「1. コミュニケーション能力 2. マナー 3. 文章力 4. ピアノ 5. 計画性 6. 保育の専門技術（＝専門性） 7.

その他」であり、複数回答の結果を表7に示した。

表7 「Q3 社会に出て、本学でもっと学んでおけばよかったと感じたものは何ですか」(複数回答)

コミュニケーション能力	16名(55%)
文章力	14名(48%)
ピアノ	11名(38%)
保育の専門技術	11名(38%)
計画性	6名(21%)
マナー	4名(14%)
その他	1名(3%)

表7から「コミュニケーション能力」55% (16名)、「文章力」48% (14名)、「ピアノ」38% (11名)、「保育の専門技術」38% (11名)、「計画性」21% (6名)、「マナー」14% (4名)、「その他」3% (1名)が、社会に出てから、その必要性に気づくとともに、自分の能力不足を感じている項目である。特に、「コミュニケーション能力」「文章力」は約半分の学生が選択しており、教育・保育系の仕事では必要な能力であるものの、能力が不足していることを自覚していることが分かる。

4-2) 具体的内容

「社会に出て、短大でもっと学んでおけばよかったと感じたもの」の「具体的にどんな内容を学んでおけばよかったか。」についての結果を表8に示した。

表8 Q3「社会に出て、短大でもっと学んでおけばよかったと感じたもの」の「具体的にどんな内容を学んでおけばよかったか。」

幼8名	a 童謡のレパートリーを増やしておけばよかった。
	b すべて
	c 予め弾ける曲をもう少し増やしておきたかった
	d 同僚・保護者とのコミュニケーションの方法
	e,f,g,h 記載なし
保13名	i 子どもが日常的になりやすい病気や連絡帳への親へのコメントの例や対応をもっとして欲しかった。
	j ピアノはできるだけたくさんの曲を簡単な伴奏でいいから覚えてほしい。 コミュニケーションは保護者対応だけでなく職員同士の関わりでも大切になってくる。
	k 保護者と接することの多い職業なので、相談援助などの授業をしっかりと学んでおきたかった。保護者とのコミュニケーションのとり方やマナーなど難しい場面が多々あるので「あの時もっと勉強してたらな」と思い返しています。
	l 最近の曲を弾けるようにしたほうが良かった
	m,n,o,p,q,r,s,t,u 記載なし
施設3名	v,w,x 記載なし
企業5名	y 人に伝えたり自分から話すのが苦手だから学んでおけば良かったと思う。
	z,aa,ab,ac 記載なし

最も多かったのは「記載なし」で約7割を占めた。

「ピアノ」に関する内容は a, c, j, l の4名(14%)であった。aは「童謡のレパートリーを増やす」こと、cは「予め弾ける曲をもう少し増やすこと」、jは「できるだけたくさんの曲を簡単な伴奏でいいから覚えること」、lは「最近の曲を弾けるようにしたほうがよいこと」のように、弾くことのできる曲目数を増や

すことが必要だったと述べていた。「コミュニケーション能力」に関する内容はd, j, k, yの4名（14％）であった。dは「同僚・保護者とのコミュニケーション方法」、jは「コミュニケーションは保護者対応だけでなく職員同士の関わりでも大切になってくる」、kは「保護者とのコミュニケーションのとり方…もっと勉強してたら」、yは「人に伝えたり自分から話すのが苦手だから学んでおけば良かった」のように、コミュニケーション能力は保護者や職員との関係づくりに必要であると述べていた。「文章力」に関してiは「連絡帳への親へのコメント例や対応をもっとして欲しかった」などを述べていた。

以上のように、本学卒業生の学習成果（Student Learning Outcomes）の獲得として不十分な項目として、「コミュニケーション能力」「文章力」「ピアノ」「保育の専門技術」の4点が示された。今後、上述の能力を学生が獲得できるように短大は具体的な改善を行い、教育の質保証をすることが求められる。

（5）学生生活の有意義さ

学生生活の有意義さの程度に関する結果を表9に示した。

表9 「Q4 学生生活は有意義でしたか」

	人数
とても有意義だった	11
まあまあ有意義だった	17
あまり有意義でなかった	1
全く有意義でなかった	0

学生生活については、「とても有意義」38％（11名）、「まあまあ有意義」59％（17名）、「あまり有意義でなかった」3％（1名）であった。「とても有意義」と「まあまあ有意義」を「有意義」としたところ、97％（28名）となり、「あまり有意義でなかった」（1名）＝「無意義」と比較して「有意義」と感じている者の方が明らかに多かった（ $\chi^2=25.14$, $df=1$, $p<.001$ ）。このように、卒業生のほぼ全員が学生生活を「有意義」と述べていた。今後、学生生活で得たものなど、なぜ有意義と感じたのか、具体的な要因を明らかにしていく必要がある。

（6）在学生に対するアドバイス

この項目は卒業生が社会に出て、重要なこと、必要であると感じたことであり、その結果を表10に示した。

表 10 就職先別「Q6 在学生に対するアドバイス」

幼8名	a ほんとにピアノ(童謡)を弾けるようにしておいたほうがいいと思う。
	b 授業で学んだ知識やピアノなどの技術の一つずつ自分のものにしてください
	c 就職先は必ずしっかりと選んでほしい。 とりあえず、は絶対に後悔することになる。成長したい気持ちがあっても就職先によっては成長したい芽も潰されるし伸びない。二年で保育士になるのは短い気もするが、実際は現場経験で伸びていく。なので職場環境は最重要！職員関係が悪ければ子どもたちへの保育の質も低いはず。人の気持ちを考えるのが大切なこの仕事で何も考えず行動、発言をする大人がいる社会...現実はその甘くないですね。でも子どもたちの笑顔は本当に生きがいになります。子どもたちの初めての先生になる嬉しさや責任感、次の学年へ送り出す時の達成感、...先生になりたいという気持ちで先生になってこれを味わうと保育って本当に楽しいなと思いますよ。頑張れ！
	d 実習頑張ってください！
	e 学生のうちに遊ぶ。学生を楽しんだ方がいい。実習では積極的に。出来なくても、やるぞ！っていう意識が大切。園選びはとても大切。園見学では雰囲気だけでなく先生同士の仲も重要。勤務体制等、入ってから分かることが多かったので、事前で分かる限りのことは把握出来ると思う。
	f,g,h 記載なし
	i 勉強も大事だが働いてからののが勉強である
	j 頑張ってね(≧▽≦)
保13名	k ペープサートなど日々の保育をする中で、活動の合間合間にできる五分をどう繋ぐかを考えて欲しい。そのため今から手遊びなど真剣に覚えた方がいい。壁面は大中小と作ってもいい。
	l 保育の中の専門的な技術は実習など現場の中でしか学べません。専門的な知識をよく学んで土台を作った上で、自分の目で見て思ったこと、感じたことを素直に受け止め、自分のしたい保育のイメージをしていけると仕事が楽しく感じられるのかなと思います。誰しも得意、不得意があるので気にせず出来ないから諦めるのではなく、あなたにしかない感性や特技で子どもたちの夢を広げてあげてください。応援しています。
	m 学校生活の中で「面倒くさい」って思うことがたくさんあると思いますが授業も聞き流すだけではなくてきちんと受け、実習も「行きたくない」って思うと思います。私もすぐ行くのが嫌でした。でも、実習も通して授業で習わない実践的なことを保育士の方から知ることできるしすぐ学ぶことが多いので、現場で役に立つこともあります。私が保育士1日目の時すごく気持ちが落ち込んで先生や友達、学校生活が終わって寂しかったですが、友達と相談し合ったり周りの人が支えてくれたおかげで今も保育士として続けられています。子ども達も可愛いしとても楽しいです。日誌も大変だし、面倒くさいって思うかもしれませんが今後にすごく役に立つので体調を崩さず頑張ってください。
	n 実習に行けなくても、無資格でも、保育園働けるからあきらめないで。
	o 書類の練習を沢山やること。特に月案や指導案は書けることで、子どもの対応だけでなく、保護者の急な相談などにも対応することが出来ます。
	p どんな事でもいいので、少しでも興味を持ったらやってみて下さい。
	q,r,s,t,u 記載なし
	v 理想と現実が就職してみると違って、子どもが好きだけでは仕事は務まらず、常に向上心を持って保育の質を上げて自分を磨きスキルアップしていくようにする。普段使っている何気ない言葉も保護者にとってはキツイ言い方になってしまったりするので、言葉も気をつけ一度心の中で確認してから発言するようにしてほしい。
施設3名	w,x 記載なし
企業5名	y 実習で挫折しても卒業だけは
	z,aa,ab,ac 記載なし

自由記述の回答を分類すると、「専門知識・技能」に関しては、a, b, k の3名(10%)が述べ、aは「童謡が弾けるように」、bは「ピアノの技術向上」、k「ペープサート…手遊びなど…壁面は大中小と作ってもいい。」とあった。「保育者の姿勢」に関しては、c, i, l, o, v の5名(17%)が述べ、c「人の気持ちを考えるのが大切なこの仕事…子どもたちの笑顔は本当に生きがい…子どもたちの初めての先生になる嬉しさと責任感、次の学年へ送り出す時の達成感、…先生になりたいという気持ちで先生になってこれを味わうと保育って本当に楽しい」、i「勉強も大事だが働いてからののが勉強である」、l「専門的な知識をよく学んで土台を作った上で、自分の目で見て思ったこと、感じたことを素直に受け止め、自分のしたい保育のイメージをしていけると仕事が楽しく感じられる」、o「書類の練習を沢山やること。特に月案や指導案は書けることで、子どもの対応だけでなく、保護者の急な相談などにも対応することができます。」、v「子どもが好きだけでは仕事は務まらず、常に向上心を持って保育の質を上げて自分を磨きスキルアップしていくようにする。普段使っている何気ない言葉も保護者にとってはキツイ言い方になってしまったりするので、言葉も気をつけ一度心の中で確認してから発言するように」とあった。

「励まし」に関しては、c, d, j, m, n, p, y の7名(24%)が述べ、c「頑張れ!」、d「実習頑張ってください!」、j「頑張ってね」、m「日誌も大変だし、面倒くさいって思うかもしれませんが今後にすごく役に立つので体調を崩さず頑張ってください。」、n「実習に行けなくても…保育園働けるからあきらめないで。」、p「どんな事でもいいので、少しでも興味を持ったらやってみて下さい。」、y「実習で挫折しても卒業だけは」とあった。

「記載なし」は14名(48%)であった。

以上のことから、卒業生は就職先での学びを背景にしながら、在学生にアドバイスをしていたことが分か

る。特に「保育者の姿勢」の記述は具体的で、在学生にとって説得力がある内容であり、社会人としての成長を感じさせるものであった。

2 フォローアップアンケート結果のフィードバック

フォローアップアンケートの結果を在学生（2年生）にフィードバックした際の感想を表11に示した。

自由記述の回答を分類すると、「就職先の選び方」について述べているのは全体の約3割であり、aは「しっかりと園研究をして自分に合った就職先を見つけることが重要だと思った。」、bは「私も就職した園に満足していると回答できるように、たくさん見学や説明会に参加し、ちゃんと選んで決めようと改めて思いました。」、cは「それぞれの施設によっていい面、悪い面が見えたし自分が就職先を選ぶ際になにに注意すべきなのかもわかりました。」、dは「まだ幼稚園にするか保育園にするか決めることが出来ていないので、決めるための参考になりました。」、eは「先輩方の実情から就職先はしっかりと調べ、自分に合った園に就職できるよう考えていこうと思いました。」と慎重に就職先選びをしようとする心構えが生まれていた。

「就職先の選び方」と「自己啓発」の両方に言及しているのは全体の約4割であり、fは「就職する上でどこに注目して就職先を選ぶべきかなど…今後の学生生活で参考になると思いました。」及び「今現在、学生のうちにどのようなことを努力するべきか」、gは「職場で充実感を得ている人たちは人間関係が円滑にしているということが分かったのできちんと行きたい園は見学をして雰囲気も見てから決めようと思いました。」及び「ピアノを…自分の弾きたい曲ばかり弾いていてもいけないと考え直すきっかけになりました。文章を書くということに……書くという経験の積み重ねだと思うので先輩のアドバイスを聞き頑張ろうと思いました。」、hは「自分は人間関係が上手いきそうな職場がいいと思いました。」及び「特に自分はピアノが苦手だから学生のうちに1曲でも引ける曲を増やしておきたいと思いました。」、iは「給与が良いということより、人間関係が良い職場は長く続けられる条件のトップにあげられると思う。なるべくいろいろな園をよく見てみたい。」及び「ピアノや日々の授業など、一つ一つのことを大切に積み重ねていきたいと思った。」、jは「やはり、就職するにあたって、人間関係が重要であることを改めて知り、就職先選びの際、参考にしようと思いました。」及び「私も学校生活が有意義であったと思えるように在校生へのアドバイスも参考にしつつ、残りの学生生活を送ろうと思いました。」、kは「在校生へのアドバイスでもたくさんのアドバイスがあったので良い就職先、良い仕事を行えるようにも自分の引き出しを増やしたいと思いました。」と述べており、就職先選びの視点として「人間関係」に重きを置く記述が複数見られた。

「自己啓発」について述べているのは全体の約3割であり、lは「「ピアノを学生のうちに弾いておいた方がいいよ」という言葉を私は実習先の先生方や先輩から聞いていて「働くとやる事も沢山あるし時間もないから今のうちにね」というアドバイスを貰っていました。…やっぱりそうなんだと確信しました。」、mは「分析見て55%というもっとも高いコミュニケーション能力ですが、確かに私もコミュニケーション能力を高めて行きたいと思いました。」、nは「学生のうちにたくさんの方と関わり、少しでもコミュニケーション能力を高めておく必要があるのだと思いました。また、文章力はレポートなどを書く時にしっかりこの文章がしっかり成り立っているのかなどすることを考えながら書いていくことが大切なのだと思いました。」、oは先輩たちの意見をきいてみて、自分頑張らなきゃと思いました。…先輩の意見を聞いたりしながら、乗り越えて子供たちにも憧れる楽しい先生になりたいと思いました。」、pは「自己啓発」だけでなく自己研鑽も含まれた内容であり、「卒業アンケートを読んで事前準備をして就職で困らないようにするべきだと思った。ピアノはできるので、それ以外のところを勉強して補えるよう頑張ります。」と述べられていた。このように、「コミュニケーション能力」を自己啓発のポイントとした記述が複数あった。

表11 フォローアップアンケート結果に関する在学生(2年生)の感想(抜粋)

在学生	卒業生アンケートを読んだ感想
a	就職先の人間関係は外からは見えにくいですが、働く上で多くの人が重要視するということがわかった。勤務時間や仕事内容など、就職してから困らないよう就職先を探す時に、しっかりと園研究をして自分に合った就職先を見つけることが重要だと思った。一方で、同じ職場でも人それぞれ感じ方は異なるため、人の意見も参考にしながらも自分でよく考え何が自分のために良いか判断出来る力を持つ必要があると考えた。総合的にはほとんどの人が仕事に満足しているという結果を見ると、保育の仕事をしたいと思って資格を取り就職していることも含め、志を持って自分のやりたい仕事に就ける人が短大には多いと思った。
b	卒業アンケートの先輩方の回答を見て、就職した園に満足しているという答えが多く、また就職先は見学などに行き、しっかりと選んで決めた方が良いというアドバイスもありました。私も就職した園に満足していると回答できるように、たくさん見学や説明会に参加し、ちゃんと選んで決めようと改めて思いました。幼稚園より保育園に就職した先輩が多いことも分かりました。しかし回答数が少ないため、本当の数は分かりませんが、先輩たちのために、私が卒業するときはアンケートに回答できたら良いと思います。
c	現場に出て働いている先輩方の生の声がきけてすごくなったと思います。それぞれの施設によっていい面、悪い面が見えたと自分が就職先を選ぶ際になにを注意すべきなのかもわかりました。自分の中では、人間関係を重視して選ぼうと思っていました。どんなにいい園でも職員間の仲が悪ければいい保育ができないと思うからです。先輩方も人とのつながりを大切にしていると思いました。
d	卒アンケートについて、先輩たちのアンケート結果を聞き、いいところも悪いところも分かりやりがいや心がけなど、保育者目線にならなくては分からないことなどが知ることが出来ました。わたしも、まだ幼稚園にするか保育園にするか決めることが出来ていないので、決めるための参考になりました。
e	少ない人数ではありましたが、先輩方の働いてからの実際の声を知ることができました。就職してからはいいことばかりではなく、大変なことや嫌なこともあるのだとわかりました。自分は幼稚園で働きたいと考えています。先輩方の実情から就職先はしっかりと調べ、自分に合った園に就職できるよう考えていこうと思いました。
f	今回、卒業生のアンケートを見て実際の保育に関わる方たちの素直な意見やアドバイスなどを知ることができました。今現在、学生のうちにどのようなことを努力すべきかだけでなく就職する上でどこに注目して就職先を選ぶべきかなど直接は聞けない事が書いてあり、今後の学生生活で参考になると思いました。
g	卒業されて働いている先輩方の意見は絶対だと思っているので参考にしたいと思いました。特に、アドバイスや在学中にやればよかったと思ったことではピアノや書くということがあげられていて、たしかにその通りだと思いました。今はピアノを好きなように楽しく弾いていて誤魔化しもきくしそれでいいという気持ちがありますが、実際に働くようになったらそうはいかないと思うし自分の弾きたい曲ばかり弾いていてもいけないと考え直すきっかけになりました。文章を書くということに関しては短大でたくさん練習していますが、上手くは書けないし時間もかかります。文章の構成が分かれば書く時間も減ります。結局、書くという経験の積み重ねだと思うので先輩のアドバイスを聞き頑張ろうと思いました。また、職場で充実感を得ている人たちは人間関係が円滑にしているということが分かったのでちゃんと行きたい園は見学をして雰囲気も見てから決めようと思いました。
h	卒業生からのアンケートの結果を見て、回答数はさておき就職先に対して満足している人が多いと思ったが、満足していない人もいて就職先はじっくり考えるべきだと思いました。とにかく、自分は人間関係が上手いきそうな職場がいいと思いました。本学で学んでおくべきことにコミュニケーション能力、文章力、ピアノが挙げられていて、特に自分はピアノが苦手だから学生のうちに1曲でも引ける曲を増やしておきたいと思いました。
i	就職した先輩方の生の声を聞くことができ、ありがたかった。実習就職先で必要なスキルがコミュニケーション力であることがわかった。鶴川女子短期大学では、勉強でグループワークを積極的に取り入れ行っているということをととても強みになるということを感じた。それ以外にも、ピアノや日々の授業など、一つ一つのことを大切に積み重ねていきたいと思った。就職後も人間関係が良い職場であるということ、長く仕事を続けていくための条件であるということも感じた。私は社会人を経験して入学したので、やはり、給与が良いということより、人間関係が良い職場は長く続けられる条件のトップにあげられると思う。なるべくいろいろな園をよく見てみたい。実習を終えて、私には保育者は向かないのではと、不安になっていたところで、卒業生アンケートを授業で取り上げていただき、また少し考え方が変わりました。ありがとうございました。
j	卒業生のアンケートを見ることができ、就職についてや、今何を頑張れば良いかなどを知ることができました。やはり、就職するにあたって、人間関係が重要であることを改めて知り、就職先選びの際、参考にしようと思いました。まだ就職先を保育園にするか、施設にするか、決めあぐねているため、卒業アンケートを参考にしつつ、夏休みの間に決めようと思いました。学校生活は有意義であったと答えている方が97パーセントもいたため、私も学校生活が有意義であったと思うように在校生へのアドバイスも参考にしつつ、残りの学生生活を送ろうと思いました。
k	卒業生アンケートを行っていることを初めて知りました。キャリアデザインなどの授業やこのような授業で実際に働いている人の声が聞けてこれから就職先を選択する私にとってたになることがたくさんありました。非常勤で働いてる人もいいることを知り、その理由が気になりました。満足不満足アンケートでは、人間関係と書いてあることが多かったです。答えてくれた人たちは満足のところに人間関係と書いてあったのでいい園もたくさんあると知ることができました。在校生へのアドバイスでもたくさんのアドバイスのあったので良い就職先、良い仕事を行えるようにも自分の引き出しを増やしたいと思いました。
l	卒業生アンケートで書いていた「ピアノを学生のうちに弾いておいた方がいいよ」という言葉を私は実習先の先生方や先輩から聞いていて「働くことやる事も沢山あるし時間もないから今のうちにね」というアドバイスを貰っていました。今回の授業でやっぱりそうなんだと確信しました。そして一年目は大変だという事もみんな同じように口を揃えて言っていたので 先輩や先生方のアドバイスはちゃんと聞いて実行する方が自分の為になるんだなあと思いました。
m	卒アンケート分析見て55%というもっとも高いコミュニケーション能力ですが、確かに私もコミュニケーション能力を高めて行きたいと思いました。なぜなら、保育の仕事に関わらず社会に出ると色々な人と関わる事が増えていきます。その中でも保育の仕事は保護者の方と子どもの連絡や毎日の挨拶、先生たちとの人間関係など様々ありますが、やはりどの仕事でもコミュニケーション能力は大切なのでこれからも意識して生活したいと思います。
n	学んでおくべきであった点は、コミュニケーション能力や文章力などが多いのだと分かりました。現場に出たら、保護者の方と会話したり、書類を書くことが多くあるのだと思います。その為、学生のうちにたくさんの方と関わり、少しでもコミュニケーション能力を高めておく必要があるのだと思いました。また、文章力はレポートなどを書く時にしっかりこの文章がしっかり成り立っているのかなどすることを考えながら書いていくことが大切なのだと思います。
o	先輩たちの意見をきいてみて、自分頑張らなきゃと思いました。実習と働くとはまた全然違うし大変なこともたくさんあると思います。でもそれも先輩の意見を聞いたりしながら、乗り越えて子供たちにも憧れる楽しい先生になりたいなと思いました。
p	卒業アンケートを読んで事前準備をして就職で困らないようにするべきだと思った。ピアノはできるので、それ以外のところを勉強して補えるよう頑張ります。

4. まとめ

本学卒業後約1年を経過した卒業生を対象に実施したフォローアップアンケート及び在学生に対するフィードバックの結果は以下のようにまとめられる。

- (1) 就職先（教育・保育系）の満足度は「満足感」が「不満足感」に比べ高く、その主な理由は「人間関係の良さ」であった。
- (2) 「本学で学んでよかったことや、社会に出て役立ったといえるもの」は「実習」であり、保育の現実的、実践的な内容が示されていることから、学生にとって印象に大きく残ったからではないかと考えられる。
- (3) 「社会に出て、短大でもっと学んでおけばよかったと感じたもの」は、コミュニケーション能力が約6割、文章力が約5割、ピアノや保育の専門技術が約4割であった。これらは短大で身につけるべき学習成果が十分ではなかった項目であり、「教育の質保証」の観点から、短大はこれらの能力を学生が学習成果として獲得できるように改善すべきであることがわかった。
- (4) 短大の学校生活は卒業生のほぼ全員が「有意義」と述べていた。
- (5) 「在学生に対するアドバイス」では「専門知識・技能」「保育者の姿勢」「励まし」があり、社会人としての成長を感じさせる内容であった。
- (6) フォローアップアンケートのフィードバックは在学生（2年生）に就職先選びが重要であることを認識させ、またどのような能力を高めたらいいかの「自己啓発」の意欲を喚起させる効果があった。

今後の卒業生に対するアンケート調査では、短大で何を学び、何を身につけ、何ができるようになって卒業したのかなど、具体的な学習成果の項目を設定し、その分析を通して「教育の質保証」を積極的に進めていきたい。

注

- 1) 財団法人短期大学基準協会. 短期大学評価基準について
<http://www.jaca.or.jp/service/evaluation/faq/hyoukakizyun.html>（最終アクセス2018. 8. 31）
文部科学省. 制度・教育改革ワーキンググループ（第2回）配付資料
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_4/043/siryu/1393770.htm
（最終アクセス2018. 8. 31）
- 2) 中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて（平成20年）において、「「学習成果」はプログラムやコースなど、一定の学習期間終了時に、学習者が知り、理解し、行い、実演できることを期待される内容を言明したもの。「学習成果」は、多くの場合、学習者が獲得すべき知識、スキル、態度などとして示される。またそれぞれの学習成果は、具体的で、一定の期間内で達成可能であり、学習者にとって意味のある内容で、測定や評価が可能なものでなければならない。」と説明されている。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_0/toushin/1217067.htm
（最終アクセス2018. 8. 31）
- 3) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会. 「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン（平成28年3月31日）において、「ディプロマ・ポリシー」は「各大学、学部・学科等の教育理念に基づき、どのような力を身に付けた者に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの。」とされている。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_4/houkoku/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf（最終アクセス2018. 8. 31）

- 4)「勤務時間が長い」を理由に挙げた卒業生(幼c)は、「今の就職先に満足していますか」に「まあまあ満足」を選んでおり、その理由を示したものと考えられる。

保育者養成短期大学卒業生に求められる学習成果の分析

～平成27年度生の就職先アンケートから～

Analysis on the Learnings of Students who majored in Early Childhood Education and Care :
Based on the Feedbacks from the Employers of the Students, Class of 2017

入江 和夫^{1,2} 相澤 京子² 大見 由香² 中村麻衣子¹ 福地 昭輝¹ 小林真由美¹ 田中由起子²

1. はじめに

平成31年度認証評価 ALO 対象説明会「学習成果を焦点にした教育の質保証」が開催された。学習成果とは「短期大学で何を学んで、何を身につけて、何ができるようになるか」であり、「教育の質保証」とは「学習成果を定量的及び定性的に査定（アセスメント）し、見付けた課題を改善する仕組みを実行していくこと」である¹⁾。

学習成果の評価を主体別に分けると、教員主体では客観テスト（期末試験）やパフォーマンス評価があり、これは「学修成果」の到達度を検証するものである。また学生主体では（期末）授業アンケート、学修成果アンケート（23能力獲得調査）²⁾があり、これは学生の成長度を検証するものである。さらに第三者主体として教員及び学生以外のステークホルダーからの評価、すなわち卒業生及び就職先アンケート調査等は、学習成果の社会的通用性を検証するものである。これらの検証結果を「学生の個別指導」「授業の改善」「カリキュラムの編成」などへフィードバックし、改善することによって、「教育の質の保証」は果たされていくことになる。すでに別稿での卒業生を対象にしたフォローアップアンケートの分析によると、社会に出てから短大でもっと学んでおけばよかったと感じていることは「コミュニケーション能力」「文章力」などであった。学生自身の認識ではこれらが学習成果の不十分な項目となっている³⁾。

本稿では学生支援委員会による平成27年度生の「就職先アンケート」の結果を同委員会と IR 委員会が共同して分析を行うことにした。具体的には調査項目である「採用の際の重視項目」「人物の重視項目」「保育者として必要な資質」については、その結果を説明する。また、「就職前に身につけてほしい能力」では採用するにあたって、就職先がどのような学習成果を身につけた学生を求めているのか、「本学卒業生の勤務状況」では就職した卒業生に関する学習成果の獲得状況を明らかにする。以下にこれらの結果を述べるとともに本学における「教育の質保証」の観点から一考する。

2. 方法

- (1) 調査方法：質問紙調査（郵送調査法）。回答は園長及び施設長に依頼した。
- (2) 分析対象者：平成27年度生（平成29年3月卒業）の就職先45園46名（幼稚園5園5名、保育所35園35名、施設5箇所6名）。回収率は52.9%であった。
- (3) 調査日：平成29年12月1日～20日
- (4) 統計解析：SPSS Ver.23を用いて、一元分散分析、因子分析、クラスタ分析を行った。
有意水準を危険率5%（*）、1%（**）、0.1%（***）とした。

¹ IR委員会

² 学生支援委員会

3. 結果と考察

(1) 採用するにあたって

1) 採用の際、何を重視するか

この設問は「採用の際、何を重要視されていますか。重要度の高いと思われるものを下記の中から選んで、枠内にご記入下さい。7枠すべてを埋める必要はありません。 a. 学歴・学校名 b. 人柄 c. 貴園への実習経験 d. 熱意・意欲 e 縁故 f. ピアノ・楽器 g. その他」である。回答があったa～g項目の度数を「園数%」で示し、表1に結果を示した。

表1 採用の際、何を重視するか

項目	園数%(n=45)
b. 人柄	100
d. 熱意・意欲	100
c. 貴園への実習経験	22
f. ピアノ・楽器	22
g. その他	20
a. 学歴・学校名	11
e. 縁故	9

すべての就職先が重視する項目は「人柄」「熱意・意欲」であった。「貴園への実習経験」「ピアノ・楽器」「その他」の項目を重要とする園は全体の約1/5であった。なお、「その他」にはキリスト教の理解、やさしさ・協調性、法人の理念や方針の理解と本人の保育観との一致、素直さ・方針の理解、受け答えがはっきりしていること、健康（心身ともに）、成績・採用試験の結果、心の強さ・生活体験・常識（あいさつ）、家庭環境、ピアノ以外の特技など自己PRできるもの、があった。「学歴・学校名」「縁故」の項目を重要とする就職先は全体の約1/10であった。このことから、出身大学よりも、志望する本人の人物を重視していることが明らかになった。

2) 採用の際、求める人物像

この設問は「採用するにあたって、人物について、何を重要視されていますか。重要度の高いと思われるものを下記の中から選んで、枠内にご記入下さい。8枠すべてを埋める必要ありません。 a. 積極性 b. 協調性 c. 責任感 d. 自主性 e. 素直さ f. コミュニケーション能力 g. 行動力・実行力 h. その他」である。回答があったa～g項目の度数を「園数%」で示し、表2に結果を示した。

表2 採用の際、求める人物像

項目	園数%(n=45)
e. 素直さ	87
f. コミュニケーション能力	84
b. 協調性	80
c. 責任感	80
d. 自主性	60
g. 行動力・実行力	49
a. 積極性	40
h. その他	11

求める人物像として「素直さ」「コミュニケーション能力」「協調性」「責任感」を回答した就職先は全体の8割以上であった。これらは保育を行うにあたり、子ども理解や保護者との関わり、同僚とのチームワーク形成に必要な資質能力であると考えられる。また、「自主性」では6割、「行動力・実行力」では約5割、「積極性」では約4割の就職先が重視すると回答があった。この結果から、就職先が採用する際に重視する

人物像の具体的な姿を明らかにすることができた。

3) 就職前に身につけてほしい能力

この設問は「採用するにあたって、就職前に身につけてほしい能力について具体的にお書きください。」である。その記述内容を以下の方法で分類した。

3)-1 分類方法

自由記述の分類方法は林悠子ら(2016)の論文⁴⁾及び奈良県教育委員会「高等学校生徒指導ガイドライン」⁵⁾を参考にして行った。前者ではマナー、礼儀作法、常識、挨拶、言葉づかいなどを「社会人としての能力」とし、後者では「①あいさつがしっかりできる。②時間をしっかりと守れる。③食事をしっかりとれる。④生活の目標や計画を自分自身でしっかり立て、それを実行できる。⑤身の回りの整理・整頓、掃除等が自主的にできる。⑥服装や頭髪を正しく整えられる。⑦社会や家庭、学校等のルールをしっかりと守ることができる。」などを「基本的生活習慣の確立」としている。そこで、これらの内容をア＝「社会人としての能力・基本的生活習慣の確立」とし、具体的な内容を(①～⑦)として示すことにした。また、イ＝文章力、ウ＝コミュニケーション力、エ＝専門知識・技能とし、これらを表3に示した。

3)-2 自由記述の分析

ア＝「社会人としての能力・基本的生活習慣の確立」a～y, z, af, am (n=28)は全体(n=41)の約7割を占めた。その具体的な内容は「⑦社会や家庭、学校等のルールをしっかりと守ることができる」(n=11:全体の3割)であった。「基本的生活習慣の確立」は、前述したように奈良県高等学校生徒指導ガイドラインにあることから、高校生の段階で達成することが目標となっている。さらに2年間、短大での学びを終え、社会人となる学生に対しても、就職先は礼儀や言葉づかい、マナー、あいさつなどを求めていることがわかった。

「文章力」z～ae, は全体の約2割弱を占め、その内訳は「保育士の記録」「指導計画の立案」「日誌」などがあつた。「コミュニケーション力」af～amも全体の約2割弱を占め、その自由記述には「保育士の仕事は人が相手なので、コミュニケーション能力を身につけてほしい」などがあつた。これらの能力も就職前に学生に身につけてほしいと求めていることがわかった。すでに別稿で、卒業生自身は短大での「コミュニケーション能力」「文章力」の学習成果の獲得は不十分であると認識していることを指摘した⁶⁾。

am～aoは保育者としての「専門知識・技能」であるが、就職前に身につけてほしい能力として具体的にピアノが弾けることを求めた就職先が多くなかったことは注目される。

以上のように、就職先が就職前に身につけてほしいと考える能力は「基本的生活習慣の確立」「文章力」「コミュニケーション力」であり、これらは本学卒業生が短大でもっと学んでおけばよかったと感じているものとほぼ共通していた⁷⁾。言い換えれば、就職先が求める学習成果に関して本学卒業生も重要性を認識しているものの、その獲得が不足している可能性が示唆される結果となった。

4) 保育者として必要な資質

この設問は「採用するにあたって、保育者として必要な資質について、具体的にお書きください。」である。その記述内容を表4に示した。

表からは、保育者に必要な資質として、次の項目を抽出することができる。a, bは子どもとの「関わりを楽しむこと」であり、c, d, eは「子どもへの優しさ」、「子どもが好き」であり、f, g, h, i, jは、「子どもの気持ち理解」、「寄り添えること」、「穏やかに接すること」、「子どもの受容」であり、k, lは「子どもに向き合う真摯さ」、「子どもや親の心の気づき」であり、m, n, oは「愛」であり、p, qは「子どもの安全・安心を考える力」、「命を預かる意識」であった。また、s, t, u, v, wは「明るさ、笑顔」であり、aa, ab, ac, ad, ae, af, ag, ah, ai, aj, ak, al, amは「共感」、「協調性」、「コミュニケーション」などであった。これらは子どもや保護者や他の保育者との人間関係を築くために必要な姿勢、態度である。x, y, zは「向上心、意欲」、an, ao, apは「専門性」であり、これらは保育の質向上の原動力と

表3 就職前に身につけてほしい能力

就職先	就職前に身につけてほしい能力	分類	
		記号 (番号*)	名
a	社会人としての一般的な自覚	ア	アⅡ 社会人としての能力・基本的生活習慣の確立
b	社会人としての責任感	ア	
c	社会人としての常識。幼な子を導く立場なので言葉遣いや靴の揃え方、箸の持ち方など普通のことがきちんとできること。	ア (⑦)	
d	社会人になるにあたっての心得	ア	
e	基本的なことですが、挨拶や社会人になる心構えなどです。	ア (①)	
f	社会人としての挨拶、笑顔、働くことの大変さ	ア (①)	
g	保育士と言うよりは一般的な社会人としての常識。正しい言葉遣い。	ア (⑦)	
h	社会人としての礼儀作法、ワードExcel PowerPoint等の資料作成、社会人としての身だしなみ=前髪の横の髪は束ねる。	ア (⑥⑦)	
i	基本的生活習慣、社会人としての自覚	ア	
j	基本的生活習慣	ア	
k	学生のうちはお腹の空いたタイミングで間食食事ができるが、就職と共に学べる時間は決まってしまうので、朝ご飯をしっかりと食べる習慣、早寝、早起き、朝ごはんの習慣を身に付けて欲しい。	ア (③)	
l	能力は就職してから徐々に身に付くしてもらっても大丈夫ですが提出期限を守ると言う点は学生から守り、提出期限に余裕を持って行えるように努力して欲しい	ア (②)	
m	アクティブラーニングと責任感	ア (②④)	
n	自分の頭で考え、判断する能力が必要である。	ア (④)	
o	教えるだけでなく、自分で考えて、保育の活動や、製作の内容などを決めることができるように発想力、提案力を身に付けて欲しい。	ア (④)	
p	自分を客観的に見る力	ア	
q	一般的な常識(掃除の仕方、挨拶など)	ア (①⑤)	
r	挨拶などの社会的常識	ア (①)	
s	礼儀作法及び言葉遣い	ア (①⑦)	
t	保護者やお客様先輩などに対する言葉遣いや態度。危険を察知する力。	ア (⑦)	
u	ビジネスマナー	ア (⑦)	
v	挨拶、礼儀、マナー	ア (①⑦)	
w	社会マナー、謙虚な態度、学びたいと思う意欲、笑顔など	ア (⑦)	
x	状況に合った言葉遣い。自分の立場を理解して責任を持つこと。言葉をいろいろ知り、使えること。	ア (④⑦)	
y	人としてと言われる事柄について。目を見て話をする。挨拶を元気に行う。年上(先輩)に対する最低限の態度等は身に付けておいてほしいと感じます。	ア (①⑦)	
z	文章力、社会人としてのマナー、専門分野を広く学ぼうとする向上心	イ (⑦)	イⅡ 主に文章力
aa	文章力、表現力、熱意、やる気を持ってほしいです。現場ではすぐ必要なことだと思います。	イ	
ab	文章力の向上	イ	
ac	文章能力(レポートはもちろん、保育士の記録、報告書類など多くを記載するため)。一般学(電話対応や報告連絡相談のやり方など)	イ	
ad	指導計画の立案、保護者対応、児童票、日誌等の記録の仕方	イ	
ae	書類の書き込みが多いので文章能力も高めてくれるとありがたいです。	イ	
af	コミュニケーション力。一般社会人としての常識	ウ、ア	ウⅡ コミュニケーション力
ag	保育士の仕事は人が相手であるので、コミュニケーション能力を身に付けてほしい。また文章能力も必要であると感じる。細かいことだが、字が綺麗であることも大切だと思う。	ウ、イ	
ah	コミュニケーション力は子供親同僚に対して必要	ウ	
ai	子供職員間でのコミュニケーション能力	ウ	
aj	積極性、素直さ、コミュニケーション	ウ	
ak	コミュニケーション能力	ウ	
al	様々な人と関わる力	ウ	
am	身だしなみ、立ち振る舞い、ピアノ	エ (⑥)	エⅡ 専門知識・技能
an	楽譜を見てピアノが弾けること。パソコンワードが使えること。一般常識	エ	
ao	障害特性の理解、福祉制度の知識	エ	

*①あいさつがしっかりできる。②時間をしっかりと守れる。③食事をしっかりとれる。④生活の目標や計画を自分自身でしっかり立て、それを実行できる。⑤身の回りの整理・整頓、掃除等が自主的にできる。⑥服装や頭髪を正しく整えられる。⑦社会や家庭、学校等のルールをしっかりと守ることができる。

表4 保育者として必要な資質

就職先	保育者として必要な資質
a	園児との関わりを楽しめること
b	子供と遊ぶことが楽しいと思える気持ちを持っていること
c	子供に優しいこと。常にアンテナを高くし、自己を高めること。
d	子供が好きである。包容力。コミュニケーション能力。心身の健康。
e	子供が大好きであること。コミュニケーションをとることが大切。
f	相手(子供、保護者など)の立場や気持ちを理解しようとする心を持つ保育者
g	子供の心を読むこと。ゆっくり見守ること。
h	保育のセンスを持ち合わせていること、子供に寄り添える力
i	表現力(豊かな表情や遊び心のある言葉遣い) →近年は笑顔が見られなかったり、子供になんて声かけをしていいかわからない子が多いです。子供の心に寄り添い子供の気持ち(見えない部分)を理解する力。保育所保育指針の理解。こんな姿を目指したいと言う狙いを持って保育をすること
j	自分の感情をコントロールして、常に穏やかに幼児と接すること。先の見通しや広い視野で一人ひとりを受容できること。
k	子供に対して真摯に向き合い、自主性を持ち、取り組める方を要します
l	気づきが1番だと思います。危険を察知する、子供の心、親の心に気づく、変化に気づいて反応する。
m	子供を深く愛する心
n	子供への愛情、コミュニケーション能力、保護者との関わり方
o	愛情深く子供に接することができる心、冷静に判断できる頭
p	子供の安心安全を1番に考える力。仕事をする上での行動力ややる気。多くの人と関わるためのコミュニケーション能力。一つ一つの仕事における責任能力
q	「命」を預かる「大事な乳幼児」を預かるということで専門職としての意識をしっかりと持つこと。そこから責任感も育つと思います。
r	子供たちにとってモデルとなる人間性、社会性が土台にあって、知識技術を身に付けて欲しい。特に児童養護施設で暮らす子供は敏感に職員を見抜いており、信頼関係に影響する。
s	明るさ、素直さ、保護者も子供も元気の良い先生(一生懸命さが伝わる先生)が人気があります
t	明朗快活、熱意、やる気、行動力、実行力など
u	率直さ、明朗性、責任感
v	明るく素直、感謝の気持ちを持つこと
w	笑顔であり、返事ができること
x	向上心や探究心があり、常に取り組む姿勢が見えること
y	仕事に対する考え方も含めた姿勢、忍耐力、向上心、素直さ
z	自分の目に見える特技(ピアノ、絵画など)のほかにまだ開花していない才能を誰もが持っているの、いろいろなことにチャレンジできるやってみたいやりたい意欲のある人
aa	心身ともに健康であることと共感性を持っていること。
ab	コミュニケーション能力、協調性、探究心、頭の回転の速さ、空気を読む力
ac	向上心を持って何事にもチャレンジしていくこと。人間関係を大切にする仕事なので、協調性、言葉遣いなどをきちんと持ち合わせている
ad	協調性と責任感、積極性
ae	人として率直であること。協調性を持てること。相手を理解し、共感しようとする心を持っていること
af	初対面の人ともコミュニケーションを取れる
ag	保育はチームで行うので、仲間と協調できる、人の話を素直に聞けることが大切だと考えています。
ah	一人ひとりの個性に合わせて対応する柔軟性、おおらかさ。
ai	人の気持ちに気づいたり、考えたりすることができること
aj	物事を柔軟に考える力、協調して行う力、周りの話を聞きアドバイスなどを受け入れる力
ak	命を預かっているということを自覚し忘れないこと。他者からの助言を受け入れ、意欲を持って取り組むことができる
al	受容、共感ができる人
am	子供の行動を観察し、様々な情報を得て保育に生かしていくこと。人に対して共感できること。
an	人間性と自主性
ao	一般常識(礼儀、態度の部分)
ap	専門家だと言う意識

なるものである。

この結果は寅丸尚恵ら (2010)⁸⁾ による「幼稚園教師に求められる資質能力」の調査（調査対象者：幼稚園教諭86名、保護者660名）の上位項目（「子どもが好きである」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」「子ども一人ひとりの個性を大切にする」）とほぼ一致していた。

（２）本学卒業生の勤務状況

１）因子分析

本学卒業生の勤務状況についての設問は「以下のあてはまるものについて、○で囲んでください。具体的な事例があれば、お書きください。１．子ども（利用者）との関わり ２．保護者（家族）との関わり ３．職員間の人間関係 ４．指導計画立案 ５．教材の工夫 ６．実践的能力 ７．勤務態度 ８．事務処理」である。得られた回答について因子分析を行い、結果を表５に示した。

表５ 卒業生の勤務状況に関する就職先評価の因子分析（主因子法、プロマックス回転）
（４件法：４＝よくできている、３＝まあできている、２＝あまりできていない、１＝ほとんどできていない）

	I	II	III	M ¹⁾	SD ²⁾
I 専門知識・技能（ $\alpha=0.876$ ）					
事務処理	0.922	-0.047	0.021	2.68	0.62
指導計画立案	0.879	0.239	-0.168	2.58	0.72
教材の工夫	0.747	-0.159	0.168	2.76	0.68
II コミュニケーション能力（ $\alpha=0.689$ ）					
子どもとの関わり	-0.194	1.019	0.037	3.29	0.52
保護者との関わり	0.205	0.500	-0.042	3.11	0.61
実践的能力	0.297	0.380	0.163	2.82	0.65
III 協調性（ $\alpha=0.659$ ）					
職員間の人間関係	-0.086	0.060	0.879	3.45	0.55
勤務態度	0.250	-0.016	0.528	3.55	0.55
累積寄与率（％）	38.57	53.97	64.78		
因子間相関					
	I	II	III		
	II	.447**	-		
	III	0.249	.323*	-	

1) 平均値

2) 標準偏差

* $p<.05$, ** $p<.01$

累積寄与率は64.78%であった。因子Ⅰは「事務処理」「指導計画立案」「教材の工夫」から構成されていることから「専門知識・技能」とネーミングした。因子Ⅱは「子どもとの関わり」「保護者との関わり」「実践的能力」から構成されていることから「コミュニケーション能力」とした。因子Ⅲは「職員間の人間関係」「勤務態度」から構成されていることから「協調性」とネーミングした。各下位尺度の内的整合性 α はそれぞれ0.876, 0.689, 0.659であった。

２）下位尺度得点

下位尺度である「専門知識・技能」「コミュニケーション能力」「協調性」の得点の平均値(M)と標準偏差(SD)及び、各下位尺度得点間の有意差を明らかにするために一元分散分析を行い、結果を表６に示した。

表6 下位尺度得点のM(平均値)とSD(標準偏差)

	M	SD
I 専門知識・技能	2.68	0.60
II コミュニケーション能力	3.07	0.47
III 協調性	3.50	0.48
III > II > I $F(2, 111)=23.93, p<.001$		

就職先からの評価は、「専門知識・技能」の平均値2.68、「コミュニケーション能力」の平均値3.07、「協調性」の平均値3.50であり、各下位尺度間の得点差は0.1%水準で有意であった ($F(2, 111) = 23.93, p < 0.001$)。Dunnnett T3による多重比較を行ったところ、「協調性」>「コミュニケーション能力」>「専門知識・技能」のように各群間に有意な得点差が見られた。4件法の中央値2.50から考えれば、「協調性」、「コミュニケーション能力」は就職先から高く評価されている一方、「専門知識・技能」はそれほど高く評価されていない結果であった。そのため、今後はこの点をレベルアップする必要があると考えられる。

3) 下位尺度得点による分類

3つの下位尺度「専門知識・技能」「コミュニケーション能力」「協調性」の得点を用いて、ward法によるクラスタ分析を行い、3つのクラス (= 似た特徴をもつ集団) を得た。clus 1 (第1クラス) は15名、clus 2 (第2クラス) は17名、clus 3 (第3クラス) は6名であった。

3)-1 「専門知識・技能」

「専門知識・技能」得点におけるclus 3 (n=6) の平均値3.22、clus 2 (n=17) の平均値3.02、clus 1 (n=15) の平均値2.07を図1に示し、これらクラス間の平均値に違いがあるかを検討するために一元分散分析を行った。

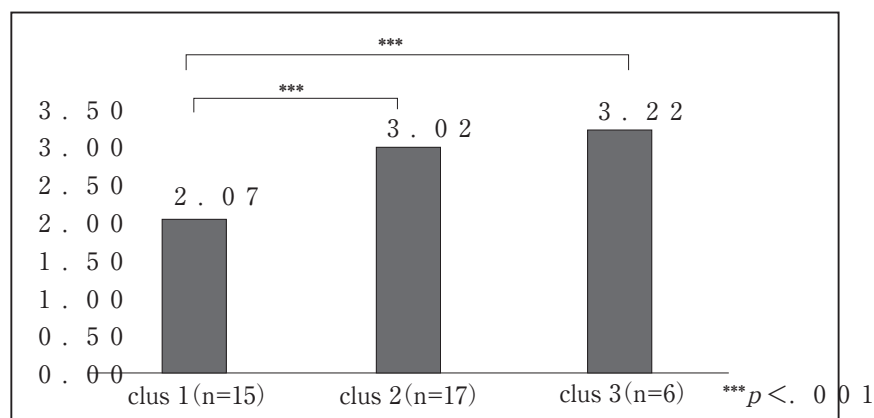


図1 「専門知識・技能」

分散分析の結果、群間の得点差は0.1%水準で有意であった ($F(2, 35) = 40.225, p < .001$)。さらに、Dunnnett T3による多重比較を行ったところ、clus 3>clus 1, clus 2>clus 1 のように有意差が見られた。すなわち、clus 1 (15名) は全回答数の4割を占め、その平均値2.07はこの集団の「専門知識・技能」が「あまりできていない」ことを示していた。

3)-2 clus 1 の勤務状況の具体的事例

前述したように、clus 1 の「専門知識・技能」の平均値は他のクラスに比べ、低い。そこで、clus 1 に対しては就職先からどのような具体的事例が記載されているのか、自由記述の内容を表7に示した。

表7 卒業生の勤務状況の具体的事例

clus1学生	具体的事例
a	*指導計画立案:保育士として”こんな保育がしたい”という想いはまだ持っていないように思います
b	*指導計画立案:期日までの提出がほとんど守られず、また写しが多く、その都度わかりやすく説明はしているがそのままだ多い。*教材の工夫:工夫が全然見られず、伝えるがそのままということが多い*実践的能力:その都度伝えていくが向上心が見えないととても残念に思う。*勤務態度:ほうれんそうをしっかりとこなって欲しい*事務処理:教えられても理解していないことが多いようで、必ずメモを取るように伝えたら少しずつできるようになっている。
c	*指導計画立案:文章や字を書くことが苦手なようで、まだ指導が必要*教材の工夫:工夫するレパートリーが少ない今後に期待*実践的能力:ピアノが苦手なようですが、練習をしている。もう少し積極性があるといい*事務処理:まだ一年目なので細かな事務処理のお願いはしていないため
d	*指導計画立案:とても時間がかかってしまう
e	*指導計画立案:月案、児童表などの書き込みが遅い
f	*指導計画立案:立案に時間がかかり期日を過ぎてしまったり誤字脱字が目立ちます*保護者との関わり:聞き取りが浅いことや伝達力に少し不安がある点が課題と考えられます*教材の工夫、ワンパターンとなりがち、自信をもって様々なことに挑戦して欲しいと思います*実践的能力:基本的なことは身につけています。より保育の知識を深めるために勉強を続けて欲しいと思います*勤務態度:体調不良による欠勤が続きました*事務処理:文章を組み立てる力がやや弱く誤字も多いため、何度も訂正を要することがある。期限のある仕事では進捗状況を何度か確認しないと本人が忘れていることもあるため、責任を持って取り組めるようになることがこれからの課題。
g	*指導計画立案:保育に計画はあまりなく、立案はしていない*事務処理:連絡帳を書いてもらう。文章の誤りや誤字など見られるが少しずつ身につけている。
h	*指導計画立案:いつのまにか日案をたててなくなった*保護者との関わり:ほかのクラスの保護者にはそっけない一面もあり、苦情となったことがある。
i	*事務処理:書き物に苦手意識がありますが、今後の課題としています。*教材の工夫:もう少しの努力を要するが、考えて工夫できるようになった
j	*事務処理:書類関係はまだ要領がつかめず、時間がかかってしまいましたが、期限を決めていくと、自分で計画を立て期限内に終わらせるようになってきました*保護者との関わり:言葉遣いがうまくできず、保護者対応は緊張してしまうようです*実践的能力:ピアノや製作準備は苦手なようだが、努力する姿は見られます。*勤務態度:言葉遣いが気になることがあります。
k	*子どもとの関わり:限られたお子さんには目を向けることはできているが、全体になると難しい。*保護者との関わり:保護者の方との連携が難しい*勤務態度:まじめに勤務しているが周りから行動、言動が外れてしまう
l	*実践的能力:判断能力に欠けている
m	記載なし
n	*勤務態度:身だしなみについては注意されることがある
o	*すべてポジティブ評価

下位尺度得点「専門知識・技能」を構成している「指導計画立案」、「事務処理」、「教材の工夫」の項目の具体的事例について述べていく。「指導計画立案」に指摘があるのはb, c, d, e, f, g, hの7名であり、その内容は「書くことが苦手」などであり、「事務処理」に指摘があるのはi, jの2名であり、その内容は「苦手意識がある」、「時間がかかってしまう」である。これらの学生9名(clus 1の全学生数の約6割)は文章力に問題があることを指摘されていた。また、この中のb, c, f, iの4名は「教材の工夫が見られない」などとも指摘されていた。

3)-3「コミュニケーション能力」

「コミュニケーション能力」得点におけるclus 3の平均値3.78、clus 2の平均値3.08、clus 1の平均値2.78を図2に示し、これらクラス間平均値に違いがあるかを検討するために一元分散分析を行った。

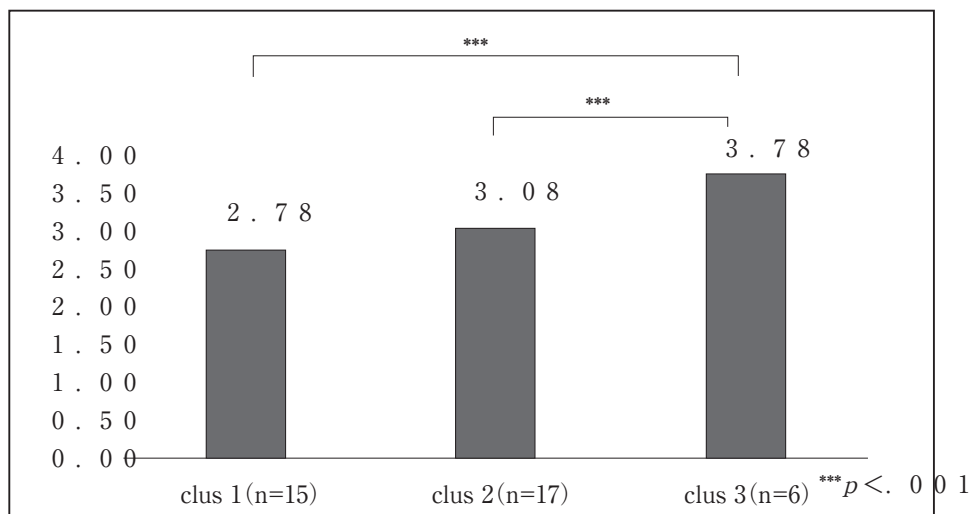


図2 「コミュニケーション能力」

分散分析の結果、群間の得点差は0.1%水準で有意であった ($F(2, 35) = 20.024, p < .001$)。さらに、Dunnett T3による多重比較を行ったところ、clus 3 > clus 1, clus 3 > clus 2に有意差が見られた。以上のように、「コミュニケーション能力」得点において、clus 1, clus 2のコミュニケーション能力は「まあできている」、clus 3は「よくできている」と評価されていた。

3)-4 「協調性」

「協調性」得点における clus 3の平均値4.00、clus 2の平均値3.35、clus 1の平均値3.47を図3に示し、これらクラス間平均値に違いがあるかを検討するために一元分散分析を行った。

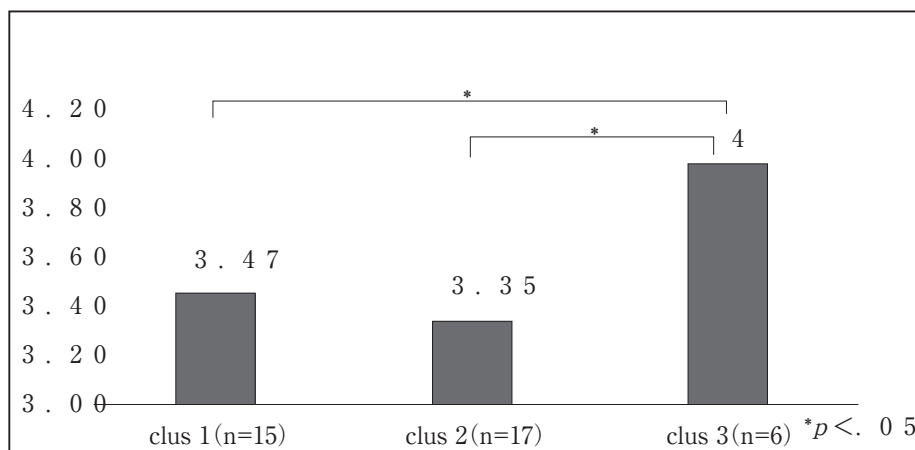


図3 「協調性」

分散分析の結果、群間の得点差は5%水準で有意であった ($F(2, 35) = 4.94, p < .05$)。さらに、Dunnett T3による多重比較を行ったところ、clus 3 > clus 1, clus 3 > clus 2に有意差が見られた。以上のように、「協調性」得点において、clus 1, clus 2のコミュニケーション能力は「まあできている」、clus 3は「よくできている」と評価されていた。

4. まとめ

以上の結果は以下のようにまとめられる。

- (1) 採用の際、何を重視するかについて、就職先の全てが「人柄」「熱意・意欲」を重視するとしていた。「ピアノ・楽器」は約2割、「学歴」「縁故」は約1割であり、これらを重視する就職先は少なかった。
- (2) 採用の際、求める人物像とは8割以上の就職先が「素直さ」「コミュニケーション能力」「協調性」「責任感」としていた。
- (3) 就職前の学生に身につけてほしい能力として、就職先の7割が「礼儀」「言葉づかい」「マナー」「あいさつ」などの「社会人としての能力」＝「基本的生活習慣の確立」を挙げている。就職先の2割弱が「文章力」「コミュニケーション力」であった。
- (4) 採用するにあたって、就職先が考える保育者として必要な資質は、子どもや保護者や他の保育者との人間関係を築くために必要な姿勢、態度であった。
- (5)-1 本学卒業生の勤務状況（「子どもとの関わり」「保護者との関わり」「職員間の人間関係」「指導計画立案」「教材の工夫」「実践的能力」「勤務態度」「事務処理」に関して、できているか否かの評価を因子分析した結果、下位尺度得点は「協調性」>「コミュニケーション能力」>「専門知識・技能」のように有意な差が見られた。「専門知識・技能」の評価は中央値付近であり、レベルアップが必要と考えられる。
- (5)-2 下位尺度得点のクラスタ分析の結果、3つのクラスタ（clus 1,2,3）が得られた。平均値の比較により、4割の学生が「専門知識・技能」が低く「コミュニケーション能力」「協調性」がまずまずの群、4.5割が「専門知識・技能」が高く「コミュニケーション能力」「協調性」がまずまずの群、1.5割はすべてが高い群であった。
- (5)-3 clus 1の「専門知識・技能」は「指導計画立案」「事務処理」「教材の工夫」から構成され、その前2者に注目して分析すると「指導計画立案」では「期日の提出がほとんど守られない」「文章や文字を書くのが苦手なようで、まだ指導が必要」「とても時間がかかってしまう」「書き込みが遅い」などがあつた。「事務処理」では「文章を組み立てる力が弱く、誤字も多いため、何度も訂正を要することがある」「書き物に苦手意識がありますが、今後の課題としています。」「書類関係はまだ要領がつかめず、時間がかかってしまいますが、……」などがあり、「文章力」の弱さを示す結果となった。

最後に、前述した卒業生に対するフォローアップアンケート⁹⁾と今回の就職先アンケートの分析結果を併せて、「教育の質保証」の観点から一考する。前者では卒業生は「社会に出て、短大でもっと学んでおけばよかったと感じたもの」として、「コミュニケーション能力」「文章力」などを述べていた。後者では「就職前に身につけてほしい能力」として「文章力」「コミュニケーション力」などがあつた。すなわち、学生が不足していると認識する学習成果は就職先が就職前に求めている項目と一致していた。しかし、就職先からの勤務状況評価では、「コミュニケーション能力」は、ほぼ「できている」と評価されていたことから、注目しなければならないのは「文章力」であることがわかった。また就職先の大半が「就職前に身につけてほしい能力」として「社会人としての能力・基本的生活習慣の確立」を求めていることも見逃せない。

このような結果を真摯に受け止め、具体的かつ早急な対策計画（P）を実行し（D）、再び評価（C）、改善（A）を繰り返していくことが、本短大の「内部質保証」となり、ひいては学習成果の社会的通用性の向上につながると考えられる。

引用文献

- 1) 短期大学基準協会. 平成31年度認証評価 ALO 対象説明会次第
http://www.jaca.or.jp/service/evaluation/training/training_alo.html (最終アクセス2018. 8. 31)
- 2) 中村麻衣子、入江和夫 (2017). 保育者養成校における学生の学修成果に関する研究. 鶴川女子短期大学研究紀要, 35, 33-38
- 3) 入江和夫・相澤京子・大見由香・中村麻衣子・福地昭輝・小林真由美・田中由起子 (2018). 保育者養成短期大学卒業生の学習成果の分析～平成26年度生のフォローアップアンケートと在学生へのフィードバックから～. 鶴川女子短期大学研究紀要, 36, 69-79
- 4) 林悠子・高橋千香子・高岡昌子・岩本健一 (2016). 保育者養成に求められる保育者の資質について (2) - 就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から -. 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要, 47, 71-80
- 5) 生徒指導ガイドライン／奈良県公式ホームページ. 1 2基本的生活習慣の確立.
http://www.pref.nara.jp/secure/63028/12_kihontekiseikatu.pdf (最終アクセス2018. 8. 31)
- 6) 7) 3) に同じ
- 8) 寅丸尚恵・西川正晃・濱田格子・濱名浩・林鎮代・森田健・矢田正一 (2010). 幼稚園教師に求められる資質能力－幼稚園本調査の結果分析－. 教育総合研究叢書, 3, 17-40
- 9) 3) に同じ

BULLETIN 36

CONTENTS

【Spirit of Foundation】

Missionary Tamasine Allen and Education of Homare Gakuen.....	K.Momose	1
A Lesson Plan for the Moral Education at Tsurukawa High School : About Mr. Jukichi Yagi, a Poet.....	K.Momose	11

【Paper】

“Qualities and Abilities to Be Nurtured” Understood by the Two-Year College Students Through Experiences of “Playing in Nature”	K. Irie	13
	A. Fukuchi	
	J. Won	
	M. Irie	
	Y. Miya	
	Y. Chikazawa	
Study Materials Effects of Students’ Self-Made Picture Books and the Practice of Storytelling : From a Perspective of Children’s Understanding of ‘Safety During Field Trips’	K. Irie	27
	M. Irie	
	A. Fukuchi	
	Y. Miya	
	Y. Chikazawa	
A Study on Learning Outcomes of Students at an Early Childhood Educator Training Institution(2) : Based on Self-Evaluation of Students	M. Nakamura	43
	K. Irie	
The Industry of the Sericulture in the Occupied Taiwan by Japan : The Advance to Taiwan by the Gunze Filature Corporation and the Musya Affair	S. Ikeyama	51

【Practice Report】

English Immersion in the Early Childhood Years : Suggestions Made from the Process of Establishing an English Immersion Class at a Japanese Kindergarten	M. Nakamura	59
	T. Hashimono	
	M. Yano	

【Research Note】

Analysis on the Learnings of Students who majored in Early Childhood Education and Care :	
Based on the Feedbacks from the Students, Class of 2016,	
and the Senior Students in 2019	K. Irie 69
	K. Aizawa
	Y. Omi
	M. Nakamura
	A. Fukuchi
	M. Kobayashi
	Y. Tanaka
Analysis on the Learnings of Students who majored in Early Childhood Education and Care :	
Based on the Feedbacks from the Employers of the Students, Class of 2017.....	K. Irie 81
	K. Aizawa
	Y. Omi
	M. Nakamura
	A. Fukuchi
	M. Kobayashi
	Y. Tanaka

執筆者

百瀬 和男（鶴川女子短期大学学長・教授）
入江 和夫（教授）
大見 由香（准教授）
中村 麻衣子（准教授）
相澤 京子（准教授）
宮 有佳里（特命助教）
近澤 友理（特命助教）
小林 眞由美（事務局長）
田中 由起子（学生支援室職員）
矢野 真里絵（鶴川幼稚園鶴川女子短期大学附属教諭）

福地 昭輝（特任教授）
入江 三津子（非常勤講師）
元 鍾彬（非常勤講師）
橋元 知子（元専任講師）
池山 せりょう（元特命研究員）

鶴川女子短期大学研究紀要 第36号

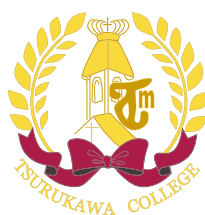
平成30年12月20日 発行

編集発行 鶴川女子短期大学紀要委員会
〒195-0054 東京都町田市三輪1135
TEL 044(988)1128

印刷所 (株)サン・メールサービス
〒195-0072 東京都町田市金井4-1-6
TEL 042(735)3126 (代)

BULLETIN

36



TSURUKAWA COLLEGE

2018